

昭和五年二月廿八日
三月一日
發行所

通類編

木内宗委



第三卷

キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン

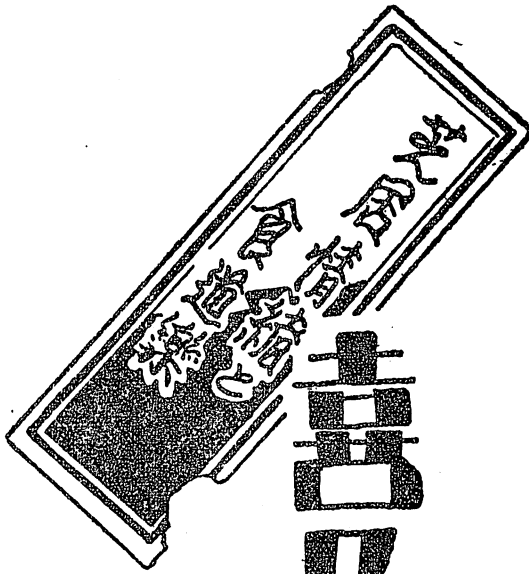
絶對着色なし



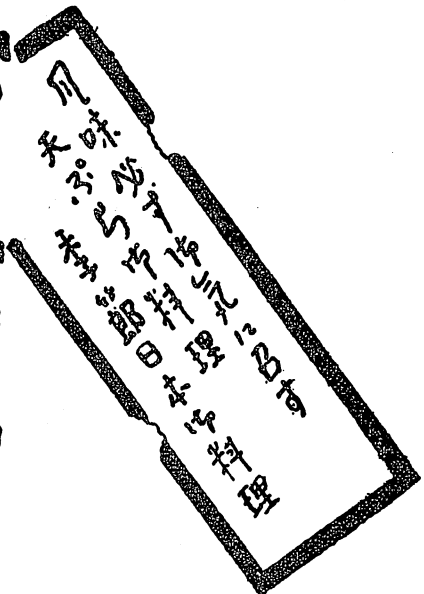
達用御省内宮
社會式株酒麥麟麒

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



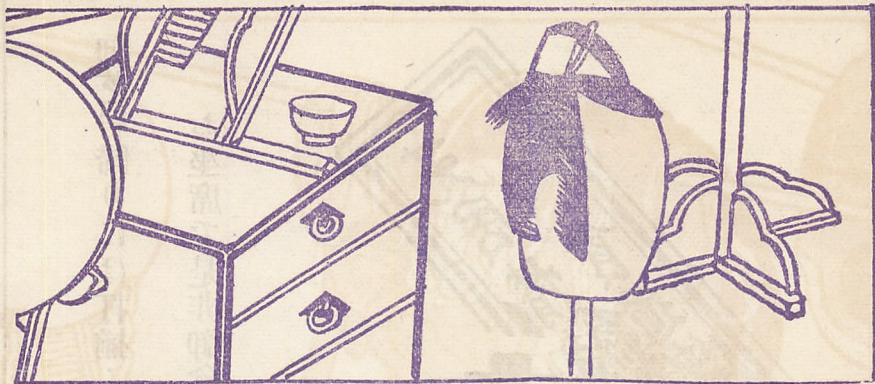
芝居屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀 昭和五年三月號

第五年 第四十二輯

◇表紙(木内宗吾).....

南木芳太郎氏所藏

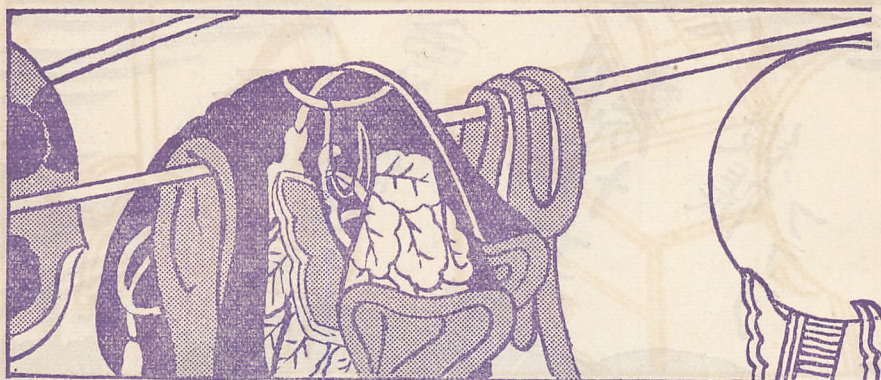
口
 中座の關西大歌舞伎◇魁車の山姥◇「花巴」延若の長右衛門、魁車の市之亟、「佐倉義民傳」魁車の女房おさん、延若の木内宗吾◇「薪荷雪間の市川」延若の三田の仕、扇雀の怪童丸◇「巴花」高津境内の場◇京都南座の東京大歌舞伎◇左團次の夜叉王◇「關羽」左團次の惡七兵衛景清後ニ關羽、松延の人丸◇「番町皿屋敷」左團次の青山播磨、松蔭の腰元お菊、「高野物語」猿之助の高師四郎◇「箱根靈驗覽仇討」左團次の瀧口上野、松蔭の初花壽美藏の勝五郎◇浪花座の第一劇場◇「日露戰爭」藤村の丸尾先生、壽三郎の乃木將軍「坂崎出羽守」小笠原の家康、石河の千姫「麗人」石河の頼子、山口の淺野正樹◇「日露戰爭」筑波のお桂、高尾のお袖「坂崎出羽守」壽三郎の出羽守◇角座の家庭劇◇「日露戰爭」の舞臺面「花か霞か」十吾の久保田、米津のおぶん◇「モボ爺とモガ婆」三樂の豊川、十吾の加代子、春日の瑠璃子「花か霞か」如月の靜子、十吾の吉兵衛、三樂の西村、天外の三浦、名村のA、賀川の齋藤◇樂天地の近代座◇五月のお傳、高橋の養父◇鷹治郎一座「梶久末松山」鷹治郎の梶屋久兵衛、福助の松山太夫、「石切梶原」鷹治郎の梶原平三、我童の梢◇神戸松竹劇場◇勘彌の切られ與三郎、幸四郎の關守關兵衛、其他

◇扉(薪荷雪間の市川).....

田中滿彦畫

道頓堀
 佐倉義民傳(中座).....(八)
 花巴(中座).....(五七)
 日露戰爭(浪花座).....(一六)
 坂崎出羽守(浪花座).....(一九)

◆光然殺しに就て.....高原慶三(一四)
 ◆實川延若の存在.....山上貞一(一二)
 ◆「關羽」その他.....倉田啓明(二六)
 ◆左團次一派の人々.....森 かのほ(四五)



◆關 羽 寸 考……………高 谷 伸 (五〇)
 ◆夜叉王を中心……………山 本 修 二 (五四)
 ◆佐倉義民傳に就て……………今 東 光 (六)
 ◆佐倉騒動の小考察……………國 枝 史 郎 (二)

本脚 あ ひ る 女……………門脇陽一郎 (五八)

◇絃阿彌一挿話……………(一七)
 ◇左團次歡迎座談會……………(二六)
 ◇ブレイガイド……………(五二)
 ◇劇 壇 時 事……………(四八)
 ◇さの太夫と語る……………山の内しける (五六)

▽所 感……………市川左團次 (二四)
 ▼お 願 ひ……………市川松菫 (二五)
 ▼師 を し た ふ……………文字太夫 (五七)

京 箱根靈驗壁仇討……………(三〇)
 都 關 羽……………(三五)
 修 禪 寺 物 語……………(四〇)
 番 町 皿 屋 敷……………(四三)

□三 月 の 劇 壇……………(七一)
 □文樂座人形淨瑠璃……………(五)

△挿繪カット……………田 中 滿 彦
 △編輯後記……………松 本 泰 三 (七四)

留旗 傳勝旗

劇部幕戲

綴帳

梅原商店

神戸市

楠利西門

番 五 一 六 一 町 元 電話

好評

御化粧用

好評

目立って賣れ出した

スキナ

あぶら取り紙

散歩にいやなあぶら取り紙
お忘れあるな

各地の化粧品店石鹸店に於て販賣いたして居ります。
尚道頓堀の各座の賣店にても常備いたして居ります。

お買求めの際はスキナと御指定を乞ふ。

大阪 スキナ屋
謹製

お芝居の

あいまには

高尚で趣味深い

寫眞のお道樂が

いッちよろしい!

寫眞機は

リリーカメラ

パールカメラ

アイデアカメラ

パールレットカメラ



大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

電話 南 (三三九六) 三番

本店

東京 本町二丁目

(カタログ進呈)



(川市の間雪荷蓐) 車 魁 村 中……姥 山
闘奮の伎舞歌大西關行興生彌の座中

域藝の彼きなるがらな佳ろことく往
てし鬚を袖の舞な爛絢 的の視注は
ろことたつ創つーを出演名たま



新 作「巴」の舞台面 魁車之市之延・若長の右衛門

春・三月 中座の舞臺から……

「佐倉義民傳」の宗吾

亡父譲りに團藏の型を参酌して満場を
唸らせてゐる……實川延若の木内宗吾

「佐倉義民傳」

魁車の宗吾女房おさん





「川市の間雪荷薪」行興生彌座中

(場の山柄足) 面 台 舞 の そ (上)
 仕 の 田 三 の 若 延 い し ら 人 の そ (中)
 扇 が す ま る て 見 は の ん さ 郎 三 長 の ん さ 兄 (下)
 達 い し 珍 か て め 初 は た つ な に 丸 童 怪 が 雀
 …… す ま る て せ ら 喰 と ヤ ン ヤ に 台 舞 な 者



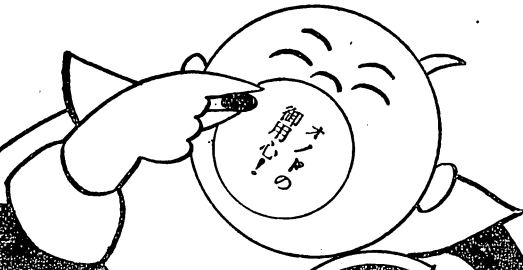
今満都の絶讃を博してゐる中座彌生興行大歌舞伎

「花 巴」

(上)……………高津境内の場(延若の長右衛門、魁車の市之亟)
 (下)……………同
 (扇雀の妹お小夜延若の長右衛門)



咳!



セキボ ンボ ンボ

スキーに
御執務に
お芝居に
御旅行に
いつも
おノドを保
護する
咳止の良薬
包製 華屋人
各埠薬店にあり

京東 和光堂 大坂

とあの歩巨人新・め讀

新興演劇

容内號二第・賣發日廿月二

—— 戲 曲 ——

裸 武 將 (二幕) 山上 貞一

遣された畫像 (二幕) 豐岡佐一郎

義勇兵の影 (二幕) ションオケシイ作
野淵 昶 譯

最明寺時頼 (三幕) 森田 信義

—— 小論文・隨筆 ——

「二五・二二」事件 (豐岡)

プロ演劇に就いての豐岡の小論文は不服だ (森田)

白髮一線 (山上)

編輯後記 (同人)

表紙繪 森亶次郎

錢五拾參金價定・頁餘百壹版菊

番四四三東話電 番四八二二一替振大 社劇演興新 區東市阪大 目丁二町越船 所行發



裂 小・具道小

貸衣裳

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます)

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

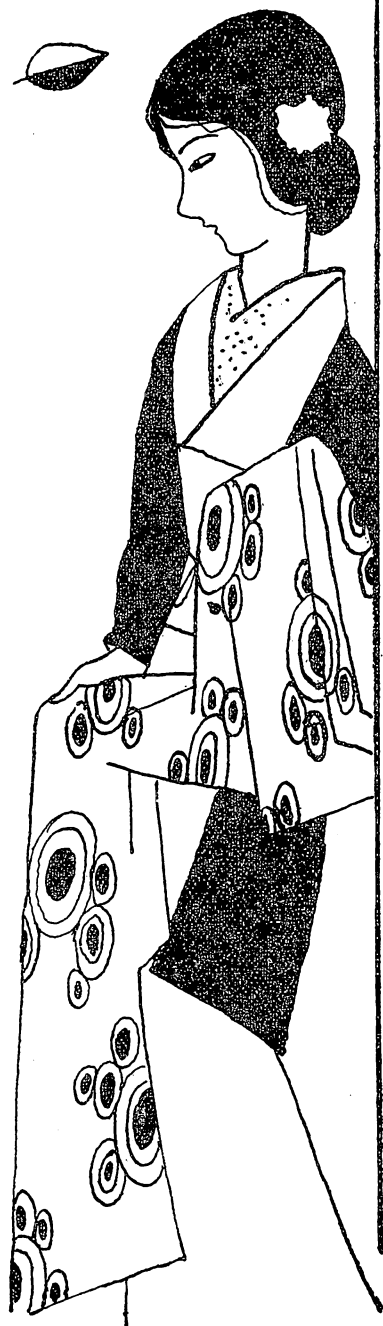
本店

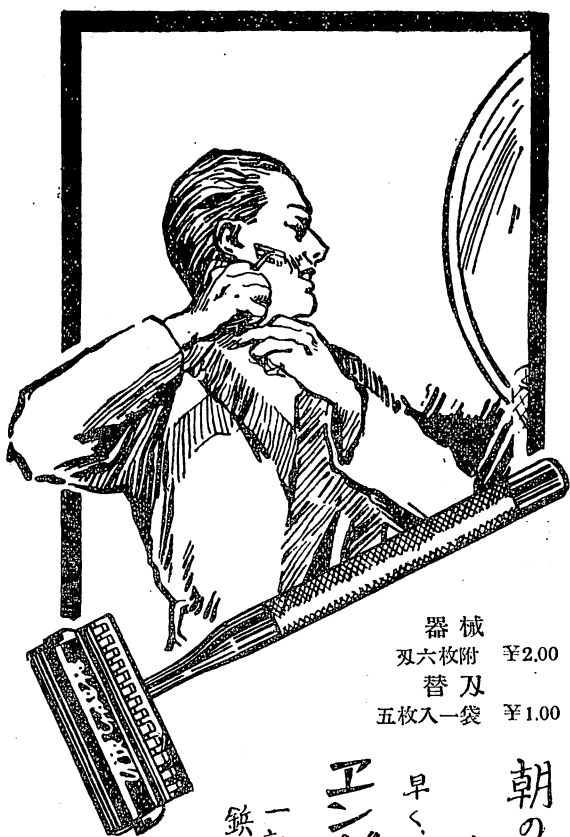
大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番





器械
刃六枚附 2.00
替刃
五枚入一袋 1.00

朝の清澄、

夕の歡樂よ！

早く、キレイに心地よい

エントス安全剃刀

一動作で三部分に分解、ネジもなく、
錆もない簡単さ

邦人の濃いヒゲは特に
よく剃れます

大阪市東區平野町 伊藤喜商店

堺筋出張所 淡路町堺筋 電話本局 三二七番・六番

電話本局 三二二番・四番
三二六番

京都・南座の東京大歌舞伎

左團次十八番の随一

「修禪寺物語」の夜叉王……………左團次



りよ伎舞歌大京東の座南條四・京

中 連 摩 薩 大「羽 關」内の番八十伎舞歌



次團左(羽關)清景衛兵七惡(左)

蓮松(前の石明女息の盛宗)丸人(中)

次團左川市 羽 關(右)

京の街を賑はす

東京大歌舞伎

四條に新装の南座舞臺から



「敷屋皿町番」 曲戯花杏
場の下王山

ぬせがいつも吸呼でフリゼ名の意得
.....るゐてせ見を技演

磨播山青の次團左



(下)「番町皿屋敷」

青山家座敷の場
腰元お菊.....松 葛

(中)所作事「高野物狂」一幕

高師四郎.....猿之助



京・四條・南座
東京大歌舞伎



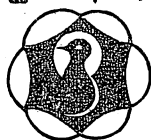
〔上〕箱根靈驗覺仇討

〔下〕同

飯沼勝五郎……………壽美藏
勝五郎妻初花……………葛

瀧口上野……………左團次

理料所



大阪市今橋五丁目

つる家本店

電話本局
二三
六三三
三一五
二六二
番番番

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話

東

特長

一五八〇番
一五八一番
二六五五番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）



生先尾丸の夫秀村藤 「争戦露日」

姿の臺舞場劇一第・座花浪の月三



夫茂原笠小……………康家川徳
薫河石……………姫千

「守羽出崎坂」右

薫河石……………子鞆原水
雄俊口山……………樹正野浅

「人 麗」左



本年最初の出演浪花座の第一劇場

(上) 「あひる女」

お 招……………筑波雪子
お 袖……………高尾光子

(下) 「坂崎出羽守」

坂崎出羽守成正……………阪東壽三郎





三〇年式新時代の尖端に立つ
浪花座の第一劇場

(上) 「坂崎出羽守」——出羽守邸居間の場

武士道の意氣に生き意氣に死ぬ出羽守の最期

(下) 「あひる女」

おお彌七.....藤村秀夫
お桂.....筑波雪子
お袖.....高尾光





劇庭家竹松は行興生彌の座角

面台舞の「争戦露日」(上)

吾 十……衛兵六田保久 「か霞か花」(下)
子喜左津米……ん ぶ お

桃の季節に

お家族揃ってー

必ずおえに召す大塚唯一の

日本御料理

名代割烹 西電気

天王寺公園

電話 戒
自 1334
至 1337



6"8" トイワホ 8"8" トルベズール 8"8" ンモーマ



ノ式新最共車兩ハ トルベズール・ンモーマ
世ハ格價ガスデ車動自ノ比無牢堅テシニ美優デ車箱汽ハ
スデ車イ安ノ一界
牢堅スマリア種二ノ箱氣六及箱氣四ハ 車トイワホ
アモ車ルア、ツリ走ヲ哩萬余十七今只デー界世ハ事ルナ
スマリ

店理代總西關 トイワホ
スターモ國帝

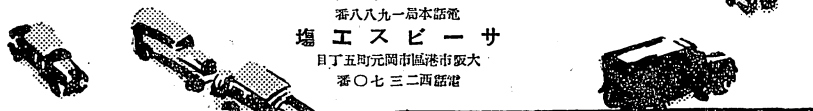
目丁五町修造區東市阪大

番八八九一局本話電

場エスピーサ

目丁五町元岡市區港市阪大

番〇七三二西話電





花の三月お笑ひは
角座の松竹家庭劇
どうですこのおかしいかたちは！

(上) 「色か霞か」

六兵衛……十子
村……三如月
西……三樂子

(中) 「モ木爺とモ力婆」

豊川新左衛門……三娘
妻加代子……十
瑠璃子……春

(下) 「花か霞か」

學生三浦……天
學生A……名
齋藤……賀川
學生賀……村
外

名古屋御園座を振出しに

巡業の旅に出かけた

中村鴈治郎一座だより

玩辭樓「**梶 久末 山**」二幕
十二曲の内

梶屋久兵衛……………鴈治郎

下の丸は

扇屋の松山太夫……………福助



歐米文房具
事務用品
製圖機械並附屬品
輪轉謄寫機
生々堂謄寫版
各種萬年ペン
諸印刷

黑田生々堂

大阪市南區心齋橋順慶町北入

電話船場(四一三六番)
振替大阪六八七九一番

帝キネ創立十週年記念映畫

原作 眞山青果氏 監督 志波西果氏

江戸城総攻め

帝キネ總動員オールスターキャスト

大朝五十週年記念一等當選映畫小説

大阪朝日新聞連載中 内田虎之助氏原作

踊る幻影

更新帝キネの意氣軒昂!!

一九三〇年度映畫界が強記すべき精進振り!!

『何が彼女……』以上のセンセーションをそゝるべきかは期して待つべきのみ。

監督 鈴木重吉 主演 高津慶子
撮影 三木茂 杉狂児



帝キネ提供



春・三月の舞臺姿のりと色

三平原梶「原梶切石」の郎治應るゐてせば喜を家劇愛の下天で藝至の品一下天 (左上)
 梢の原梶切石の童我るあ評定いまうもいまうたせさ驚吃で座中のきさこだ「梢」の前空そこれこ (右下)
 たがすだあの子信月五の物賣を婦妖一カピの座代近たし演出へ地天樂に販來のりぶ々久 (左下)
 門衛右傳父養のんでおの信義橋高とんでお橋高の月五るゐてせば喜をシアフ地天樂 (右上)



さ爛絢の華の居芝りよだ花の戸神



行興月三の場劇竹松

………伎舞歌大京東



彌勘田守……郎三與れら切の「郎三與」(左上)

衛兵關守關の「戸關雪戀積」(右上)
郎四幸本松(主黒伴大)

子獅子の彌勘と子獅子親の郎四幸の「子獅子連」(中)

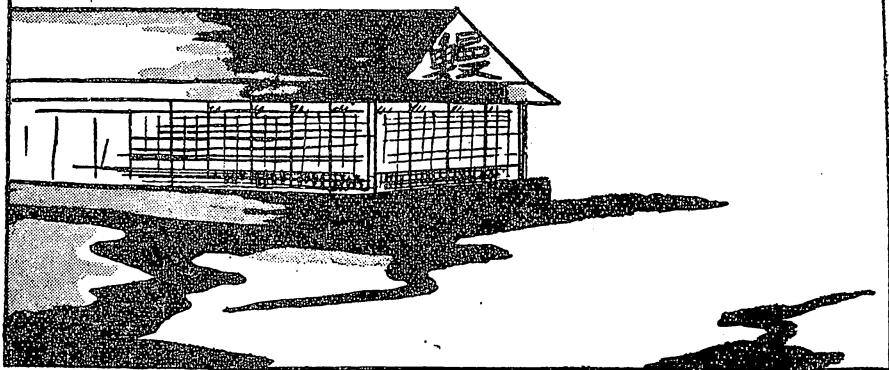
郎四幸…盛知言納中新・平銀屋海渡の「盛知碇」(下)

大阪名物
船生州



電話南

四八二〇
九五一〇
四八四四



アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキャラメル

チョコ
レート キヤラメル

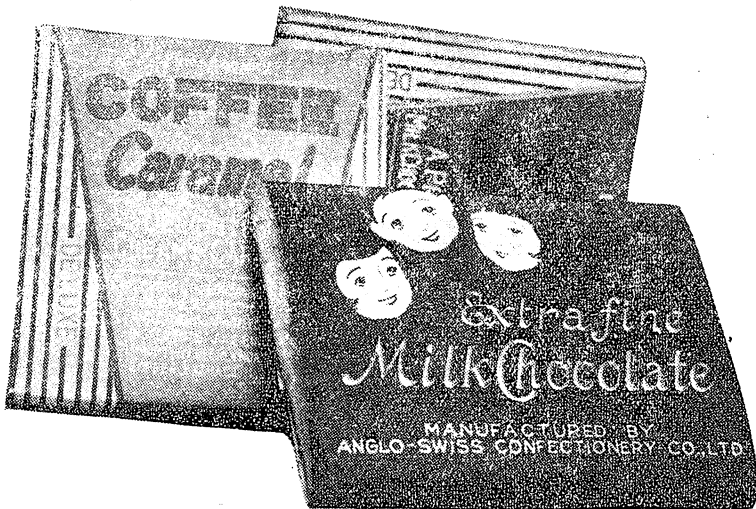
大阪市東區豊後町三番地

發賣元

株式會社

横山商店

電話東(94)二〇六一番



雜誌·究研劇演·刊月

二月號

演類通

第五年

第十四輯



佐倉騷動の小考察

國枝史郎

徳川時代は封建制度の完成期であつた。封建制度は土地資本制度なのである。大名は資本家であり大地主であり産業の管理者であり支配階級であり搾取者であつた。家老以下は資本家大地主である大名の番頭であり手代であり出張員であつた。

さうして農民は、それらの下にある労働者であり小作人であり被支配階級であり被搾取者であり寧ろ奴隸——農奴であつた。而して徳川幕府は、資本家であり大地主である大名の、その上に位してゐるところの更に巨大な資本家であり大地主であつた。

その徳川幕府の創始者、従つて完備せる封建制度の創始者、従つて完備せる土地資本制度の創始者たる徳川家康の、その家

康の懷刀、即ち、尤も狡猾なる番頭の本多佐渡守正信は、農奴なる農民に對して次のやうな見解を抱いてゐた。

『百姓は天下の根本なり、是を治るに法あり。まづ一人々々の田地の境目を能く立て、さて一年の入用作食をつもらせ、その餘を年貢に收むべし。百姓は財の餘らぬよう不足なきように治る事道なり。云々』

辛うじて生活出来る境遇に農民は置くべきであると云つてゐるのである。

果して農民は然ういふ境遇に置かれて甘んじ得られる人間であつたらうか。大體は然うであつたが、併し農民の本性はもつと別のものでもあつた。それに就いて、幕吏の田中丘隅が喝破

して居る。

『それ百姓といふものは、元來、性、僻にして凄じきものなり集る時はよく城を守り、散る時は郭を破る。黨を結ぶに及んでは、金銀珠玉を顧みず、生命をかへりみることなし。』云々と。

しかし長い間被支配階級として、被搾取者として、農奴として生活して來た農民は、それが習性となつて、容易のことでは——即、辛うじてゞも生活の出来る間は爆發しようとはしなかつた。しかし、搾取があまりに甚しくなり、生活しやうにも生活出来ないといふ境遇に迄壓迫されるや、その性、僻にして凄じいところを現はし、徒黨を組み抗爭した。百姓一揆を起したのである。

であるから、日本に於て行はれた、如何なる百姓一揆を検討して見ても、農民側には一點の欠點も無く、欠點は悉く大名側にあつた。



佐倉宗五郎事件に於ても然りであつた。

『……………(前略)賦税を重くし高一石に付米一斗二升を増しその餘之に準じて加税す。農民大いに苦しみ鄉村協議して遂に之を藩廳に訴ふ。藩廳之を擯けて曰く、畢竟村名主の取計ひ不都合なるより小民服せざるなりと手錠或は市に拘留せらるゝもの多し。その翌年又小物成(正租以外に山野池沼等に賦課せし雜種税)及び大豆、小豆の類に到迄過分の割付あり、之によつて小民曰く、斯の如き重税は古來よりその例無しと、然れども鄉村

の名主懇々説諭に及びしかば一度之に服し餘儀無く貢税致すといへども是より民の困窮甚しく父母妻子を養ふ能はず、家作田畑を賣り或は他國他領に轉じ年々戸口を減す。田畑は爲めに荒蕪となる。加ふるに、龜田荒地の検査を願ひ出づるも取上げ無し。且つ轉地したる民の未納税はその組合の民共にて辨納すべしと申し渡さる。殘る民共追々困難し一日も安堵の思ひなし。是に於て各郡の名主共議し藩廳に届けて此地を立退くに如かずと協議を遂ぐ。然れ共數村の戸口一時に轉ずる所無く己むを得ず其年も空しく過ぎぬ。然るに翌年に至り尙三度賦税を重くせんとす。(下略)……………』

これが木内宗五郎が將軍家へ直訴を執行したことによつて有名になつてゐる下總國佐倉の城主堀田加賀守正信がその領地三百餘箇村に加へた苛斂誅求の有様なのである。これでは到底生きてはゐられまい。しかし是程迄にされても農民達は激發を謹み各郡村の名主三百八十九人參集相談の上怨を呑み怒を抑へて支配の代官手代へ進物を送り、苦衷を訴へて手心を願つた。すると代官手代共はそれらの涙の進物を受納した上で願書を却下した。そこで今度は領國の農民全部が署名捺印した願書を郡奉行和田兵太夫、大野曾平、勘定頭稻葉十左衛門へ出した。が、その結果は叱られたばかりであつた。こゝに於て農民達の怒は激發し、非合法的手段たる、江戸上邸へ直接訴へるといふ直訴の形式を執ることとなり、印旛郡公津村の名主木内宗五郎が自ら進んでその任にあたること、なつた。そこで彼は江戸へ出て堀

田家の上邸へ願ひ出たが、堀田家の家臣のために遮られて望みを遂げることが出来なかつた。止むを得ずといふところで久世大和守へ駕籠訴訟をした。幸ひ願書は取り上げられたが、只行動をいましめられたばかりで望みを遂げさせてはくれなかつたもう仕方が無いといふので承應三年十二月二十日に將軍家が寛永寺へ御成の日に初めて將軍家へ直訴を執行したのであつた。

つまり佐倉領の農民一同は、宗五郎をはじめとして、あらゆる取る可き手續きを取つた揚句、萬止むを得ずして將軍家へ直訴を企てたのであつて、百姓一揆としては極はめて同情すべきものであり合理的のものであり、享保以後に頻出した百姓一揆とは選を異にして居り、この點が特に後世の人の同情を引いた次第である。それにもう一つ主謀者の宗五郎一族が、洵に無慘に刑殺されたことが同情を引いた。



後世に起こつた百姓一揆は佐倉騒動などのやうに穩健で手續を踏んだものでは無く、直ぐ竹槍や箆旗を押し立て、代官や城主へ武斷的に逼つたものであつた。

即ち享保五年には奥州白河の農民三千が白河城へ肉迫した。

寶曆八年には美濃郡山の農民が城主金森頼錦を攻め、遂に金森家を没落させて了つた。同九年には日向の兒湯郡の農民達が蜂起し、隣國から兵が出て辛く鎮撫した程であつた。この他枚舉に暇ない程起つた百姓一揆はいづれも支配階級（領主とその一黨）の暴力に對し被支配階級農民が同じく暴力を以つて直接酌

に反抗したものであつた。

では何うして佐倉騒動の農民達がそのやうに穩健な手續きを踏んだかといふに、この事件のあつたのが慶安から承應年間であり、この頃が徳川幕府封建制度の全盛期中の全盛期であつて領主（支配階級）の勢力が壓到的であつたこと、農民達が長い間の傳統で自分達が彼等の奴隸であるといふ誤つた認識から遁がれてゐなかつたことが原因である。後世に至ると、支配階級たる領主の封建的勢力が力を弱はめ來たのと、農民達が漠然とはあるがプロレタリアとしての階級的意識に目覺め、自分達の屬してゐる階級の當然の利益の獲得の爲めには、集團して暴力を揮ふことは正しい戰術であると解したが爲めなのである。



佐倉騒動に於て見遁してならないことが他にもある。それは領主の堀田正信が意識した封建的暴君として農民達を搾取したのでは無く、彼は無能で、氣の弱い、平凡な人間であつて、農民達を搾取したのは彼の家臣、即ち番頭手代たる家老や代官その他の者達であつたといふ事である。

この頃正信は徳川幕府の閣老であつたが、それとて彼が有能の人物であつたが爲めでは無く彼の父正盛（この正盛は前將軍家光の寵臣で、家光他界の際追腹を切つて殉死した）その正盛の忠誠の報酬としてさういふ位置に据えられた迄のものなのである。

人形淨瑠璃

▽三月の文樂座△

花賣女、文五郎の渚の方、大勢の子供。

東大寺の段

〔太夫〕相生太夫〔三味線〕歌助、芳之助
〔太夫〕貴鳳太夫〔三

味線〕友之助、友造〔人形〕文五郎の渚の方
門造の雲彌坊。

二月堂の段

〔太夫〕古靱太夫〔三味線〕清六〔人形〕榮三の良辨上人、文五郎の渚の方、傳之助の弟子僧、覺三郎の弟子僧、文作の先き供、大勢の供廻り。

「空也念佛」

〔太夫〕土佐太夫、さの太夫、文字太夫、綾太夫、大隅太夫、相生太夫、越名太夫、鶴尾太夫、町太夫、浪花太夫〔三味線〕仙糸、猿二郎、友平、猿太郎、猿糸、廣太郎、淺造、友作、友二、仁平〔人形〕榮三の禪才坊、文五郎の禪入坊、玉治郎の空也上人、玉七の

禪良坊、政龜の禪仁坊、玉松の禪正坊、紋十郎の空信坊、扇太郎の禪也坊。

中「妹脊山婦女庭訓」

脊山の段

〔太夫〕大判事、津太夫〔三味線〕友次郎〔太夫〕久我之助古靱太夫〔三味線〕清六

妹山の段

〔太夫〕定高、土佐太夫〔三味線〕吉兵衛〔琴〕勝三郎〔太夫〕雛鳥、鍛太夫、腰元、さの太夫〔三味線〕新左衛門〔人形〕紋龜の久我之助清舟紋十郎の娘雛鳥、文作の腰元小菊、市松の腰元桔梗、榮三の大判事清澄、文五郎の後室定高。

切「新版歌祭文」

野崎村の段

〔太夫〕大隅太夫〔三味線〕道八、ツレ團六、網右衛、清二郎〔人形〕榮三の娘おみつ、紋十郎の娘お染、文之助の下女およし、玉松の親久作、光之助の丁稚久松、玉七の久作女房紋太郎の油屋お勝、玉市の船頭吉松。

志賀の里の段

前「良辨杉由來」

〔太夫〕つばめ太夫〔三味線〕勝市ッレ吉庄〔八雲〕團二郎、福太郎、小庄、友駒、勝芳、清若〔人形〕文五郎の渚の方、紋司の光丸、紋太郎の腰元小枝、市松の腰元藤野、玉米の腰元春枝。

（この間三十ヶ年經過）

櫻宮物狂ひの段

〔太夫〕駒太夫、和泉太夫、島太夫、鏡太夫源路太夫、富太夫、文太夫、辰太夫、千駒太夫、長子太夫、陸路太夫、播路太夫〔三味線〕叶、勝平、八助、友若、友エ門、寛市、叶太郎〔人形〕玉市の吹玉屋、扇太郎の

佐倉義民傳に就て

今 東 光

三月の中座は、延若と魁車の『佐倉義民傳』だ。

この好きコンビネーションが、どんな演出をするかは甚だ僕の観劇慾を咬る。たと願くは舊來のお芝居でないことだ。

——かつて『佐倉義民傳』が、最近の小作爭議の頻發につれて上演禁止になつてゐるといふ噂を聞いたことがある。

その眞偽は知らない。しかしながら三月の中座に於いて延若と魁車によつて『佐倉義民傳』の上演される事實を見ると、どうやらこれは單に噂に過ぎないのであらう。

この如何にも『本當らしい嘘』が、多少とも眞實性を持つて吾々の間に傳へられる遠因は、少くとも一般の反對と反感とを挑發せずには措かない現行惡檢閱制の横暴極る彈壓の然らしむるところと言はずにはゐられない。

作家も、演出家も俳優も、興行者も、悉く現行檢閱制に對しては神經過敏になつてゐる否、神經質にならずにはゐられないのだ。それゆゑ前述のやうな噂が喧傳したものに相違ないのだ。それほどの惡法が、しかしながら『佐倉義民傳』にも加へら

れるものと見ても好いだらう。即ち、上演禁止ほどに到らないまでも、隨所に注意、または削除は免れないだらうと思はれる『佐倉義民傳』はあらゆる意味に於いて、現在の社會狀態に應じた作品とは言へない。たとへば權力ある領主（堀田侯）に對する反抗、乃至は怨恨を、妖怪變化などで表現した極めた素朴な手法などは、今日の大衆にとつて、どれだけの眞實味、もしくは宣傳煽動の價值があるだらうか疑はしい。御殿の場など寧ろ滑稽感を唆らなければ幸である。

にも拘はらず『佐倉義民傳』は、その自己犠牲に勇敢であつたといふ點だけでも充分に價值あるものだ。

従つて、延若と魁車が、如何にこれを『生かす』かといふ興味以外、彼等が該作品を上演する勇氣を若干、認めて好いと思ふ。

○

『佐倉義民傳』の木内宗吾の『運動』の特質は、堀田侯の虛政に反抗したのであるが、これは 力者の彈壓に對する反感だけ

が精神上の一撥であつて、純然たる農民一撥と言ふ心には、その最大要素であるところの『暴動』といふ特徴を缺いてゐるのだ。

僕も往年、成田地方に旅行して木内宗吾の事蹟を一寸調べたことがあるが、前述の如く木内宗吾にあつては、完全なる自己犠牲だけがあつて、大衆的暴動化はその痕蹟を見出すことが出来なかつた。

では、農民一撥とは何ぞやだ。

暴動を要素とした階級闘争である！。

嚴密に言へば農民一撥は、

強 徒
訴 黨
暴 動

の三要素を必須の條件とする。

従つて『佐倉義民傳』は遂に農民一撥ではない。しかしながらそれでさへ變態的農民一撥ではあるが、『佐倉義民傳』が一般の大衆に、より深く喜ばれたのは、それが變態的にせよ庶民階級の反抗心に受け入れられたがためであらう。

けれどもブルジョア陣黨の御用歴史家は、木内宗吾（佐倉宗五郎）を、農民一撥の好模範と言ふ。何故なら、それは輕舉妄動を慎しみ、總代を選出し、暴動に及ばなかつたといふ理由からである。しかしながら今日、無産階級の解放を心から希つてゐる者にとつては、斷じてそんなものが『好模範』でないこと

を知つてゐる筈だ。

○

僕等が一月中に市村座に於いて公演した『世紀劇場』で『忠次半世紀』を上場した。

僕は、天保八年の上州一撥の一派生として、國定忠次の赤城山暴動を取り扱つてみた。さうして斯る合理化は、當時の狀態に徴して正當であることを知つたのである。

それゆゑ『佐倉義民傳』は純粹の農民一撥劇とは言ひ得ないそれは藤森成吉君の『蜂起』などに比較すると、どんな人にもよく判るだらう。

しかしながらあらゆる運動を通じて、義民宗五郎の勇敢なる自己犠牲は要求されてゐる。この身を挺する覺悟なくして無産階級は解放されないからだ。

道頓堀に、この演劇が上演されるのも亦、時代の然らしむるところである。

演劇雜誌

歌舞伎

毎月一日發行
一部 三十錢

◇本誌と姉妹雜誌 ◇各地書店に發賣

發行所
東京市京橋區木挽町三（歌舞伎座内）
歌舞伎出版部



中座 三月興行

佐倉義民傳

江戸屋敷門訴より

堀田邸怪異まで

序	幕
堀田家江戸邸表門の場	堀田邸表門の場
門内の場	門内の場
表門の場	表門の場
門内の場	門内の場

『御願ひて御座りますす〜』
下總國佐倉領二百八十九ヶ村の百姓達が、領

主堀田上野の介の苛税に堪え兼ねて、年貢増納並に諸運上御免と、以前此事を願出て今は強訴の罪といふので獄屋に糾明の憂目に會つてゐる村長の放免を願ふ悲痛な叫び聲である、百姓達は晝から夜に至るまでも、願取上を待つてゐるのだがその熱誠も奸佞な家臣を動かす事が出来なかつた。

『縛られても動かぬぞ〜』

百姓達の叫びはいよゝ血を絞るやうだ。

此の間を調停して、上村半人、要人親子は百姓達の代表者として、木内宗吾を門内へ呼び入れて、改めて事情聴取といふ事になつた、宗吾の身を案じながらも百姓達は、上村親子に信を置く宗吾の言葉に信頼して宿へ引取ることゝなつた。同情ある上村親子の言葉で、宗吾も今迄の勞苦が酬ゐられるやうに思はれた。

二幕目 甚兵衛渡ししの場

渡し舟は殿重にも鎖でつなぎ止められてある唯一面の雪だ、嘉右衛門と長吉とが何か手配りをして去つた。

上へ更けて行く、催す雪も白妙に、樹毎の枝も時ならぬ、さくら堤にゆれ汚し、羽生の小屋の渡し守、寒さを浅く篝火や、雪はしきりに故郷も、今は肩身の

巾狭き、小笠を忍び絶へ難き、たどりて。

宗吾が笠で面を隠して出る、四邊を眺めて僅の間に荒果てた故郷の有様に、愁然となつた、小屋の戸をほとゝと叩きながら舟を出してくれといふ聲は世を憚る聲だ、甚兵衛は夜に入つては舟を卸されない、代官所の殿しい觸れで斷られて、宗吾はハット胸をうつた、小屋の中の主は甚兵衛と知つて、名を呼びかけて宗吾は小屋の内へ入ることが出来た、甚兵衛の物語は、言語に絶した民百姓の塗炭の苦しみ、悪虐ともいふ役人共の横暴の數々で、江戸へ發つてゐる僅の間にかうも虐げられるものかと、宗吾は堅い決心の下に起ちかけた。

命を捨てよう、お上の御裁許次第……

甚兵衛は宗吾の決心を聞いて感じ入つた、そして起ちかける宗吾に妻子の様子氣がムリで逢ひにござつたを此まへ戻されないと、甚兵衛も今更惜しくない命を的に舟を卸さうと、殿しいくさを斷ち切つた、人目を忍ぶ甚兵衛の簀は宗吾の身體を包んだ。

三幕目 岩橋村宗吾住家の場

夫宗吾の村の爲めに盡してゐる、その苦勞を思つては、妻のおさんもじつとしては居れな

つた、村々の飢饉我家ばかり安穩では過ごされ
ないの、奉公人は暇を出してその日に困る人
々には、當座を渡ぐものゝ外分ち與へて、四人
の子供を抱えてつゝましくも、父や夫の安否を
氣遣ふて、淋しく留守居をしてゐるのだ。

宗吾が吹雪をしのぎながら、やつと我家にた
どりついた、我家と云ひ條やつぱり世間を憚ら
ねばならなかつた、うさんながらも月を明けた
前へ夫宗吾の姿に、おさんは更なり、三人の子
供はひとばかりに縄ついた、出口へは嚴
しいお調べがある上に夜は渡しの往來も出来ぬ
のに……とおさんは不思議に思つたが、甚兵衛
の志で歸ることが出来たと聞いておさんは心
で甚兵衛を拜んだ、子供達はたゞ傾かしさに父
の膝により添ふてゐた、夫の無事な姿を見るに
つけて、おさんの思ひ出されるのは父の安否で
あつた、宗吾には義理ある養ひ親、縄目許され
ぬとは口が裂けても云はれない、二三日の内に
は村の衆と同道でお歸りなさる、と氣安く云ふ
ものゝ宗吾は胸をどぐられる思ひである。夫婦
二人は今更ながら村の難儀に歎くばかりであつ
た。

突然表から聲をかけたのは、幻長吉で強訴
の者と見たらば引つゝれと代官所より觸れ、
くさりを切つて舟で渡つた、罪人注進すると、

おどしかけたが、長吉もさうは云ふものゝお尋
ね者捕手の者に追はれて行つた。

宗吾は身の危さを知つて急に身づくろいを始
めた、縄ぬけの料人を詮議とあれば、自分もか
うして居られないからだ再び江戸へ登るのであ
る、おさんは先刻佛壇の中の封書を取つて開い
た文書。

『都へ又候國方の大勢の人に成り代り願に出
たれど、歸りの程も長ふ日數もかゝる故子
供等の事頼む』
今一通の去り状は惘然であらうと、恨み泣く
のである。

『訴へは領主の非道、お下に住む我々故、理
を以て非に落る、殊に高位の御方へ下賤の
身で願ひの爲めに近付けば、法を犯す大罪
人たとへ願ひは叶ふても、此身は重き咎め
を受け……』

跡に残る女房子に罪科の傍杖苦患をば見せな
い爲めの去り状で、憎いと思ふてやるのではな
いと、宗吾は腹の中て泣いた、おさんは夫の志
を反つて恨むて、夫の罪なら女房も一所に受け
やうと、去り状を引裂いた、宗吾も妻の真心に
感じ入つて、去り状は闇爐裡の灰にして仕舞つ
た、おさんの真心はいろ／＼宗吾に大事決行の
臍を固くさした、名残りを惜む妻や子を振切つ

て、眞夜中雪を踏み分け／＼江戸へ志した。

四幕目 印幡沼の堤

その夜、長吉は番太に追はれて迷廻つてゐた
陰に妻の鐘が鳴る、宗吾は船から堤へそつと上
つた、が前へぬつと立つたのは、十手捕縄を預
る、印幡沼の嘉右衛門であつた、が二百八十九
ヶ村の民百姓の難儀をすくふ命を的の木内宗吾
は、めつたに縄にはかゝらない、甚兵衛を呼ん
だ、オウとばかり甚兵衛は縄で嘉右衛門を減多
打ちに打のめして仕舞つた、重ね／＼の甚兵衛
の義侠に宗吾は、

『こなたの難儀を見するではなけれども、
二百八十九ヶ村の民百姓にはかへられぬ』
と甚兵衛の手を取つた。

五幕目 東叡山直訴の場

今日は將軍家綱公の御佛参といふので、物々
しい警戒張りである、袴の股立高く取つた侍
が、新門或は清水門などを見廻らうと左右に別
れ入つた。

一山これ紅葉の、東叡山吉祥閣、目も覺める
ばかりである、住職の先導で、家綱公、松平伊
豆守、井上河内守、久世大和守などの重臣それ
に扈從して一山の紅葉を賞して橋を渡り去つた

宗吾は今日を嗜れの、九曜星の紋附、脚絆の際々しい姿で、幕をかゝけて出る。懐中の願書を出して紅葉の枝の頭なるを折り取つて、願書に添え、今や還御を待つのみである。先刻の見廻りの侍は此の有様を見て、スア事とばらばらと宗吾にかゝつた、還御の聲の聞えたと同時に宗吾は、侍に縛られた、家綱公、伊豆守及び恩従の人々は以前の如くしづ／＼と出るのであつた、宗吾はあらん限りの聲を絞つて。

『上様に御直訴』

と叫んだ、伊豆守は目て知らして侍の手から宗吾の願書を出さしめた。

『乍ら以書面奉懇願候、一堀田上野の介様御領分下總國佐倉領二百八十九ヶ村農民どもへ新法御取立てとあつて御年貢上納二割増且又燹天秤糸車牛馬並に御傳馬過役其他合せて十三ヶ條の諸運上きびし御取立に相成先し御領主土井大炊頭様御取立の節とは頓て倍増に相當り百姓一同立行難く朝暮飢饉に迫り老若男女悉く路頭に迷ひ妻子を捨て他國へ走り、先祖累代の家を失ひ既に塗炭に苦しみ餘儀なく御國にて御奉行所且又それ／＼御掛りて再三奉教願候得共御取上げなく反つて御領主の意に背くの段不届きとあつて村方總代重立ちし者残不入牢仰附られ無據

と方残りの者江戸御邸へ御門訴申上る所是又御聞届無之不得止御領主の御不仁を奉訴候、甚々忍入奉候得共最早外に御願申上る御場所無之候故乍ら恐多事下民の身として上様へ對し奉御訴、訟申上候、右佐倉領年貢増納並諸運上御免御開濟相成候様御領主堀田上野之介様へ仰聞けられ候様、此段偏に御願奉申上候也。

下總國印幡郡公津新田上岩村百姓總代

木内宗吾

伊豆守は讀み終つて、佐倉の暴政に驚いたのである、伊豆守は願書をそつと懷中して、包紙を投げ捨てた、宗吾はその様子で始めて安堵の胸を撫で下した。

六幕目 佛光寺護摩壇の場

佛光寺の住職光然は宗吾の叔父である、宗吾が將軍家直訴の件で、國送りとなり妻子諸共重き罪を科せられんとしてゐるので、その命乞ひに奔走もしたが許されず、せめて子供達で助けたさに三七日の命乞ひの行法を、此護摩壇に籠つて修してゐたのである、今日も大雷雨はげしく起るは、明日の満願日に諸天感應のしるしてあらうと所化達は語つてゐるが、光然の目

に映る護摩の煙に殺氣を現はしてゐるのが怖しく思はれた。
慌しく駆け込んだ百姓十々の話では、親の見る目の前で子供達の首を斬つた慘虐さに、流石の光然も球数を引つくり、勘行の一切經を護摩の火中に投じて呪ひの形相物凄く刑罪の場所公津村へ馳せ行くのだつた。

大詰 堀田家寢所怪異の場

暴政の下にあはゆる慘虐を極めた、堀田上野の介は、宗吾妻子の忿怒の亡靈に悩まされつゞけて、熱病に冒されてゐるのである、側に仕へる腰元共も、上野之介のたゞならぬ様に安らけき日ではない。

上安執のかげはさながら枯尾花、薄手まねぐ種に出て、時にはあらで盛き亂る花のいろ／＼花車。

おさんの亡靈は腰元綾衣のかゝり姿で、上野之介を今日も又悩ました、狂ひに狂ふ上野之介は近臣の者を斬りきげた、分家堀田式部は、此上は將軍のおきをしに随ふて仁政を布き、宗吾の靈を佐倉の民の鏡として祀つて安執を嗜らさせやうと、上野之介を説いた、上野之介の迷歩も晴れて宗吾の赤心茲に始めて通じたのである、宗吾大明神とその靈は永久に、佐倉の地に尊まれてゐるのである。

春季十大作品

大佛次郎原作

からす組

阪東妻三郎主演

井上金太郎監督

直侍

林長二郎主演

井上金太郎監督

佐倉義民傳

月形龍之助主演

星哲六監督

天草四郎

阪東壽之助主演

城戸品郎監督

原田甲斐

市川右太衛門主演

白蓮女史原作池田義信監督

青春譜

田中絹代山内光主演

池田忠雄原作・清水宏監督

新時代に生きる

岡田時彦及川道子主演

佐藤紅緑原作・島津保次郎監督

麗人

栗島すみ子主演

野村芳亭監督

續篇 "母"

川田芳子主演

佐々木邦原作・五所平之助監督

愚兄弟賢兄

奈良真養、結城一郎主演

松竹キネマ株式會社



實川延若の存在

山 上 貞 一

幾年か前、だが今だに私は延若といふとすぐ思ひ出すのは、中座で『有職鎌倉山』が上場された時に、鴈治郎の佐野源

左衛門、延若の三浦荒次郎で、兩花道から一羽の鶴を射落して、矢尻を改めやうと舞臺に駆け出した時の、延若の凜然とした風姿である。爾來幾年、幾十度の舞臺で延若を見ても此時ほど力の張切つた壯絶な姿を見た事がない。

いまひとつ、延若に最も好感を懷かされた舞臺は『雁のたより』で三二五郎七の髪結姿である。いかにも上方歌舞伎の持つ優美さと濃厚さを満喫し得たと言つていゝ。

私は此の二つの特長ある印象を延長して、大阪劇壇に於ける延若の存在を探索してみたい。

よく、人は鴈治郎百年の後の延若の存在を問題にするが、鴈の存在に對比して云々されるのは福助であり魁車でこそあれ、延若ではないと思ふ。延若の存在は鴈の存在中にも別箇のものがあると解釋すべきではなからうか。よく幕内話として聞くことに、鴈治郎は元帥だが自分は師團長だと言つてゐる延若の言葉が内實外觀ともによく語つてゐると思ふ。

幕内の格式に據つて舞臺上の藝術が左右される時代は過ぎてゐる筈だが、未だ

にそれに禍されてゐるのは大阪劇壇だと言ひ得る。鴈治郎といふ偉大なる存在に對して、他はあまりに壓倒され過ぎてゐる。この事實に對して師團長格の延若の獨立——といふよりも寧ろ對立を希望した時代が、五年ほど昔にあつたと記憶する。結果から見ても、それは不幸に失敗したかの觀があるが、そのためにその後の延若の存在があまりに不振だと思はれる點が多いが、一上一下の人生によつて、この委徴は不思議でなく正に一下だと言ひ得る。その後著しい延若の發展を見ない以上即ち次は一上である。その一上が延若の存在を如何に強調するか。私の希

望はか、つて明日の延若にある。

實際論から言ふと、延若の柄は大阪俳優中での偉觀だ。立役として劇壇を覇握して行く人へのみ許される迫力がある。技巧も洗練されてゐる。藝の修練も決して人後には落ちない。それに特有の愛嬌がある。愛嬌は個性であつてつくり事ではない。それだけに藝の上に禍ひする事も尠くないが、決して持つてゐて損をするものではない。年配は正に俳優の頂上である。自家藥籠中の製品に研磨をかける手法なり批判なりが自分に解決する分別とゆとりが出来ゐる頃だ。

定評では延若の藝の範圍があまりに廣いので、機應さに於て著しい失敗はないが、またこれといふ適役、當り藝が乏しいと言ふ。

だから、延若を見捨てやうと誰が言ふ延若の存在に對して今日までに與えられた批評なり定評なりは、畢竟今日までの歌舞伎劇の約束の上から投げられた寧ろ偏見であると思ふ。

私が延若の『鎌倉山』での源左衛門を

いまだに忘れ得ないのはこの時、正に鴈治郎の藝に肉迫して、劣りのなかつた延若の存在を歴史的に記憶してゐたいがための好奇心に過ぎない。鴈に勝つ日、といふより勝つた時を延若のために憶えてゐたいがためだとも言ひ得る。だが、それも鴈との對比を考へてのことで私が延若の存在上強調したいことは、却て『雁のたより』に於ける三二五郎七、即ち純粹な大阪歌舞伎の立役としての延若の藝に就てである。

江戸歌舞伎の荒事には、尙閑取りをつけて眼をむかねばならぬいかつさを生命とするのに對比して、上方歌舞伎はやつしの上にも尙溢るゝ愛嬌のよさを求める鴈治郎は上方歌舞伎の傳統を改造して初代中村鴈治郎式の舞臺を主張した人であるのに對比して、上方歌舞伎の優美さ濃厚さを繼承し得る人は延若だと私は確認したい。

延若は、書卸し物の場合によく、こ、は何の腹で行き、こ、は何の役でゆけばよいと、自分の經驗上顯著な役柄を想起

して簡單に舞臺上の手順なり演技の手段をつけてゆくといふ話だがこの態度が上方歌舞伎傳統の態度なり調子ではなからうか。極言すればこの人に新作を提供する場合は決してあり物ではない。延若のために書いたものでなければいけないと言切ることが出来るのは、鴈治郎の場合と同斷だと思ふ。

されば延若の大阪劇壇に於ける存在價值は、純粹の上方歌舞伎劇の持ち味の繼承であり、又大阪に於ての新歌舞伎劇、即ち延若特有の新作物の開發に外ならない。延若の愛嬌がいかにも明るいものである意味より言つても、『明るい芝居』の要求されてゐる時代に、この優の存在が今日程度にしか重用されないことは不思議な位である。その原因は寧ろ延若が好機を失しつゝあることにもあらうが、又延若のために理想的な座付作者的な作家がないことにも據る。

私は昨日の延若を顧るよりも、明日の延若に多くの希望をかけてゐる。

光然殺しに就て

高原慶三

『佐倉宗吾』の通し狂言を中座の三月、實川延若氏がやるそうです。

それについて、何か書くべく命令されました。
『子別れ』、『渡場』、『直訴』の方は数度諸名優のを見たことがあり、その方面にはさだめて先輩諸兄が御執筆になること、存じますから若輩の私ども何をかいはんやです。こんどは通し狂言といふ以上はエピソードである『光然殺し』を加へて目さきを變へられる計畫と察せられます。

そこで、私は宗吾の本筋よりはむしろ光然の件りについて、ちよいとした感想を申上げやうと思ひます。

實申しますと、私はこの光然の件りを芝居で見たことがないのですが、何だかあの怪奇な草双紙立ブラッテスト、シーンに興味をひかれて、二三の書物（どうせ我々風情の藏書ですから

一般に普及された活字本ですが……）を抄覽して見ることにいたしました。

まづ最初に繙いたのは坪内博士の『少年時に觀た歌舞伎の追憶』でした。それには確かに三代目豊國の田舎源氏風の錦繪が寫眞版になつてゐました。

中央に、伊右衛門型のヒボコンデリーの悪殿様風な人物が一刀をぬいて、お部屋様風の女性の首根つ子をつかまへて突立てゐる、右手に中老風の女性の首つ玉に蛇か纏いついてゐる、うしろは秋草の屏風に陰火が燃えて、右手の几帳の前に磔刑になつた當吾（即ち吾宗）の亡君が、血のりを頬に塗て浮かび上てゐるといふ非常にグロテスクな陰慘な畫面です、むろん中央の悪殿様は九藏の似顔で織越大領、當吾は小團次の似顔です。また同書中に草双紙の光然殺しの挿畫が寫眞版になつてゐます。

これは『櫻莊子後日文談』と明かに文久元年八月守田座の河竹新七補筆の改作物で、雛助の幻長吉が、當吾を磔刑にした槍の穂先で、當吾の叔父の光然を殺しにかゝつてゐる。その太股を光然が噛み切てゐるといふ殺し場です。淺倉無聲氏の『日本小説年表』に據りますと、繪は歌川芳虎とありました。

モウひとつ光然（市川小團次）と幻長吉（中村鶴藏）の似顔繪があつて、例の當りセリフが書かれてあります。が光然の分だけを抄録しておきませう。

つたへきく、三井の頼豪は恨みの一念、鼠と化し一切経を喰ひさきしか、よしや行力送るとも我無念なほ劣りはせじ空中飛行の魔王たち力を添えてたゞ(印を結ぶドロく)になり……蛇出て鶴藏にまきつく、小團次見て)今ぞ念願成就なせしかアラうれしやよろこばしやな。

年表を見ますと、小團次はこの年、文久元年二月同じ守田座で『相生源氏高砂松』で頼豪阿闍梨をやつてゐます。

さだめて頼豪が成績がよかつたので、新七に頼んで、無理強いに當吾の叔父なる佛光寺光然なる人物を拉し來て、世話の頼豪阿闍梨として加筆してもらつたものではありますまいか。

この時の小團次の注文は嘉永四年八月の『東山櫻莊子』が田

絃阿彌一挿話

四ツ橋に文樂座が復興されて、大入つゞきで三の替はりを開けるその彌生興行に名人越路と絃阿彌の追善興行を営むといふについて絃阿彌翁の風格を偲ぶ面白い話を御紹介いたします。

その頃、えゝ、明治十五年といふかなり古いときで、絃阿彌老の廣助は當時名うての太夫、柳適太夫の合三味線を弾いてゐました。今文樂で名を賣つてゐる仙糸が幼年七歳の頃のことですから、大阪もまだ暢びやかなときで

舍源氏の世界になつてゐるので『相生源氏』とダブル廣があると思はれます。と見て、特に田舎源氏の世界を避けてゐることも注意すべき事柄にない詮索をちよいとやつて見ました、ほんの命令の責ふさぎ一笑に付して下さい。

とにかく、正本仕立の草双紙として、前の『東山櫻莊子』後の『櫻莊子後日文談』共に當時に在ては世間の視聽を動かしたものと思はれます。何卒こんどの上演に際しても官憲の許す限り、草双紙風な古拙味、所謂グロテスク趣味を思ふさま發揮して、頂くやう私自身は非常に期待してゐる次第です。

した。翁の大塔宮、中將姫、等はヤンヤと唸らせたものであります。彦六座に勤めてゐました明治二十一年の一月興行にかなりの大入をつゞけてゐましたが或る日非常な風の甚しい日でありました。前狂言の「忠臣講釋」が大受けにうけて、大落しのしまひ頃にバツと舞臺に煙が上りました。それツと云ふので弟子の仙糸は身軀は小さいが、すばしかつたので師匠の湯呑みを持つて舞臺にかけつけると、もう火は一杯にまはつてゐました。廣助さんはそのまゝ樂屋へかけこまうとしましたが、たゞ煙の霞、火の渦で、とうてい叶ひませぬので、舞臺姿のまゝ、えゝ肩衣を着たまゝです。

(この話は愛弟子の仙糸さんから聞いたもの)(其點仙糸さんへ謝辭を述べておきます)

右手に三味線、左手に撥を持つて松屋町の自宅へ歸つたんです。あとからの話ですが、その時の恰好は今日の漫語でも聞がけない、うれしい形ちであつたそうです。そういつた風流味たつぷりの人でしたが藝にかけては随分と峻烈な方でした。酒は一滴もいけぬといふ舞臺人の例を破つた人であつただけに情の厚かつた人です。上つ方にも至藝を愛されて後年近衛公から「名庭絃阿彌」の名を許されたものでしたが大正十三年夏なかばにして不歸の客となられました。

浪花座 三月上演
田中總一郎作

日露戦争

十 一 景

その一、或小学校 小さな町の小学校の教室

五六十人の生徒の前に、丸尾先生が地理の講義をして居る。壁にかけられた歐亞の地圖、風雲急な國際關係は、既に無心な子供達を導く鞭の先にも閃く。東海に雲を呼ばふる龍に似て浮ぶかの如き帝國は、しかし、何とまあいともさうやかなる存在である事よ三國干渉のおくび未ださめぬの時、切つて放された宣戰の勅史である。あはたどしく入つて來た校長先生は、一枚の號外と、丸尾先生召集の令を高らかに讀み上げた。熱狂の昂奮である。

(間奏歌「征露軍歌」ほとばしる國民一齊の歌聲……)

その二、召集令 號外賣りの鈴音は飛ぶ。走せ、交ふ——リンリンリン、リン。國民の

した海軍々人の留守をまゐる少年がある。ゆかりの有無にかはらぬ、同胞愛が、すべて出征兵士の留守宅に向けられる時代である。少年は一杯の水を汲むにも、優しい人々の情に涙ぐむのだつた。「せめてあの子のお父様だけは、戦死させたくない。」と云ふのが人々の心であつた。「萬歲」の聲に送られて、出征せる杉山が來かゝつた。病父看護の爲に歸京中の妻を待つ機会も無く、彼は人々に送られて戦地へ行かねばならぬ。いたはる近隣の男女に對して、何も言ひ残す事も無いと強く言ひ切らねばならぬ悲壯なる彼であつた。丸尾先生を送る一羣が來た。一ツに合した此二組の歡呼の聲が距つた頃、心も空の人力車で駆けつけて來た杉山の妻を、直に棧橋へと追ひかへす

端の人々の心がむしろあせつて居た。

(間奏歌「出征の歌」)

その三、出征 ひた／＼と暗い字品の港は

淡い星夜に暮て居た。空の星の様に、海に映へる灯もまた暗い。港に浮ぶ運命の様に黙々とそ／＼立つ彼岸の山——而して見送りの人々は寂として聲も無い。蕭々として進む兵士。出征の兵士。赤練と銃を包んだ自布と……國民の緊張を一段足に踏みしめて、見よ。我等の兵士は海を越へ行くのである。杉山は居ません杉山の妻です。甲走つた女の聲。そして「あなた——軍刀にすがり付いた女の姿である。而し、流れ流れてやまない時の進みの様に、満洲へ、満洲へと、隊伍は亂れずに進むのである。」「父は、父は死にました。遺言は御立派に、御立派に——」暗い海と、ほのかなる星夜に浮ぶ棧橋の女の聲は、行く者、送る者の胸の奥底にしみて入つた。

(間奏歌「陸軍軍歌」)

その四、旅順攻圍軍 荒廢たる戦野。血なまぐさい夜を、思ひ出した様に光輝が輝す

アンルルルル——砲彈。ピツピツピツピツ——銃彈。對戦した人々は、蟻の如く土の中を這ひ廻る。恐怖と戦慄と焦燥との長い

連鎖——人々は、此中に荒びた空氣の地獄よりも凄じい沈黙を感じてゐる。杉山は遂にたへられなくなつて、小隊長藤田少尉の許可を得て、單身、無事に鐵條網を破壊して歸つたが、敵弾は、任務を果した彼を射抜いた時に、突撃の號令は全線に行き渡つた。聞け、明澄な進軍喇叭の音を。戦友を捨て、去らねばならない丸尾上等兵、森田少尉——更に、更にいたましく、一人死なねばならぬ杉山の姿——光弾はひらめき、銃火は更に劇しく

(間奏歌「婦人従軍歌」)

その五、野戰病院 甲斐々々しい將士看護婦の愛の手に育まれて、一時も早く戦地へ歸らんと希ふ人々の群である。是等傷つける干城を見舞ふ乃木大將の姿は、父の様に慈愛に満ちて居る。感激する傷兵の前で、大將乃木にもたらされた傳令の報告は何であつたらう。蒼白となつた津野田大尉の顔色に引きかへ、眉一つ動かさず其暗きを聞いた大將の去つた後、實に、保典大尉の爾靈山高地に於ける戦死が公報されたのである。彼は今度よくなつたら、乃木大將の爲に死ぬ。誰れか叫んだ此一言は枕をならべた此一群の、すべての心から一つにな

つて發せられた言葉であつた。新しい擔荷が来た。森田少尉と丸尾上等兵である。致命傷の丸尾は、少尉殿が重傷だ。先に、先に——と叫び乍ら、既に意識を失つて居る。其ポケットに血ににじんだ未開封の手紙があつた。妻からの其手紙。それを讀み上げる看護婦長の聲は次第に曇つた。——立派な男の子です。何と名前をつけて下さるでせふか。戦争中に生れた子供ですから成可く強かな名前を——

(間奏歌「軍神」橘中佐)

その六、決死白鵞隊 戦線の運命、全線の敗退、ひいては、帝國の興敗を決する最後の試みである。余は、諸君に、死んで呉れと希ふ——乃木大將の聲は悲壯にわなないた。聞く者の胸は、其聲にあふれる心の泉にひたひたとひたつた。處定の地點に達する迄故なくして發砲せざる事。後退若くば隊伍に後るゝものは斬り捨てて宜しき事。軍規は峻烈である。諸神に誓つて再び歸らぬ阿修羅の荒地に立ち向ふ一團の兵を見送つて、大將乃木は動かない。閣下。閣下。津野田大尉の聲も耳に入らぬ大將乃木は、遠ざかる歩調の聞へなくなる迄舉手の姿で動かない。

その七、水師營の會見 史上、あまりに著名な場面である。大將乃木と、ステツセル將軍。一本残るなつめの樹が、赤い太陽に照されて、細く、まことにいたいけな影を、灰白い石塀に投げて居る。攻防兩雄の、史上あまりにも雄大な一頁のコマ繪として、何と荒びたる風景であらう。銃砲の音絶へた空氣は、何處となく物忘れしたやうな空虚をほかりと聞いて居る。

(間奏歌「戦友」)

その八、奉天戰 ひとつそりとした夜の中。遠くの銃音が、さながらあられの様にひびいて来る。暗い寂しい雜木林の中である。其處此處に忘れられた様な棺、土饅頭——墓地である。星も無い夜の中に、敵膽を寒からしめた我挺進隊の一群が、馬をつなぎ、銃を休めていこつて居る。さめんと、むせぶやうに吹きおこる尺八の音がある。戦死した友の靈に捧げやうと云ふ至誠の一節である。「あいつは尺八が好きだつたよ。」彼はさう云ふ。葦が欲しいな。寂しい聲。ほら、一本ある。二人でわけてのまうよ。「甘さうだな。」「うむ。うまさうだ。」輪座した中央に、沸々とへたつ肉の香がたゆたつ

た。さ、初めやう。一同が火のまはりに集まつた時、いざ進軍の喇叭の音が湧へかつた。「すはや」靴が散つた軍刀がなつた。而して、一瞬の後、カッカツと遠ざかる馬蹄の音に、一點少しの亂れも無い挺進隊であつた。

(間奏喇叭「海行かば」)

その九、法庫門 休戦。しかし、未だ、人々の心の緊張は解けない。勝利に續く勝利とは言つても、わづかに、滿洲の地の利を占めたにとどまる進軍にすぎなかつた。しかも、此亞細亞の一角の正義と權利を守る爲に、流された同胞戦友の血と涙の價の何と多い事か。法庫門外に映へる斜陽は、血ぬられた様に赤々と、「傷病兵戦死者の碑」と生々しい文字を修々とそめて居る襟を正さぬ者一人も無い風景に、點景されたる雄大な姿は、實に、乃木大將である。戦塵をくどつてさびたる弔辭の聲は、しかも天上地下、四海國土の果に迄、たゆみなく流れ渡つた。血涙をしぼり、胸をえぐつた其聲實に其聲こそ、偉雄乃木希典自らの弔辭では無かつたらうか。

(間奏喇叭「國の鎮め」)

その十、ボオツマス 二星霜の交戦の幕を閉

ぎやうとする會議である。萬國の視聽を集めた會議の席は、ガラスの間でもなければ白聖館でもなかつた。ボオツマスの空倉庫の二階の一室。むき出しの壁には、自然の描いたみにくい地圖の國境線が、無限にちなく混亂のしたうづて居た。ほこりと塵をすつた床は、彼我全權の靴の下で、時代めいた反響を曇らせた。有り合せの机と椅子。其上に、十二枚の締結書がのべられると、我が小村全權は、一枚毎に新しいペンを取つて署名した。その十二本の、十二本のペンがおかれた時、相會した一同の眉宇におもむるに解て行く和かきがあつた。歡喜したロオゼン男爵は立ち上ると、明るいフランス語で喜びをのべ、さて云ふのだつた。「願はくば此簽友と握手して下さい。固く、固く結ばれた此手。此手の上に飛び散つたシヤンパンのしぶきは永劫に變らぬ東洋の平和と、一躍五大國の列に上つた東海の一島國の權位を固め強める雨の様にもひたひたとあふれた。椅子の音、靴の音、さうして兩大權と其隨員の最後の影が此記念すべき室の戸口から出て去つた時、息もつかず、古びた壁にはりつて陪觀して居た市長以下數名のアメリカ人は、餓鬼

の様に飛びかゝつて、記念すべき和議締結に使用されたペン、インクをうばひあつた

(間奏歌「凱旋」)

その十一、或る小學校 旅順攻圍戦に悲壮な名譽の戦死を遂げた丸尾上等兵の教へ子達、は、尙すこやかに、昔の教室で受業して居た。或る日、校長先生の先導で、森田中尉が入つて来た。「皆さん、恩師丸尾先生が、旅順攻圍戦で、壮烈な名譽の戦死を遂げられ、本校の名譽となられた當時の模様を、側に居て最後迄見て居られた當時の小隊長森田大尉殿が見えられて、其お話をして下さい。さるとの御申出でありましたから、私は喜んで是非にとお頼みしました。静かに聞きなさい。校長の紹介の後の壇上に立つた森田少尉は、流石に胸を曇らして靜かに口をきつた。丸尾上等兵は——丸尾先生は丁度乃木保典中尉殿の戦死された同じ日、時も同じ頃——大尉の聲も、教室のうちに、またさめくと打ちしめるのだつた。

乃木將軍	阪東壽三郎
杉山の山	高田亘
杉山の女房	石河薰
津野田大尉	山口俊雄

浪花座 三月上演
山本有三作

坂崎出羽守

河上かほる

蒸しかへる様な、陽の光が地上にギラ／＼と照り映へてゐた。

時は元和元年——五月七日。難攻不落と世の賞讃措くあたはざりし萬年山大坂城に早、五月七日の拂曉、其餘命のつたなきは一累の戦火にたいして。其日の城中各將兵卒の一舉にこそ永遠に歴史を飾るにふさはしき唯一の記念ではあつたのである。

刻々に迫る敗北の斷末竈に猛り狂ふ城兵の死の喘ぎを視る時、家康の陽に焼けた双頬に時ならぬほくそ笑み湛えられた事であらう。心地よい微風が地上を這つて、茶臼山の松林にこだまする戦火の笛音にまで勝利に湧き沸きる感激が渦巻いてゐた。

ト……突然家康の面に或る不安な哀愁の色がさつとくさめ去つた。

「千姫——千姫は今頃何うしてゐるだらうか」——それであつた。とやくもたまらぬ愛情にからむ情が家康の勝利にむせ返る胸をかきむしつた。

「誰ぞある、千姫を助けて參れ、千姫を救ひ出る者は無いか、助けし者には重き恩賞を取らせるぞよ」——さう云つて見ても、燃え上る火の手を見てはさすがに誰一人として聲を發する者はなかつた。並居る者は只、片唾を呑んで家康の次の言葉を氣にしい／＼うづくまつた。

「其役目何卒某に仰つけ下さりませ」さう云つて家康の前に進み出た勇士があつた。

その聲に家康も本多父子も、幕僚の人達も一様に聲の主を見守つた。それは誰であらう、武名共に並びの無き坂崎出羽守成正其人であつた。

「おゝ、出羽か、汝參り呉れるか」

「出羽一身にかけても姫はきつとお伴ひ申します。」

りんとして云ひ放つた、出羽守成正を、家康は今更の様にたのしく打見守つた。

「うむ、その方に申付る、早く行け、……恩賞は望みにまかせせうぞ」

「はつ」と出羽はもう立つてゐた。

「いやまで」——家康は成正の後からさう呼び止めた。

「その方はまだ獨身であつたの」

「はつ」

「見事その方が助け出したら、姫は其方の妻にとらせるぞ」

「有難う存じます、御免」

と成正は飛鳥の様に御前を引下ると早愛馬にむち打つてゐた。

若くも勇ましき出羽守成正の後を家康は何時までも／＼打眺めてゐた。

行手に當つてどつと火櫓が立上つた。其時は早暮あいの色が四邊りかすかに忍びよつてゐた。一しきり砲火の響きが轟き渡つて來た

× × ×

盛夏の海は——静かだつた。

折柄涼風さへ加はつて宮七里の渡しは實に安穩な航海だつた。

出羽守成正は心のまゝ海面にそよぎ立つ風に其面をたぶらかせ乍ら凝つと衝つ立つてゐ

た。

そして啼く音渡る千鳥の聲に恍惚りと聞き入つてゐた。

「海の眺めはまた格別だな」

成正是さう云つて腹臣松川源六郎を顧みた

「ひろくとしたよい心持ちでございます」

「向ふに霞んで見えるのは、あれは何處だ」と又成正是源六郎を振り返つた。

「左様でございませう、何處に當りますかな、どうも手前不案内で御座います……」此時突然、船底の方から驟がしい、船子共の争ふ聲が荒々しく聞へて來た。

「あの驟ぎは何だ。源六郎、直ぐ參つて取り鎮めい」

「畏まりました。」

さう云つて源六郎は船底に駆け降りて行つた。

「姫君が、御座るのに、こゝろない船頭どもだ——」成正是千姫の手前、自分の落度の様にさふうそぶいて舌打した。

「出羽守さまにはこちらにおいてございましてか」

「手前共御殿様にあやかりたいと存じましてお探し申しております。」

二人の茶道が成正の立つゝいその前にいざ

つて、さう云つて出羽守を見上げた。

「なに、余にあやかりたい？」

さう云つて茶道を擬つと見下す成正の面には或る微苦笑が透えられてゐた。だがその後から事毎にしつこく根堀り齒堀りする茶道の言葉には成正是或腹立たしさを感じて來た

そして萬遍となく繰返す羨望に似た野卑な言葉を開くさえない愉快だつた。

「——手前どもに果報をお授け下さい——」そんな言葉を開くに於て、出羽は最早其場に居る事すらまどろしかつた。

「えゝうるさい」

少し怒りを帯びた太い聲を残して逸早く船底に姿を消してしまつた。

矢張海上は寂として静かだつた。心地好い涼風も船端に白い波を立てゝゐた。

後に二人は様々に成正の影口を叩き合つた過ぐる元和の役に、片面に大火傷を負つた成正の形相は、見る目も恐ろしいまでに變り果てゝゐた。昔日の破々しかりし若者の面影は、今の出羽守成正の何處にも見受くる事は出来なかつた。ともすれば淋しい不安におそはれる時も——見事その方が助け出したなら、

姫は其方の妻に聚らせるぞ——さう云つた大御所の言葉が、今の成正に取つて唯一の光明

であり、希望でもあつたのだ。

千姫は落城の其日から、ずつと此方ひつこみ勝ちだつた。そんな千姫の様子を見るにつけて一人刑部卿の局は心を碎いた。憂鬱な今の氣持を、幾分でも明るくおさせ申したい、とそれが刑部卿の局の望みでもあつたのだ。

と又もや船底から驟々しい船子共の罵り合ふ聲が甲板にまで聞えて來た。

其の時姫の前を通り抜けて船底に這入つて行つた一人の若者があつた。

「今此處を通つたのは？」

さう云つて千姫は局を振返つた。

「はい、——本多平八郎忠勝で御座います」

千姫の黒く澄んだ瞳が突差にくるゝとたまゝした。

「あなた様から、姫君へこの四邊の景色を物語り遊ばして戴きたう御座います」

刑部卿の局はさう云つて忠勝に促した。

「何の御用かと存じましたらおやすい事で御座います、ではお話し申しませう」

忠勝は聞かれる儘に一々それを説明して行つたのであつた。そして其れ等の人々が帆の影に隠れた時、あわただしく甲板に駆け上る

一人の若侍があつた。それと殆んど同時に一人の老臣も飛上つた。

「待て、待たつしやい、何とした短慮をしてかし召さる、大事の場所て御座るぞ、お憤しみなさい」

と見ればそれは松川源六郎であつた。その短慮をいましめた武士は、出羽守の家老三宅惣兵衛だつた。

自分の美艷を賣ものにして、姫の歡心を買はんとする平八郎忠勝の振る舞に源六郎の若き血は逆流したのであつた。一途に主成正に忠勤する源六郎に取つては、今の忠勝の振る舞を凝視する事は出来なかつたのであつた。

源六郎は心ならずも惣兵衛の言葉に伏しなればならなかつた。擬つと見上げる眼と見下る眼が無言の中にせわしくまたゝいた。何故か二人の眼には温かい物の湧き上つて来るのを禁ずる事は出来なかつた。

「源六郎、そこに居つたか」

出羽守成正の聲に二人はさつと其場をすさつた。

「姫君の御恩みに、釣を御覽に入れやうと思ふのだ」

さう云つて二人を見下した出羽守の心中は二人にはその心持がはつきり判つてゐた。

成正の釣り趣向には皆喜んで賛同したのであつた。そして我一と獲物にあせつたのであつた。忠勝がよく釣れるに引換へて、成正は一寸も釣り上げなかつた。釣の興に、業を糞やした成正は飛鳥を射た、けれどそれも結局はその功を忠勝にゆづらなければならなかつた。

そして出羽守は剣道試合を忠勝にいとむだ木太刀を振かぶる二人の胸中には、互に異つた意氣が燃え立つてゐた。

忠勝の手首からタラ／＼と流れる血潮を見出した時、並居る者もあつ氣に取られた。

千姫の慈悲と哀憐に似た言葉を忠勝は平伏したまゝ聞いてゐた。

姫を初め大勢の者の船内に姿を消した瞬間に、成正主従三人の面には時ならぬ不安な影が明かに流れた。

今の成行を眺める成正は、暫し自分の視覚すら疑はなければならなかつた。

源六郎の血氣は事を此處に制する事は出来なかつた。飛鳥の様に彼等の後を追はんとした時、惣兵衛の手はそれより早く彼の身體をさへぎつてゐた。

「今日は何故こんな事をしてしまつたのだ」

さう云つた成正の眼には熱い涙がにじんでゐた。

折柄港に這入つたものか、着船のドラの聲が三人の心を打消すやうに、高々と響き渡つた。

武選一途、策戦奇略な家康にも、家庭あつて、心からゆつくりと茶を啜る時には、本當の意味に於て、良きお祖父さんであつた。

そして千姫も思切つて甘える孫娘であつた。今の千姫の頭には、過ぎにし大坂落城の日も、自らの今日在るを得た、云はゞ命の恩人とも云ふべき坂崎出羽守成正の事などは、もうすつかり忘れてゐたのであつた。そして本

多平八郎忠勝の姿が絶えず彼女の念頭に浮び上つて来るのであつた。やるせなき寂寥の影にさす光明は只平八郎忠勝の姿ばかりであつた。惱ましいまでに掻きむしつて行く煩悩のきづなは千姫は日夜小さき胸を焦した。それは時たまには出羽守の事も思ひ出さぬ事もなくつた。けれどあの城中に自分を救助し單身駆け付けた凛々しくも勇ましい出羽守成正ではなく、今はあまりにもその時とは似ても似つかぬ現實であつた。その痛ましき彼れ成正に同情しようとしても、今のかたむきかけた彼女の心は、どうしても成正を好く氣にはなれ

なかつた。――宮の渡しの事を思ひ浮べるさへ、野卑な、武士の反面を見せつけられた彼女は、たゞ譯もなしに出羽を好く氣にはなれなかつた。そして柔和な、澄み渡るやうな華嬌な平八郎とを比較する時、あまりにも甚だしき離隔だつた。

「姫の好きさうな男――」
何時かさう云つて家康も北叟笑を湛えた事だつた。
充分無理な使ひとは知り乍らも金地院崇傳は、家康の内意を受けて出羽守と會見したのであつた。

初めて事の總てを聞知つた出羽守成正是愕然として崇傳を見詰めたのであつた。

もしか、もしかと心に浮んでは消え、消えては浮びしたあの不安なきざしが、……成正是きつくりせずにはゐられなかつた。

其處に深き意味合のふくまれてゐる事とも知らずに成正是それを默忍せずにはゐられなかつたか？……

「千姫君は大坂内府様の御座申ゆへ、落城とにも内府様御他界の後は、兎角御氣鬱にて御氣分が勝れませぬ、これは姫君様として、御無理のない事と存じます、ところがこの頃更に内府様の御冥福をお祈り遊ばすために、

髪をお下し遊ばしたいとの仰でございます」

「なに、尼君になると仰せられますか？」

「さやう、近々愚僧のもとにお越しなつて、黒髪をお斷ちになることに定まつてをります……」

成正是其言葉に對して反駁せずにはゐられなかつた。

「お言葉ではございますが、匹夫野人の申す事と違ひ、天下のしめくまり遊ばす大御所様の仰に御違背があつては御政道の表如何かと存ぜられます」

「一應御尤もの仰ではござるが、内府様の菩提をお弔ひ遊ばすといふものを、強ひて他に縁組おさせ申すことは無道の事かと存ぜられます、成る程一旦お約束はなさいましたものゝ、人倫の上より見て不倫と思召すときは、お取消しに相成る方が、これこそ却て政道をしろしめす方のとるべき道ではござるまいか」

崇傳の言葉には、成正是返す言葉が無かつた必ずしも他へは縁組しないと云ふ事に、今までの千姫の爲めに、惱み苦しむだ、光明も希望も何もかも一切を忘却の世界に葬つてしまはなければならなかつた。

――必ず姫は他に縁組はなさいません。

崇傳の其言葉が、今の成正の姫に對するあきらめの總てであつた。

成正の心を思ひ、彼の悲憤を考へる時、同情にあたひする何物かゝあつた。

如何に戰國の習はしとは云へそれはあまりにも矛盾した事ではあるまいか、臣なるが故に、主の命に服しなくてはならない、主従の道にあつてはかくあるべきものだつたに相違はない。

× × ×
惱ましきくも、懶かしい幾日か過ぎた。

あきらめ――成正是身の成行を熟視する時淺ましくも、愚かしかりし過去の自分の姿を其處に見出さなければならなかつた。

「うぬつ！」
彼の血は幾度か、すすみ切つた全身に躍動した事か知らなかつた。

「――後に取殘されし家臣の面々を思ひ出しでは……」

さすがに武名一世に名高き勇將の牛面にも斯くも臣下を思ふ情はあつたのだ。

そぼ降る雨の瀬日、酒にひたる自分の今日此頃の徒然も、成正に取つては、自らあきらめやうとする、うさに外ならなかつた。

松川源六郎は今の主君成正の身の上を思ひ

出すさへ血は躍つた。

遂に彼れは忠誠とせる血書も、返つて成正の激怒となり、あへなくも、悲憤の中に割腹して相果てたのであつた。

そしていやが上にも、荒々しく心がすきみ行くのを出羽守自身もどうする事も出来なかつた。それはどうしても爲才なき成行だつた。裏切者奴……成正は時としてそんな事を口走る事もないではなかつた。

聽ては終つてゐる。——自分はおそらく此儘に一生暗い心の影に泣かなくてはならないのだ——とさへ思はれてならなかつた。

主君の徒然を慰めんものと、園恭にそのうさを晴らす忠勤な家臣に守られて……。

外には雷雨が降つてゐた。

何心なく見返る成正の眼に映る多くの提燈の光——

「あの物々しき行列は何だ」

さう叫んだ成正の言葉に誰れ一人として聲を發する者はなかつた。

身の破滅、その奮怒をこらへにこらへし成正も、早事此處に極まつて、奮然と立つた。

其手にはつかひ慣れた愛槍の紫光一刃牙んとして凄光を發つてゐた。

躍り出した出羽守の後より失神せし如き多

くの家臣の面々が宙を飛んだ。刻、一刻……聽て行列の提燈の火は波打つて亂れた。

「亂心者奴ッ！」

さう叫んだ柳生但馬守の聲を思出した時、早出羽の右手には白刃の短刀が寥然と光つてゐた。並居る家臣のすゝり泣く聲がそぼ降る雨の音の中に聞えてゐた。

「源六郎の死骸は厚く葬つてやれよ……」

その聲は早平常の出羽守成正の聲だつた。外の雨は永久に恨みの悲憤がのまれてゐた。

磨齒煉固スブギ



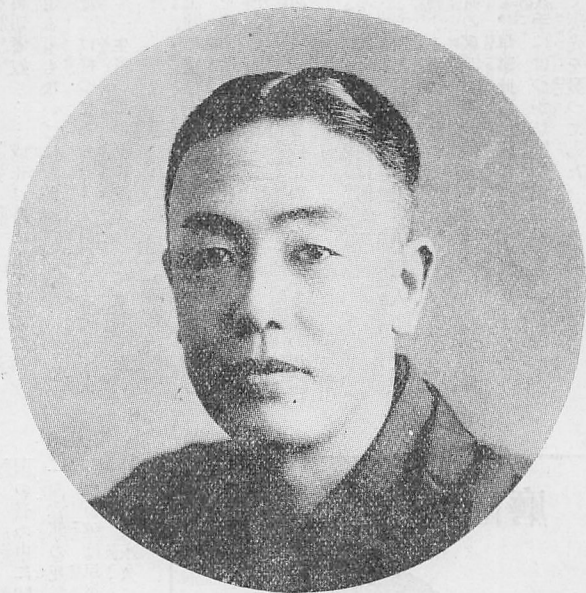
本品を使用すれば幼時よりも老年に至るまで歯牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであります。さらば毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になります。本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

小形 壹圓 金七拾錢
大形 壹圓 金六拾錢
ロンドン パリス デイエンダブリュー

日本代理店

ギブス株式會社
株式 横山商店
東區豊後町三番地

坂崎出羽守	阪東譯三郎
刑部卿の局	三好榮子
千姫	石河 薫
徳川家康	小笠原茂夫
本多正純	元安 豊
松川源六郎	吉田正雄
本多正信	進藤英太郎
三宅惣兵衛	吉田 豊作
本多平八郎	山口俊雄



— 久・潤・感・想 —

市川左團次

「箱根靈驗」 「覺」 「仇討」 「修禪寺物語」
「高野物狂」 「關羽」 「番町皿屋敷」
をもつてお目見得いたす次第でございます。

で、「修禪寺物語」「番町皿屋敷」は
御承知の岡本綺堂氏の作で、既に皆様
より定評をいたゞいておりますので、
今更こと新らしく申上げることござ
いせん。

たゞ從來松遊戯曲十種と申しており
ましたのを、この度倅に松遊の俳名を
譲りましたので、私の俳名も杏花と改
めました。それで今後杏花戯曲十種と
改稱いたしましたぐらひでございます
それから「關羽」でございますが、

これは歌舞伎十八番の内の一つで、久
しく上演されなかつたものでございま
すが、昨秋歌舞伎座におきまして倅松
遊改名の御披露狂言として特にこれを
選り上演いたしました。では定めし面
白い狂言であらふかと思召すかも知れ

このたび皆様のお招きにより久方振
りにて京都南座へお目見得いたすこと
になりましたことを、心から欣んでお
ります。

就きましては、上演狂言ですが、何

かお目新しい物を御覧に入れて絶大の
御評判を頂戴いたしたと望んでおり
ましたところ、松竹の方より是非にと
の注文で、又かと思召になる方もござ
いませうが、

ませんが、これはまた至極大まかな物で、當今の御観客にはむしろ莫迦々々しい狂言ですが、そこにかうした古劇の持つ特異な味があるのでございます。と由緒ある十八番もので久しく埋れてゐたものを復活させました次第でございます。

「高野物語」は木村富子女史の作で絢爛な所作劇でございます。先年本郷座に上演の際には多大の御好評をいただいたものでございます。この狂言に就きましては、猿之助よりお話もあること、存じます。

尚御願申上げたきことは、性松薙でございます。今更御披露申上げるまでもなく、皆様には既に御承知の事ではございませうが、昨年澤村宗十郎氏の三男訥升を養子に迎へまして私の以前の俳名松薙と改めさせ、此度同伴にて初のお目見得をいたさせます。何分未だ若年のことではあり、藝におきま

しても未熟の者ではございますが、何卒御最良の御餘光をもちまして、何彼と御指導を賜り、私同様末永く御愛顧

改名・お願い

關西方面は度々伺つて皆様の御ひるきをいたゞいておりますが、此の度松薙と改名いたしまして、父に伴はれ初の御目見得をいたします。改名はいたしましたが無卒御見捨なく今まで通り將來とも御引立を御願申し上げます。

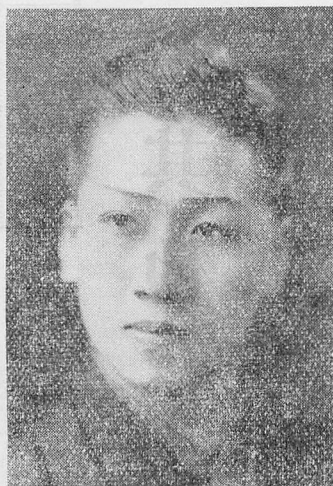
改名御披露狂言「關羽」では（娘人丸、實は宗盛の息女明石の前）といふ大役を勤めさせていたゞきます。何分にも身にあました大役でございますし、藝の未熟は種々工夫勉強はいたしますが、御目まだるい所も多々

お引立の程をお目見得に先だちまして只管御願申上げる次第でございます。（帝劇樂屋にて）

市川松薙

御ざいませう。其所は日頃御愛顧の皆様御指導を賜りたく、紙上を拜借してひたすら御懇願致すしだいで御座います。

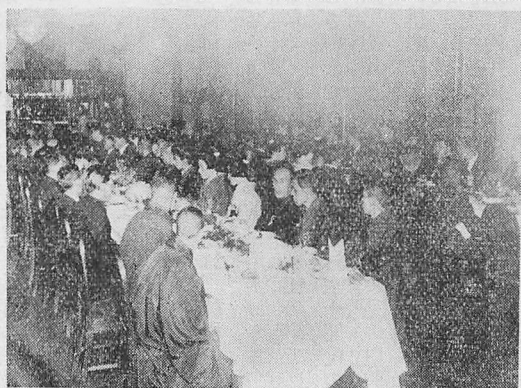
（帝劇樂屋にて）



三月の劇壇漫歩

「關羽」と其他

倉田啓明



左團次君——

歡迎座談會

春淺き東山、祇園町の灯を目近く見る
菊水樓上で、道を距てた南座で三月一日
から開演する市川左團次を迎へ、二月廿
七日午後六時から、松竹白井事務所始め京

今月、久々で京の南座へ左團次が來演して、先頃歌舞伎座で上場した、歌舞伎十八番と銘を打つた「關羽」をやる。このところ歌舞伎十八番の上演は一種の流行となつてゐるが、左團次はこれまで湮滅してゐた十八番物を、屢々復活上演して好評を博して來た。「鳴神」「毛拔」景清「不動」及び今回の「關羽」がさうである。又左團次と一緒に來る猿之助も、改名披露の狂言は、十八番中の「鏝髭」を故段四郎とともに演じてゐる。就中、左團次が復活した「毛拔」と「鳴神」は

脚本そのものが頗る上乘の作であるのみならず、その演出も古劇の雅味豊かなものがあつて世評が高かつた。「毛拔」は先年大阪でも演じたやうに聞いてゐる。さて今度の「關羽」は脚本で讀むと、誰が書いたのか知らないが、かなり古風に出來てゐるから、さぞ面白からうと想像する。そして今度の作では主人公が關羽實は惡七兵衛景清となつてゐるやうだ。之はおそらく元文二年十一月、江戸河原崎座で演じた「閏月二人景清」から案出したのであらうが、その時は關羽を二

都在住の有志發起の下に歡迎座談會が開かれた。

市川左團次夫妻は養子の訥升改メ市川松庭を伴ひ來會。帝大、三高、同志社、龍谷大學の諸教授、大毎、大朝京都日々京華、京都日報、新愛知各社の方々、松竹の白井專務其他と祇園の松本さだ女その他のひいき客、下加茂の若月孔雀さんの美しい高島田姿を加へ六十餘名の人々で華やかな食卓が開かれた。

宴 閑なる頃、高谷伸氏發起人を代表して挨拶を述べ、ついで市川左團次丈の挨拶あり、藤井乙男博士、竹内栖鳳畫伯の發聲にて一同乾盃。さらに京大の成瀬無極氏起つて皮肉な調子で自由劇場より小山内薫氏の追憶談に及び、ついで島華水博士が一九一四年發行のロンドンの劇場年鑑からサダンデイチカワンドの項をひいて、エルナニ瑞西義民傳丸橋等の上演目録を擧げて、こんなこともありましたが和諧謔に富んだお話ぶりから、大久保京都日報社のエルナニとかナニナ

代目團十郎、張飛を市川團藏が演じてゐる、ところが、元來歌舞伎十八番を選定した七代目海老藏が「關羽」の狂言をこの内に加へたのは、寛保二年九月、二代目團十郎が大阪佐渡島座で上場した「東山殿旭翁」の大話であらうといはれてゐる。この狂言では關羽が例の扮装で白馬に跨がつてゐる畫像が懸けてあると、その中から關羽が抜け出して、山名久國を青龍刀で斬り、細川勝元の助勢をして東山家の安泰を圖るといふ筋立になつてゐる、畫像が抜け出して敵役を打ち果すといふのは、當時としては奇抜な趣向で



大向ふの喝采を傳したに相違ない、いづれ「傾城反魂香」あたりから思ひついたのだらうけれど——しかし、前の關羽實は景清といふのも、なかなか奇抜でナンセンスだ。

中座で通し狂言として珍らしく演ずる「佐倉宗五郎」といふと、わたしは市川團藏を想起する。これは仁木彈正や石川五右衛門とともに、たしかに彼の當り役であつた。佐倉宗五郎の狂言は徳川時代には、幕府を憚つて世界を足利時代に借り「東山櫻莊子」と題してゐた。その見せ場と言へば、やはり甚兵衛の渡しと子別れと、通天橋の直訴であらう。光然の祈の場はあまり陰慘で、近頃ではとても原作通りには許可されない。それに堀田の領主の病床に多勢の幽霊が出現して殿を悩ますところなども見てゐる趣味が悪いしかし昔の見物はこんな場景を悦んだのであらう。團藏以後わたしが見たのは吉右衛門の宗五郎があるばかりだ。播

ニとか日本人でも忘れてゐることが外國の書物にあるとは面白いと愛嬌を見せられ、森ほのほ氏の敵國降伏上演時代の印象から松莚丈より澤村家との因縁に溯つての話し高原慶三氏の父としての左團次、山本修二氏の夜叉王に就ての説、野淵昶氏の辻斬は困つたね、上田市會議員のヤクシヤとヤクシヤといふ商賣柄の面白い洒落、佐野篤、片山博通兩氏の南座の出し物に就てなど、それからそれへと興の深い話は盡さず、記念撮影して、十時頃まで歓談に時の移るのも忘れてゐた。

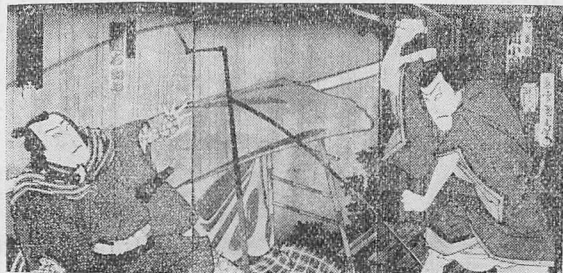
來會者芳名(次第不同、敬稱御免)

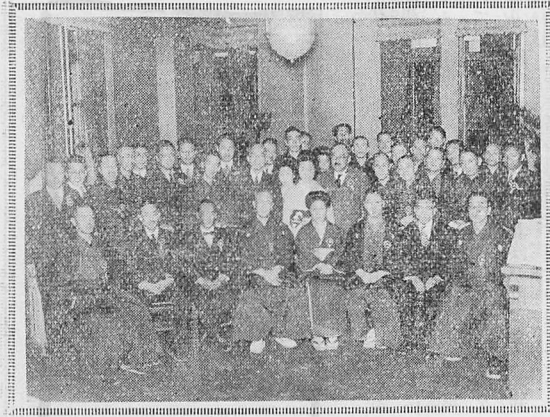
成瀬無極、島華水、藤井乙男、竹内栖鳳、阪倉篤太郎、山本修二、大久保作治郎、高原慶三、加藤三之雄、櫻井義臣、村上忠平、橋本梶三郎、楠田季吉、石井政次郎、森ほのほ、高谷伸、堂本寒星、新田龍曉、仲野武男、河野順三、野淵昶、田中綠江、上田蟻善、佐野篤、片山博通、更谷春水、川畑信夫、大橋勇、辻本浩太郎、小栗健弘、木村隆、

摩屋のはよほど團藏張りのところがあつた、この義民を主人公とした新作にはせん年左團次が市村座でやつた、池田大伍氏の「佐倉新繪卷」といふ脚本がある。大名題の示す如く、舞臺面を繪巻物を取りひろけるやうに轉換させた、ちよつと目新しいものだつた。

岡本綺堂氏の「番町皿屋敷」の源流はいふまでもなく「播州皿屋敷」である。この淨瑠璃は爲永太郎兵衛、淺田一鳥の合作で、寛保元年七月十五日から大阪豊竹座の人形に演ぜられたのが嚆矢であるが、その後歌舞伎にも仕組んで、現在屢々上演されるのは默阿彌が文久三年六月の市村座へ「皿屋敷化粧姿硯」として書き足したものである。お菊役者として名を獲たのは五世菊五郎、初代小團次であつた。ところでこの皿屋敷お菊の怪異の傳説はいろ／＼の書となつてあらはれてゐるが、延享三年板の八文字屋本の「勸進能舞臺櫻」には「鋤間三郎左衛門と

いふ家老が家の重寶珊瑚珠の玉の皿十枚あづかるを、婢あやまつて一枚割りたるを科として、庭の古井戸へ切込みしが、夜な／＼一枚二枚と九枚迄數へて、跡はワツと泣く女の聲して、三郎左衛門は其内人事を辨へず、七頭八倒して惱むを、圓山といふ伯父、敵よりの上使明石梅軒と云ふ敵役合役加古川右近と云ふ立役、目前に怨靈に惱まざる、を見て返る、あとに三郎左衛門、召遣に至る迄人どめして、庭の井筒へよれば井の内より硫黄えんせう





(寫眞は當日菊水にて寫す)

岡好葉、田中勇、塚本寛二郎、日田義雄、梅田深次郎、木下清次郎、元持政治郎、永田又八郎、柴田辰之介、青木徳太郎、森田實、熊谷學藏、笹谷源三郎、杉山昌三九、堀井長二郎、松本さだ、福島雛男、井上ハツ、五十嵐梅、末廣や、大西よし、松本八重、花月孔雀、松竹白井専務外數氏。

を持つ若き男一人飛出で、お頼みの通菊五郎もどきでやりましたがいかがと問ふ、ヲ、出来た、その方井戸堀に似合ぬ役者、物まねの名人故頼みしが、元來實の皿を伯父敵に渡せぬから腰元を手討にしたと長櫃へかくし置き、けふ見届め見分役人の前にて言合せし通り、其方の物まねにてままと敵はたばかつたり、褒美くれんと招きよせ、井戸堀藤治を手にかくる、是れ藤戸の盛綱の仕ぐみになる條あり」とあるが、生野の金堀りだつたといふ院本の蟻助が、欺き殺されるやうに、こゝでは井戸堀が殺されることになつてゐて、「播州皿屋敷」をそつくり反對に使つてゐる。しかしこれは西澤一鳳の書に見えてゐる話だが、「雲錦隨筆」を見ると、ちやうど場所も江戸番町にあつたといふ綺堂氏の作と同じ話が出てゐるから、左團次の十八番の「一番町皿屋敷」はこれに據つたので、又番町の方が眞實で、播州の方は虚構の事實であらうと思はれる。「雲錦隨筆」には上野の國

にもあつたと言つて、同じ傳説に似て結果が全く異つた話が記されてゐる、それに「諸國里人談」にもおなじ傳説が記されて、古井戸のあつた邸は牛込御門の内、又雲州松江にも、播州にもあると言つてゐるが「提醒紀談」には番町の方が嘘で、播州が事實であると稱して、お菊の主人の名が播摩といふので、播州に附會したのだと説明してゐる、序に先月東京で上演した左團次の「鳥邊山心中」は、同優の十八番の一つで初演以來幾度となく各所で演ぜられてゐるが、わたしにはやはり初演の時の印象がいまなほ眼前に髣髴する。久しく上演されないが「笹輪の心中」なども、殊にわたしには初演の東京明治座の舞臺がなつかしい。いづれもわたしが中學時代の思ひ出であるが綺堂氏の「鳥邊山心中」には人間の意地が描かれてゐる。曾て鷹次郎の演じた痴雪氏の「鳥邊山」には義理の柵が描かれてゐる。主人公の名も彼は菊池半九郎であり、此は篠塚半九郎となつてゐる。

京都南座三月興行

箱根 靈驗 壁 仇討

(あふむ石)

伏見桃山城造營のとき、普請小屋に勤める佐藤剛助は同役の飯沼三平を妬んで闇討ちにする。剛助はその後北條に味方して鎌倉に赴いてからは瀧口上野と名を改め、北條の威を借りて權勢を振ふうち、北條の臣、九十九新左衛門といふ者の娘初花は絶世の美女であるところから瀧口はこれに執心する。然し初花は下部の三千助に戀慕し、新左衛門も息女の婿にする三千助こそ兄三平の仇をねらふ飯沼勝五郎である。三千助の素性を知つた瀧口は新左衛門に首打つて渡せと嚴命するが、新左衛門は切腹して初花勝五郎を落してやる。兩人は諸國を流浪する中勝五郎は風疾を煩ひ足腰立たぬ壁となつて非人小屋に起き臥し、あ

まつさへ仇瀧口が詮議の人相書が廻つて一命が危かつたが、庄屋徳右衛門の情で錢別れの壁車に乗り、貞節な妻初花に引かれて箱根に向ひ、箱根権現の瀧にうたれて祈願をこめてゐる。忠僕筆助は同じく非人月の輪の熊となつて初花勝五郎を輔けるこの事を知つた瀧口は氏政の京都参勤の折、時政公の五百年忌を幸ひにして、非人共に施行して勝五郎をさがさうとする、舞臺は非人施行が終つて、瀧口と勝五郎の對照から始まる。役々は左衛門次郎の瀧口上野、壽美藏の飯沼勝五郎、松鷲の初花、紅若の母早蕨、猿之助の奴筆助。

箱根山中阿彌陀寺庭前

瀧口 (勝五郎の襟髪をとらへて)

コリヤ飯沼、イヤサ勝五郎、なぜ勝負させぬのだ、サア立合ぬか、ナ、何んだ、とこぼへるか、無念なか、足が立たぬので手も

葉はぬか、嘆惜口しからふ、此の様なざまをして、敵討とはしやらくさい。
エ、爰な腰抜けめが。

〆砂に摺付けにじりつけ、
(勝五郎 初花無念の思ひ入れ)
なんと初花、これでもいやか。

初花 サア、それは。
瀧口 ヤア、猶豫に及ぶは不承知だな、よい
〆此の上はソレ母親から先へさし通せ
久馬 心得ました。

〆取つて引伏せ、だんびらひらりと差
しつぐれば。

初花 ア、これまあ待つて下さりませ。

瀧口 待てとはいよいよ自由になるか、得心せねばさし殺さふか。

初花 それぢやと云ふて。

久馬 さし殺さふか。

初花 サアそれは。

瀧口 サア。

初花 サア。

兩人 サア〜。

瀧口 返事が聞きたい、初花どうだ。

〆絶対絶命、身の大難に初花が、なん

初花 と詮方なき身ぞと思ひ極めて。

瀧口 ぞ得心ぢやわいなア。

初花 そんならおぬしは。

瀧口 アイ、その代りには二人の命を、どうぞ助けて下さんせ。

瀧口 得心とあらば、云ふた詞は反古にもなるまい。命冥加な腰抜けめが。

久馬 ム立蹴にはつたと蹴倒せばその儘息はたへにけり。

久馬 ソレ繩附きを助けてやれ。

久馬 ハ、ア。

ムバツと其儘猿轡、繩目一度に解き捨てれば、せきとめられし溜涙、わつと計りに取り亂す。

初花 ア、これからか、様、其の歎きは尤もながら、ぜひに一羽は獵人の網にかゝつた身の因果、此の身さへ得心すれば、浪風のふ納まる此の場、私やそれが本望でござりまする、サア本望ぢやによつて、勝五郎様必ず御身を大切に。

早炭 オ、娘、出かしやつた、此の母が身一つなら、切り刻まれても厭はねど、大切な駕殿に、代る其身は手柄者、源氏の仇に身

を任した常磐御前がよい手本、心の肌身をナ、打解て。

初花 ナア、自由になるのは此身の覺悟何事も私の胸に。

瀧口 ヤ、此の瀧口を清盛とは心地よい然らば是より菊館へ。

久馬 御乗物にてお越しあつて、女めを。瀧口 ム、直ぐ様、是より同道いたさん、サア初花參れ。

ム引立てられて行思ひ、見送る思ひも駕馭の、胸の釵に吞み込む瀧口、久馬もあとに引添ふて、小田原さして行く。

ム見送る母は正體なく、勝五郎の傍へより。

早炭 コレ駕殿、心を慥に持つて下され駕殿いのふ。

ム勝五郎は息吹き返し。

勝五郎 おのれ上野、勝負いたせ。コレ女房はいづれに參つた、コリヤ初花。

早炭 その初花はいぬのでふ。

勝五郎 して何れへ參りましたな。

早炭 オ、今の先、敵瀧口につれられて行つ

たわいのふ。

勝五郎 エ、そりや初花は、敵の手へ捕はれて參つたとな、ム、（是を聞き勝五郎じつと思ひ入る）

早炭 サアその驚きはさる事ながら常磐御前になぞらへて、云ひ含めやつたれば、必ず氣遣いしやんすな。

勝五郎 あなたは左様仰有れども、たかへ何のふ女業、不慙な最期をいたさせませふわいのふ。

早炭 （氣をかへて） そうちや。

ム駈行く裾を引留どめ。

勝五郎 （駈出さんとするを止めて） コリヤ母人、うろたへて何處へござる。

早炭 何處へとは菊館、後追ふて娘に加勢するわいのふ。

勝五郎 サ、お心のせくは尤も乍ら、多勢の中へ踏込んで、親子もろ共三途の道つれサ、生は難し死は易し、爰の道理をわきまへられ、まづ／＼お待ちなされませ。

早炭 それぢやと云ふて。

勝五郎 モシ母人、これでござりまする。（手

を合す）

頼む夫も頼まるゝ母も涙にさしこむ
癪。

早蕨、癪を起す、勝五郎、介抱
して手水鉢へ取付き、見得にて
下座の唄になる。

唄 南無阿彌陀佛。
早蕨、どうせうく、ぞいのふ。
いろく介抱の科にて息吹き返す。

勝五郎 せめてあなたはお命まつとふ、一べ
んの香華を手向けてやつて下さりませ。

早蕨（得心して） 成程ナ、わし一人敵の中
へ行つたとて、やみく大死にせねばなら
ぬ、それよりは宿世の業とあきらめて、
どのゝ詞につき、惜からぬ命生き延びて、
香花なりと手向けてやるが、せめての追善
幸ひ爰のお寺にある、鉦撞木を借うけて、
聲殿諸共一べんの、供養をしてやりませふ
わいなア、そうぢやく。

唄 御寺にあり合ふ鉦撞木、常念佛の法
の縁。
下座の歌になり。

唄 南無阿彌陀佛。

奥より鉦撞木を取つて来り、兩
人よろしくあつて。

勝五郎 俗名初花、頓生菩提。
南無阿彌陀佛。

兩人 女程實に恐ろしきものはなし、戀に
こりては千仞の剣の中も厭ひなく、
やうくのがれかけ戻る。

山風ハタ／＼になり、向ふより
初花走り出て、直に舞臺へ来り

初花 勝五郎さん、よふ爰にゐて下さんした
なア。

勝五郎 ヤ、そちや初花ぢやないか。
ししがみつくゝ母親は、顔見て惻く

早蕨 そなたは娘、恐ろしい敵の中を、どう
して爰へおじやつたぞ。

唄 嬉しい中にも氣はそじる勝五郎面を
あらゝげ。

勝五郎 我々を慕ひ歸りしは、貞心と云ひた
けれど、夫婦の縁も今日限り、妻てない、
女房でないぞ。

初花 エ、そりやまあどうして何故に。

勝五郎 ヤア、何故とはうろたへものめが、
所詮此の身は足なへとなつたる上、敵は氏
政が加勢すれば、よも力には及ばぬ事、然
るに最前其方が、母の詞を聞分けて、虎穴
に入りしを後にて聞き、流石は女房出かし
たり、色に事よせ、上野めに近寄つて、差
違へしに相違なしけなげな者と思ひ居りし
に、左はなくては命を惜しみ、のめくゝと
立歸つたか不覺者、何を云ふにも此の有様
一足だにも引かれぬ苦痛、さあればと思
ひ込んだる我が存念、やわか晴らさておか
ふか。

唄 用意の刀杖となし、立上れども踏た
めず、どうと、まろび這ひ廻り。
エ、淺ましや。

唄 いかに天命つくればとて、得難き時
のきわとなり。

神も佛も斯程まで、見放し給ふか口惜しい
唄 大聲上げて叫び泣き、初花夫を打守
り。

初花 それ其の様に業病を、悔やましやんす
がいとしき故、敵の手へ捕はれて行けば幸
ひどうぞ首尾よい折を伺ひ、一太刀なりと

恨まんものとは思へども、お前の機嫌をそのふとて、私や戻つては来やしませぬ、モウくく云ふに云はれぬせつない悲しい憂目をして戻つて来たのも、お前の病氣を今一度、おのれと思ふ一念で、残つた願ひを満てたさに。

早蕨 ナニ、娘、なんと云やる、残つた願ひとは何の願ひ。

初花 サアその様にかゝ様は御存じない筈、鎌倉を出立の初夫の業病、冷病に腰膝しびれ、足なえとなつたる業病ゆえ敵が討たれぬくと、悔やむ主より女身で傍て見てゐるいとおしき、今一度本復させまし、兄御の敵を討たせたく、私が命を代りに立て、此の箱根の権現様へ、祈願をかけ、今一度で満る願、悲しや思はぬ災難で身は捕はれたとなつたれども夫の爲めに権現様へ捧げた此身、のめく何の死なふぞ死なせぬ、幸ひ茲に流れよる、此の水は向ふの瀧津瀬、白瀧と心に念じ、今一度の願を満て、権現受納しますか、印を爰にて試ん。

メリヤスにて。
とかひくしくも身縋ひ、

『引道具になる事』
駈け行く山路に散りしくもみち、難なく瀧に近よれば。

水の音烈しく、初花思入れあつて、上の方岩組の蔦かづらへ取つき分け登る。

久馬 (抜刀にて) 飯沼観念。
飯沼目掛け切り込むを、心得ひらり

と飛び立つはづみ、
拘りし乍ら討込む刀、久馬が首は花火の白玉虚空はるかに飛びちつたり
母は見より打ち驚き。

早蕨 ヤ、こなたは足が立つかいの。
勝五郎 ヤア、扱こそく初花が、念力の功德は目前、願はれしか、エ、有難い。

早蕨 コレく娘、貴女の祈誓は届いたぞ。
云ふ聲ひびく瀧の面、こらす兩眼見開きて。

初花 アラく、嬉しや、権現受納しましたし、日頃の念願成就せしか、悦ばしやな
云ふぞと見へしが一團の形は消へて失せにけり。

大どろく焼酎火顯はれ、初花瀧壺へ消へる。
どろく 打上げ、小袖立樹にかゝる。

勝五郎 ヤ、汝は筆助。
筆助 若旦那様か、口惜しや初花さま仇敵上野が手にかゝり、はや御最期でござりまする(どうと坐る)

勝五郎 ム、今まで爰にありつる初花、心願満つると其のまゝに姿は消へて小袖のみ、爰に残りし一つの不思議。

筆助 ナニ初花様が今迄爰にござつたとは、早蕨 ライのふ、駕殿の業病を癒さんと我が一命を権現へ、捧げ祈つた印し、駕殿の病氣は平癒、コレ腰膝が立つたわいのふ。

筆助 ナニ、若旦那の御病氣御平癒、お足が立ちしとな、エ、忝けない、お足が立つたかいやくく、お足が立てば千人力だ、敵の様子窺はんと、大磯へ駈け行く道にて取巻く多勢、合點行かねば組子足捕へ様子や聞けば初花様を奪ひ取らん工みの次第、聞くとそのまゝ一足とび、無二無三に切込めば、下郎が手並に皆散りく、其の

後見れば女の死がい、五體も切れ／＼放れ
く、よく／＼見れば初花様、南無三寶、
己れ上野め追つかけて、一と討とは存じ
れど若旦那のお身の上氣遣ひに戻つて聞
けば此の有様、何の事だか、とからちやか
らと、嬉しうと悲しいとがごつちやになつ
て一向此奴めは、とんと譯が分らない。

夢ではないかと呆れ顔勝五郎心づき

勝五郎 扱ては吾詞を守り、上野を恨まんと
斬り付けたれども女業、返り討になつた
か、エ、残念な、不惑な最期を致させまし
たな。

早蕨 ヤア、そんなら今のは幽霊であつたか
いのふ。

筆助 コレ、此のお首が初花様でござります
る。

見せる最後の 佛を、見る目もくれ
て勝五郎。

勝五郎 扱はこりかたまつたる一念にて、
かゝる功德を見せたるか、あつばれ貞女出
かしたなア。

聞くより母は正體なく。

早蕨 ほんに武士程世の中に、はかないもの

があらうかいな、蝶よ花よと思ひ子の、戀
に病む目がいちらしき、添はしてやりたい
ばつかりに、父御は刃に身を捨て、思ふ男
に添ひ遂げさせ、初孫生ませて花々しふ、
榮ゆる末を樂しみに、思ふた事も水の泡、
夫と云ひ娘まで刃にかゝるのみなら

上るり 離れ／＼、切れ／＼にまでなりし
と聞く、此の胸の苦しきは、どの
様にあらふぞいのふ。

早蕨 是を思へば先達つて、死んだがましで
あつたもの。

勝五郎 母人。

筆助 お二人さま。

早蕨 あじきなき世の。
三人 有様ぢやなア、

わつと一度に聲立て、歎く涙は白糸
を、亂せる瀧に異ならず、かゝる歎
きの折柄に、非人は大勢出て來り。

非人 ○ ヤア、いざりめ、よくも最前は仲間
の者を、ひどい目に逢はしたナ、其代りに
は仲間の者を連れて來たのも、お侍のお
頼みだ。

非人 □ 初花さへ首にすれば、親めもわれも
打殺せと云ひつけなれば寶の山。

非人 △ 息の根さへ留めたら金ぢや、サアわ
いらもその氣でかゝれ／＼。

非人 ◇ うまくやりや褒美になるから、その
つもりでしつかりやつつけろ。

皆々 合點だ／＼。

かゝれ／＼と一同に群がりかゝるを
飯沼、筆助、なぎ立て／＼追ひ散ら
せばむら／＼ばつと逃ちつたり、追
ふも無益と勝五郎。

勝五郎 コリヤ、筆助、長追ひ無益、敵上
野は、氏政が同勢に紛ぎれ入つたに相違な
し、勝負の場所は箱根の絶頂、先へ廻つて
其方は、一々同勢。

改めよ。

イヤ面白し／＼。

早蕨 そんなら聲殿。
勝五郎 ム、筆助つゞけ。

筆助 ハツ。

武運も光る玉櫛笥、箱根をさして急
ぎ行く。

幕

歌舞伎十八番の内 (京都南座)

關

羽

大薩摩連中

和州暗峠の場

本舞臺眞中に、朱の古びたる關帝廟、此の扉に仕掛けある、側に見事なる楓の立樹、この下に山駕籠一挺置いてある詠へ、張物は山又山に松と楓の紅葉の描き込み、上下に藪薙少し出し掛け、山おろしにて幕明く。

鳴物打揚げ、大薩摩の出語り

大薩摩へ夫れ、鼠に隨ふ落葉は簫瑟を含み石に渡ぐ、飛泉は雅琴を弄すとかや、風を深山の秋閑けて、水に錦ををりく、の鳥の聲さへ仄暗き、くらがり峠嶺の峽

これより迫り出しの鳴物、舞臺前行衣と見せたる白の廣袖に金の梵字

のある着附、丸絛、百日かつら、銀杖を持ちたる悪七兵衛景清と、町家の娘の拵への人丸實は宗盛の息女明石の前を、せり上げる、木魂になり、

景清 誠や一樹の蔭に宿り、一河の流れを掬ぶさへ、他生の縁のいと深い、狭間に落ちし美女を、救ひ上げたは情の正道、暴虎馭河も時の機。

人丸 思ひ設けぬ憂き難儀の免れかたの錆にもと、覺悟はしても命の中に、逢ひたい見たい父さんの、顔を一目の未練から、抜け出し駕籠の下照る木の間を、アレあの谷へ。

此の時、着附脚絆の駕籠早次郎八賀は本田ノ二郎親愼、同じく六藏實は榛澤六郎成清の兩人、藪薙の蔭より

兩人 ヤツ。

一度に人丸に掛かると
人丸 アレエ。

後へ摺り抜ける。

次郎八 どつこい、辻がさぬ。

六郎 大事の玉。

兩人 子を取る、子取る。

大薩摩へ子をとりの音の函谷に戸ざさぬ籠の鐘の聲。

次郎八 羽ばたきして、

兩人 もう叶はぬ。

大薩摩へ押ゆるところを取つて投げ、掴みかゝるを引ん抱え
兩人人丸を追ひ廻し、押へ付けようとするを、景清投げ退け、文句の通り

景清 やかましい土蜘蛛めら、年齒も行かぬ娘を捕へ、河内へ越ゆる山坂を、昇いで行方へはもう合點、何れは誰と、寝屋川の、後

は野崎か其の邊の、飯盛山の貝杓子に、賣らうなどとは、の太い奴喃。

大薩摩へ右に左に引き廻せば

次郎八 ア、これ邪慥な、仇も味方も隔てなく、人を救ふが本來空の、此の代世界の杓子定規。

六藏 貝杓子が若し氣に入らざば、お玉杓子の尾を振つて、必ずかへると致します。

次郎八 鮑の貝の片思ひ、うまい儲けはさせ

居らぬ。

六藏 南無御行者。

兩人 様々々。

大薩摩へ隙を見合はせ相圖の鐵丸、打てば

響きの聞の聲。

景清 ハテナア。

大薩摩へ俄に不審立騒ぐ、中に小女はかい

くない、葉蔭れにこそ、

軍兵大勢上下より斬け出で、その中

の五六人は、人丸を引立て上手へ

入る。

景清 おのれ。

兩人 どつこい。

大勢 遣らぬ。

景清 遣らぬか。

皆々 やらぬわ。

景清 何處へ。

大勢 樂屋の方へ。

景清 たわけ面な、用がある。

大薩摩へ錫杖ぐわらりと、力足、屹と見得

あり、

景清 さるにても、恥々とせぬ紅葉山、鼻を

明かさう企みのわい等は、

次郎八 聞ききたくば先づ名乗つてくれる、島

山の家人にさる者ありと知られたる、本田

ノ二郎親恒。

六郎 斯くいふは棒澤六郎成清。

次郎八 汝が娘人丸の、在所を尋ね引き連れ

て、遙々登る子と親の、胸は違はぬくらが

り時。

六藏 其の隠れ家を見出さんと、匣の籠をか

くの仕儀。

次郎八 それに幸ひ、われと我が娘と知らず

身を曝し、助けに出でしは運の盡き、

六藏 景清なりと。

兩人 名乗れエ、。

大薩摩へ息杖取つて覺えの業物、ひらりと

寄すれば、えせ笑ひ

兩人は衣裳ぶつ返す。

景清 別れ程經し人丸と、知らず命を救ひし

も、觀音薩埵の御利益、とは云へ外道に妨

げられ、佛作つて魂を、入れぬ行者がこ

れからの、開眼供養、手並の程を、わい等

が素つ首一々に切り並べて目とすり膾、い

で、すつばりと見せてくれん。

大勢 ヤア。

景清 可憎口に風ながら、念の入つたる所望

ゆえ、名乗つて聞かす、われこそは、平家

方の侍大將、察しの通りの悪七兵衛景清

禿の落ちる呪ひに、面相拜み奉れエ、。

大勢 儲こそなア。

兩人 者共ぬかるな。

景清 何を。

大薩摩へこなたもかねて仕込みの瘧丸、抜

き放せば満山の、紅葉流るゝ刃の瀧津瀬

これより大太鼓入り、景清は一同を

相手に荒事の殺陣、廟の縁に上りて

屹と止まると、

平次 エイ。

矢聲して、上手より一筋の白羽の矢

飛び來り、景清に中ると見る間に、

景清は扉の内に消え込み、矢は其處

の扉に立つ。

皆々 これは。

バタ／＼になり、梶原平次景高、若

衆かつら、上下の肩を脱ぎ掛け、袴

の袂を取りて駈け出で、

平次 ヤ、此の跡は、

六藏 御身は梶原。

兩人

景高殿。

平次

然言ふ二人は榛澤、本田。確に手ごた

へした景清は。

次郎八 煙の如く消え失せて、

六藏 征矢のみ残る。

皆々 あの扉。

平次 偕は邪法の悪行者、よしや天には驚と

變じ、地には土鼠と化すとも、所詮免れ

ぬ平家の落人、以前は以前、今は今、鏝に

あらぬ元値を切り、大負けに負けて手を廻

せ、南都南無は東大門の、再建終つて右幕

下の、お成を狙はん横道者、早く姿を現せ

やい。

平次 この時薄くどろどろと風音。

平次 あの音は、

梶原様。

軍兵一 風で御座ります。

平次 うべ山風を嵐といふらん、だに因つて

肌をあらしの身の用心、主が風ひきしや、

ネイ、共難儀。

軍兵一 大磯では、

軍兵二 持てますかエ。

平次 大きにさ、イヤ、兩人の手前もある、

暗め、處て其の大磯で思ひ出したは、

彼の人丸、何としても、ナ、勤め奉公させ

にやならぬ、責めて責めて責め抜いて、親

の因果が子に報ふ、苦痛を此の場で、ソレ

者共。

軍兵三 ハア。

上手より、最前の軍兵、人丸を繩に

掛けて出る。

次郎八 景高殿には此の娘を、

六藏 初手からの目論み通り。

平次 オウサ、今消えたまでの景清は、向ふ

の勝手に就いてた、云はゞ醉典前藝の七

兵衛行者、偕これからが此方の舞臺、此の

美しい人丸めを、生けみ殺しみ高吹えさせ

憎まれ序に悪七兵衛、飛出させて引つ捕へ

功名手柄をせにアならぬ、随分二人も合點

か、それ人丸をあゝの立樹へ。

軍兵 ハ、ア。

人丸 偕は最前此の身の難を、救ひたまひし

修行者殿か。

平次 正真正銘の、おのれが親だ。

人丸 あの父様であつたかいの。

次郎八 紛れもない、

六藏 景清さ。

人丸 ハア。

泣く處へ、軍兵の一二、紅葉の枝を

持ち、ヤツと掛かる。

人丸 さりとは、

大薩摩へ憂きを都の月花に、背きて鄙の隠

れ棲み、父は此の世にましますかと、云

ふが乳人の遺物にて、頼む木蔭に漏る雨

を、

人丸 凌ぎかねたる傘屋が軒。

大薩摩へ春來る鳥も我が宿は、忘れぬもの

を、浅ましや。

人丸 たまさか逢ひし父上の、お顔覚える暇

もなう、斯うなる事は前生の。

大薩摩へ約束事かと聲上げて、あとは岩間

の朽葉まで、濡れまきさるかと哀れなり。

後手のま、人丸愁歎ある事。

平次 贅々と世迷言、傘屋法橋が孫娘と、近

所隣りは瞞めても、景清が預けたる、夜食

の固まり、茶漬飯、今が出花の人丸とは、

自體われ等が目水晶、よく見徹しの法印様

田町からでも畦からでも、錫杖振つて景清

出やれさ、夫ともおのれを打ち放さうか。
人丸 エ、。

平次 返事は何うだ、サア、坂東武者は氣が短いわ。

此の時廟の内より。

景清 待てエ、。

侍三人 ヤア。

景清 佛罰恐れぬ、不敵奴めが。

皆々 何んと。

大薩摩へ時に廟内雷響の、轟くばかり、聲あつて、

景清 漢の壽亭侯關羽字は雲長、今、日の本に靈を現し、姦佞邪惡の輩を、唯一拉ぎに取らん。

大薩摩へ扉をさつと出立つ有様、重聚の面

持たぶやかに、八十二斤の青龍刀、小脇に引付け、丹鳳の、眼は北斗と輝く威風

誠に關帝今更に、生れ給ふに異ならず。

平次 正しく、

侍三人 關羽、

大勢 こりや何うだ。

平次 イヤ恍けたりな腹の皮、これなる山の

關帝廟の、像を其のまゝ關羽とは、尻から

剝ける追落し、冠裝束附け搦まで、かなり捨て、お茶番も、惡七兵衛と今一度、次郎八 名乗り直して、腕廻し。

六藏 その風體は何んのため、イヤサ、

景清 ホ、ウ、凡夫の不審さもあらん、此の

髯面の口からは、勿體なしと思へども、言はて叶はぬ佛の御加護。

平次 とは又何言。

景清 抑も景清、年頃都清水寺の、觀世音を

信じ奉り、十七歳の昔より、三十七の今日まで、毎月三十三卷の、普門品を讀誦し

て、懈怠なかりし御利生にや、最前娘人丸の急難を救ひし折から、梶原が卑怯の矢先に狙はれし、平家の大將景清は、觀音菩薩の御身替り、

皆々 ヤア。

景清 今こそ名乗る、われこそは、誠平の景清に、一門かしこに此處に失せ、平家亡

びし其後は、六十餘州を家となし、折がな

あらば怨敵朝、唯一討ちとしまゝに姿

をやつし窺ふ所に、幸ひなるかな此の度の

東大寺詣ては盲龜の浮木塵華の、花の景清、年月の積もる怨みを散ぜんと、爰の時

に暫らく忍び、時を待ちたる今日只今世にも不思議の御加護は、ハ、ア有難や頼みあり、見よ、おのれ等、觀世音のお胸の血

汐。

大薩摩へ肌を離さぬ、御佛の、御厨子開き

差上ぐれば、

平次 目途にもならぬ利益呼はり、身替りとは其の扉、

二郎八 時の天下に弓をひく、謀叛の頭領景清に、

六藏 佛の御加護は心得ぬ。

平次 サア、迷はずと、討つて取れ。

兩人 ソレ。

大勢 ハ、ア、動くな。

大薩摩へ折からあたりに木魂して、

重忠 ヤア、者共聊爾すな、島山ノ二郎重忠、御鉞を受けて景清に、申す事あり、暫

しく。

大薩摩へ呼はる聲は鶴ヶ岡、鎌倉殿の御威

光に、光り輝く男振り、

合方にて、島山重忠、長上下、家來

を連れて上手より出る。

二郎八 こりや我が君には。

兩人 此の山路へ。

平次 思ひ掛けなく御鏡とは、

重忠 さればなり、此の度南部の盧遮那佛、御再興に付き供養の一つ、天下に大救行はるゝによつては、日頃の忠義を思ひしめし、執念き仇の景清も、今日御赦免の御使、命助けて日向の國、宮崎の莊を宛て行ひ、彼が娘人丸も、便り内府の

景清 や。

重忠 君が仰せの旨も理を、情に替へしおん計らひ、それあの女を、

家來 ハッ、

重忠の家來、人丸の繩を解くと、景清に取付く、

人丸 お前が父様、ほんどくの景清様か。

景清 イ、ヤ、和朝の頼朝なんどに、關らひなき唐人、再び漢の世になさんと、心を碎きし効もなく、かく顯はれて御身の素性も、

人丸 エ、

景清 おのづと爰に明石の前、誠は相國の御孫娘、と他所に言はましほし月夜、鎌倉の情は勝手、此の關羽は恩に被ぬ。

重忠 恩には被せねど曹操が、贈りし錦の直

垂代り、切て夜寒を厭へや雲長。

家來に持たせし赤地錦の直垂を取つて出すと、景清青龍刀の先にかけて受取り。

景清 心こめたる贈り物、暗、人丸よ、コレ娘よ、日本の實の父が遺物のぞ、命の限り大事に掛けい。

平次 ヤア、見すゝこれなる女めき、宗盛の子と知りながら、

重忠 アイヤ、むねがもるやら、柄漏りやら賤の傘屋が育てたる、惡七兵衛が大事の人

平次 それでも現在、彼奴が口から、

重忠 ハテ、大赦に漏るゝ、鱗も御座らぬてや。

景清 曹操殿へは好きに御返事。

重忠 佛の御恩を。

景清 關羽が馬曳け。

二人 ハア。

平次 エ、大佛の、ヤレ供養のと、抹香臭い政道は、此の梶原が肺に落ちぬ、第一不審はあの觀音。

二郎八 我慢なされい。

六藏 もう敵では御座りませぬ。

梶原の寄るを止める、此の間に景清は馬に乗る。

景清 如何に秩父殿、此の隠れ家より大佛迄唯一飛びと豫てから、人目まぎらす染月毛、情の道は越えられぬ、赤兎馬とこそなつたりけれ、今より落つる日向の國、入り日を平家の運を觀じ、千手の御手の御救ひに、彌々繩り奉らん、兩人、娘をあの乗物へ。

平次 このまゝ遺るとは、

刀の柄に手を掛けると、大どろ、これにて景清お厨子を出して戴くと、仕掛けにて後光さして、梶原たじ

ととなる。

皆々 さらば。

大薩摩へ乗物昇かせ、西方へ、手里獨行、千手の御利生、有雅かりける。

人丸は半身駕籠へ入る。景清、重忠、本田、榛澤たち皆々よき見得にて。

幕

要十兵衛は薄後二關羽(左關次二關原早次郎八寶は木田二郎(長十郎)同六藏實は松澤六郎(關次郎)梶原平次是爲高亮次郎高山重忠(猿之助)如人丸實は宗盛の身女明石の前(松澤)

杏花戯曲十種の内（京都南座）

修禪寺物語

夜叉王住家の場

伊豆の國修禪寺村に住む面作り師の夜叉王には姉は桂、妹は楓といふ娘があつて、姉は母方の血を享けて公卿氣質、妹は父の血を引いて職人氣質、しかも妹は同じく面作り師の春彦を夫として身も堅まつてゐる、夜叉王は將軍頼家より面の註文を受けたが幾度作りかへても面に死相が現はれ、期日がすぎても會心の作物が出来なかつた。そこへ頼家自ら催促に來た。是非なく懇れるまゝに面と姉の桂を渡す、かくて桂も己が望みもかなひ、一刻ではあるが名も若狹の局をたまひ、妹脊の契か結ばれたが、北條方の夜襲となる桂は父が作りし頼家の面を被つて身替はりとなり傷つく。役は壽美藏の源左金吾頼家、長

向ふより楓走り出づ。

楓 父、夜討ちぢや。

夜叉 ヲ、娘、見て戻つたか。

楓 敵は誰やら分らぬが、人数は凡そ二三百人、修禪寺の御座所へ、夜討をかけた。

夜叉 俄に聞ゆる人馬の物音は、何事かと思ふたに、修禪寺へ夜討とは平家の殘黨か鎌倉の討手か、こりや容易ならぬ大變ぢや喃

倉の生僧に春彦どのは在さず、何とした事で御座りませふな。

……我々がうるゝ立騒いだとて、何の役にも立つまい、只その成行を見て、居る計りぢや、まさかの時には、親子が手を引いて、立退くまでの事、平家が勝たふが、源

十郎の春彦、松島
の桂、松庭の楓、
左團次の夜叉王。

夜叉王の住家

夜叉王、門に立ちて望む。

修禪寺にて早鐘を
つく音聞ゆ。

氏が勝たふが、北條が勝たふが、われゝには係り合ひのない事ぢや。

楓 夫れぢやと云ふて、不意の戦ひに、姉様は何となさりやふか、若し迷惑ふて、過失でも……

夜叉 ハテ、それも時の運ぢや、是非もない姉には又、姉の覺悟があらう。

暁ける色なし。
寺鐘と陣鐘と交りて聞こゆ。

楓は起ちつ居つ幾度か門に出て心配の體。

向ふより春彦走り出づ。

楓 お、春彦どの、待ちかねた。

春彦 寄せ手は、鎌倉の北條方、しかも夜討の相談を、測らず木陰で立聞きして、其由御注進申上げやふと修禪寺迄は駈付けたが前後の門は皆圍まれ、襲なければ入る事叶はず、残念乍らおめゝ戻つた。

楓 では姉様の安否も知れませぬか。

春彦 姉はさておいて、上様の御安否さへも未だ判らぬ、小勢ながらも近習の衆が、火花を散らして追つ返しつ、今が合戦最中ぢや。

夜叉 何を云ふにも多勢に無勢、御所方とて
も鬼神ではあるまいに、勝負は大かたしれ
てある、とても通れぬ御運の末ぢや、蒲殿
と云ひ上様と云ひ、如何なる因縁か、此の
修善寺は土の底まで源氏の血が沁みる哨。

陣鐘烈しく聞へる。

春彦 夫婦は表を見て、

楓 お、夥しい人の足音、鎧を削る太刀の
音。

春彦 爰へもしだいに近づいて来るわ。

桂 頼家の面を被りて、髪をふりか
け、直垂を着て、長巻を持ち、手負
の體にて走り出て、門口に來りて
倒る。

申し誰やら表に。

夫婦は走り寄りて、扶け起し庭前に
伴ひ入る、桂又倒る。

これ傷は浅ふ御座りますぞ、心をたしか
にお持ちなされませい——侍衆く。

楓 上様、哨。

呼び泣く、桂息もたゆげに。

桂 お、妹春彦どの……父様は何處にぢ
や。

夜叉 な、何と……

怪しみて立よる。

桂 は假面掛な繰捨つ。

皆々驚きて。

春彦 や、上様と思ひの外。

夜叉 お、娘か。

楓 姉様か。

春彦 して此の體は。

桂 上様お風呂を召さるゝ折柄、鎌倉勢が不
意の夜討、味方は小人数、必死に戦ひ女で
こそあれ此の桂も、御奉公始めの御奉公納
めに、此の面をつけてお身替はり早速の
分別、月のくらきを幸ひに打物とつて庭に
降り立ち、左金吾頼家これにありと呼ばは
り、走せ出づれば、群がる敵は夜目遠目
に、眞の上様ぞと心得て、討洩らさじと追
かくる。

夜叉 さては上様御身替はりとは相成つてこの
面にて敵を欺き、こゝまで斬り抜け参つた
か。

血に染みたる假面を取りてじつと見
る。

春彦 われゝすらも上様と、見誤つた程な
る。

れば、敵の欺かれたも無理ではあるまい。

楓 とは云ふものゝ浅ましい此の姿、姉様死
んで下さりますな。

取りすがりて泣く。

桂 は頭を振つて。

桂 いや、いや死んでも感みはない、賤が伏
せ屋で徒らに、百年千年生きたとて、何と
ならう、たとい半刻一刻でも、將軍家のお
側に召し出され、若狭の局と云ふ名をも、
給ひけるからは、これで出世の望みも叶ふ
た、死んでも私は本望ぢや。

云ひかけて倒るを、春彦夫婦介抱す

夜叉 王は假面を見つめてもの云はず
以前の修善寺の僧、頭より袈裟をか
ぶりて逃來る。

僧 大變ぢや、大變ぢや、かくまふて下され
かくまうて下され。

僧 内に駈入り桂を見て。

僧 やあ、こゝにも手負が、おゝ桂殿こなた
もか。

桂 して上様は。

僧 お悼はしや、御最期ぢや。

桂 え。

這ひ起きて偕と見る僧は涙を呑んで、
僧 上様計りか、御家來衆も、大方は斬り死

に、わし等も側杖の怪我せぬ中と、命から
逃て來たのぢや。

春彦 では、お身替はりの甲斐もなく。

楓 遂にやみ／＼御最期か。

桂は失望して又倒る。

楓は取つて、

楓 これ姉様、心を確かに、のう父、姉様が
死にますぞ。

云ふ、今まで一心に假面を凝視し居

たる夜叉王、始めて顧みて、

夜叉 おう姉は死ぬるか、姉も定めて本望で

あらう、父も亦本望ぢや。

楓 え。

夜叉 幾度打ち直しても、此の面に死相のあ

り／＼と見へたるは、われ、拙きにあらず

鈍きにあらず、源氏の將軍頼家卿か、かく

相成るべき御運とは、今と云ふ今始めて悟

つた、神ならては知ろしめされぬ人の運命

先づ吾が作に現はれしは、自然の感應、自

然の妙技、藝神に入るとは此の事よ伊豆の

夜叉王われ乍ら、天晴れ天下一ぢやのう。

笑ふ。

桂は苦しき中に打笑みて、

桂 妾も天晴れお局さまぢや、死んでも思ひ

置く事ない、些とも早ふ上様の御跡を。

夜叉 やれ娘、若き女が斷未覺の面、後の手

本に寫しておきたい、春彦筆と紙を。

春彦 ハツ。

細工場に走り入りて筆紙など持ち來

る夜叉王筆を取りて。

夜叉 娘、顔を見せい。

桂 あい。

春彦夫婦に助けられて、苦痛乍らも

這ひよる。

夜叉王は一心にその顔を模寫す。

僧は口の中に念佛す。

幕

大野醫學博士
乳兒に一番良
パームオイル
松竹炭

杏花戯曲十種の内（京都兩座）

番町皿屋敷

一 幕

青山播磨といふ旗本にお菊といふ召使ひの情婦があつた。近頃播磨が嫁を取るとの噂を小耳に挟んだお菊は男の心をためさんと家重代の寶器の皿を五枚故意に打つた。皿を打ちわつた時は手討になる家風である。

役は左衛門次の青山播磨、左升の柴田十太夫、荒次郎の權次、松蔭のお菊。

權次 もし、殿様、暫くお控へ下さりませ。先刻から物影でそつと立聞きをして居りましたら、お菊どのが大切のお皿を割つたとやら砕いたとやら、そりやもうお菊どのゝ落度は重々そのかぼそい素ツ首をころりと打落とされても、是非もない破目ではござるものゝ高が女子じや、骨のない海月や豆腐を料理なされても、何の御手堪えもござ

りますまい。先刻の喧嘩とは譯が違ひまする、こゝは何分この奴に免じて其のお刀は、お納めなされて下さりませ。

播磨 そちが折角の取なしぢやが

この女の罪は赦されぬ、何んとも云はずに見物いたせ。

播磨 え、播磨が今日の無念は、おのれ等の奴が、知るところでない、いかに大切の寶なりとも人一人の命を一枚の皿に替へやうか、皿が惜さにこの菊を、成敗すると思ふたらそれは大きな料見違ひぢや、菊その皿をこれへ出せ。

お菊 はい。

時の鐘聞ゆ。

お菊は恐るゝ箱より一枚の皿を出す。播磨は其皿を刀の鐔にて打ち當て割る。お菊も、權次も驚く。

播磨 それ一枚、菊、跡を數へい。

お菊 二枚。

お菊は皿を出す。

播磨 それ二枚次を出せ。

お菊 三枚。

播磨、また打割る。

權次 おゝ三枚。

權次も思はず仰上る。

播磨 次を出せ。

お菊 四枚。

播磨はまたもや打ち割る。

播磨 四枚、もう無いか。

お菊 あとの五枚は、お仙どのが別のお箱へ入れて持つて参りました。

播磨 むゝ、播磨が皿を惜むのでないのは菊にも權次にも判つたであらうな、青山播磨は五枚十枚の皿を惜んで、人の命を取るほどの無慈悲な男でない。

權次 それほど無慈悲でないならば、何んてむぎゝ御成敗を。

播磨 そちには判らぬ、黙つて居れ、併し菊には合點が参つた筈、潔白な男が誠を疑ふた女の罪は重いと知れ。

お菊 はい、よう合點がまいりました。此の上はどのやうなお仕置を受けませうとも、思ひ残すことはムリませぬ。女が一生に一度の男(播磨の顔を見る)戀に偽りのなかつたことを確かにそれと、見極めましたら死んでも本望でムリまする。

播磨 若し偽りの戀であつたら、播磨もそちを殺しはせぬ、偽りならぬ戀を疑はれ重代の寶を打割つてまでも試されては、どうしても赦すことは相成らぬ。それ覺悟して庭へ出い。

ト、お菊の襟髪をとつて庭へ突き落す。

權次は慌て、お菊をかこふ。

播磨は庭下駄を穿いて降り出つ。

權次、邪覷するな退け。

權次 殿様、女を切るとお刀が汚れまする。

一旦柄へかけた手の遣場がないと云ふならば、おさうじや、あれあの井戸端の柳の幹でも、すつぱりとおやりなされませ。

播磨 馬鹿を申すな、退かぬとおのれ蹴殺すぞ。

ト、權次がさへ切るを、播磨は拂ひ

退けてお菊を前に曳出す。

權次 えゝ殺生な殿様ぢや、お止しなされ。

權次 またも取付くを、播磨は蹴倒す。

お菊は尋常に手を合せて居る。

播磨は一刀にその肩先きを切倒す。

權次 おう、とう／＼やつておしまいなすつ

たか。(起き上る)可哀想に暗。

播磨 女の死體は井戸へ投げ捨てい。

權次 はあ。

權次、お菊の死體を抱き起す。

上の方より十太夫出づ。

十太夫 おゝ、お菊はお手討に相成りましたか、不憫のやうではムリますが心柄いたし方もムリませぬ。

權次 殿様お指圖ぢや。(井戸を指す)手傳ふて下され。

十太夫 これは難儀な役ぢやな、待て。

十太夫は袴の股立を取り、權次と一緒に

所にお菊の死體を上手の井戸へ沈め

る。

播磨は、立上つて井戸を覗く。

鐘の聲。

播磨 家重代の寶も碎けた。播磨が一生の戀も亡びた。

向ふより權六走り出づ。

權六 申上げます、水野十郎左衛門様、これ

へお越しの途中で町奴どもに道をさへぎら

れ、相手は大ぜい、何や彼やと云ひが、り

喧嘩の花が咲きさうにムリまする。

權次 むゝ、そんならまだ先刻の奴等が、そ

こらを彷徨いてゐたと見えるわい。

播磨 よし、播磨がそこへ駆け付けて町奴どもを、追ひ散してくれやう。

ト、播磨は股立を取りて縁に上り、

なげしにかけたる槍の鞘を拂つて、

庭にかけ下りる。

十太夫 殿様、又しても喧嘩沙汰は。

播磨 やめいと申すか、一生の戀を失うて

(井戸を見やりて)あたら男一疋がこれから

は何をして生きる身ぞ。伯母御の御勘當受

けうとまゝよ八百八町を暴れ歩いて、毎日

毎晩喧嘩商賣、その手始めに(槍を取直し

て)奴まるぬれ。

二人 はア。

播磨は足袋だしのまゝ走り行く。

左團次一派の人々

森 ぼ の ぼ

◇左團次君とその一座

私が左團次といふ優を好きになり始めたのは、松居松葉氏の書かれた『敵國降伏』のマルコボローに扮した彼を見た時からだ。未だ延舛時代で二十三四だつたらう。初鯉のやうに潑刺としてゐるのが、たまらなく好きだつた。たしかダークグリーンの天鵝絨服だつたと思ふ、金箔模様の黒い長マントを背に垂らした輕快な拵で、花道を大腿に生々と歩いて行く姿は、未だに頭に残つてゐる。(この懐しいマントは、後に自由劇場で吉井勇氏の『河内屋與兵衛』を演つた時、ドン・ファンの衣裳に用ひたさうだ)それから、明治座籠城時代の『旋錚出世龍德』の勝次郎なども理屈無しに好きなものだった。今、『鳥邊山心中』の半九郎に見るやうな、高雅な色ッ

ほさは、既う其頃から片鱗を見せてゐたやうに思はれる。外遊後、第一の出し物だつた、『袈裟と盛遠』——これも松葉氏の作だつたが——極めてフレッツシユな、張詰めた覇氣のある新演出の盛遠も亦自分には忘れ難いものである。併し、彼は未だ本當に世間から認められもせず、迎へられもしなかつた。彼の異彩ある藝風や、一座の人々の匿れてゐた技倆が漸く知られるやうになつたのは、山崎紫紅氏の『歌舞伎物語』や『底倉の湯』岡本綺堂氏の『安政黒船話』『貞任宗任』『修禪寺物語』等が上演されてからのことだ。斯様な新作品が後から後からと發表されるに従つて、一座の人々の存在は愈々有意義に、愈々鮮明になつて來た。中でも『尾上伊太八』などは、此人々にして始めて、不器用ながら眞摯な、統一のある演出を見ることが出來たのであらう。そして左團次君の飾りツ氣や、胡魔化しや、銜氣のない、極めて純な眞卒な明朗な藝格は、段々世間から迎へられるに至つたのである。

左團次君には『番町皿屋敷』や『佐々木高綱』『室町御所』等の所謂、松莚十種(杏花十種)以外、新戯曲の演出は、數に於て比肩すべきものが無いのみでなく、其十中八九は傑作と見做して可いので、これだけでも既う生きがひある仕事を

残してゐる。而も前には、小山内薫氏と一緒に創始した自由劇場の企があり、後には『鳴神』毛拔『關羽』等の十八番物、大南北物の復活がある。これも亦功績ある仕事だつた。乃ち、新しい役者左團次は、歌舞伎役者の一人としても忘れることは出来ぬのである。

彼は近來、既に行詰つたと言はれる。併し、最近演じた、『西山物語』の源太や『朝鮮屏風』の寛信、『天保演劇史』の遠山を見ると、氣魄の力強さは、やはり他の追従を許さぬものがあり、而も、技藝は漸く圓熟の境に這入つたかの感がある。絢爛ではないが、奥行のある、滋味の含んだ藝格に接するのは、實に今後に待つべきではないであらうか。嘗つて畏友楠山正雄氏は、『彼はいつも仕事を忘れない人』だと言つた。願はくは彼をしていつ迄も、その評語の通りであらしめたいと思ふ。

◆壽美藏、松蔦

この二人は、本尊に對する勝侍の感がある。全く二人は永い間、離れ難い關係に置かれてあつた。その長い年月、長い舞臺上の體驗が、知らず識らずの間にお互のイキをピタリと

合はさせるのである。『旗本五人男』のおこよ、源三郎『箕輪心中』のお米、十吉などは、多くの合作中の、特に代表的なものと言つて可いであらう。

松蔦は、左喜松から莚若に改名する頃から、小じんまりした可憐な姿が、私達若い者の心を唆つたのであつたが、その頃は未だ今日のやうな、大な役者にならうとは思ひも寄らなかつた併し、此優の素質のせいのだらうが、その役柄は、壽美藏君のやうに範圍の廣いわけには行かない。自由劇場の『ボルクマン』にエルラ、『夜の宿』にナタシヤ、『寂しき人々』にアンナ・マアルを演つた時分は、未だ莚若時代で、純眞な美しさを多分に持つてゐたが、いつか段々エロチックさを増して來て『薩摩唄』のおまんや、『皿屋敷』のお菊、『鳥邊山』のお菜にはピツタリ欲つた舞臺を見せてゐる。併し、此優は妖艶さ、豊麗さを生理的に缺いてゐるから、『お艶殺し』のお艶や、『相馬の金さん』の唄の師匠、『法成寺物語』の四ノ君といふやうな役柄にはどうも適合らない。

元來、松蔦君の女形には、華やかさの裡に哀れさが匿されてゐる。而もその哀れさには突詰めた深みはなくて、何處か晴れやかな氣輕さが漂つてゐる。『皿屋敷』のお菊、『鳥邊

山』のお染など見ても、どうもそんな感じがしてならない。それはあの澄み切つた眞圓い眼、伶俐巧な顔立、しほらしが冷やかな、あの聲の原因する處が少くないと思ふ。

壽美藏君の出世藝と言へば、左團次歸朝後第二回目的興行『歌舞伎物語』（山崎紫紅氏作）の小姓右京であらう。父の命に反くに忍びず、いつくし深き主君を毒害して、己も自殺し果てる短い、脆い運命の美少年を彼は卒直に描き出してゐた。それ以前、高丸、小満之助の昔は知らないが、登舟時代に文士劇若葉會で演じた處の『金平天狗問答』の稚兒で無邪氣な、潑刺さを見せたのを覚えてゐる。これは當時の評判も亦好いものであつた。その後、左團次が始めて演じた綺堂氏の脚本『維新前後』に、彼は病軀に懷えてゐる白虎隊の一青年に扮したがこれ亦好評であつた。續いて上演された綺堂物の『黒船話』『貞任宗任』『修禪寺物語』等々に、左團次が首尾よく成功すると共に彼も必ず相當の効果を上げて、等しく世間から認められるやうになつた。左團次の夜叉王に娘かつら、高綱に馬飼子之介、半九郎に源三郎などは、彼の代表作と言ふべきものであらう。

かの自由劇場にあつても、『夜の宿』の男爵、『星の世界』の大學生、『寂しき人々』の新夫人等は、主事、小山内氏の推賞して措かなかつたものでこの自由劇場に依つて特殊の技

能を世間からも認められたのは彼にとつて何よりの幸であつた。壽美藏君は、いかにも素直な、温和な天性の優だ。その素質が能く役柄の上にも現はれてゐる。『品川の臺場』の蜆賣や、『貞任宗任』の小次郎、『箕輪心中』の十吉、浪花の春雨の六三郎等がそれである。元來、何を演らせても相應に演つてのける器用さはあるが、勘弁は好くても、直侍は適つてゐるとは言へない。同じ俠客でも『水野十郎左衛門』の極樂十三は科し得ても、『皿屋敷』の放駒は必ずしも好いとは思へない。女形も『修禪寺物語』の娘桂、『長良の人柱』の巫女など好評で、松蔦の代り役で勤めた『壽門松』の吾妻の如きは、情熱があり、肉感的である點で、久保田萬太郎、小山内氏等から大に褒められた事さへある。そして昔も今も、左團次一座にとつて唯一の二枚目であることは、如何に心強いことであらう。

尙、この一座には古老の左舛を始めとして、荒次郎、米左衛門、薨八、長十郎、團次郎、各自異色ある中堅どころが控へてゐる。殊に近年は新しい頭の猿之助君の共演もあり、左團次の嗣子、松蔦の参加もあつて、一座はスツカリ基礎を堅めて了つた。最近の傑作『西山物語』の如きも、此二優の功に負ふ所が尠くあるまい。而して今後は愈々さうあるであらうと思ふ。私は一座の健全な進展を祈つて筆を擱かう。

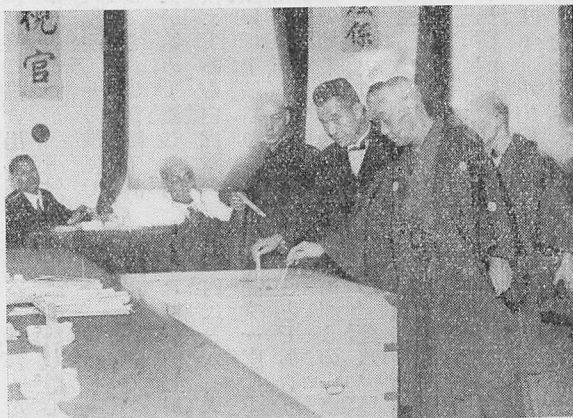
B・Kが中繼した「勸進帳」

大阪中央放送局はさきに四ッ橋文樂座が開場式當日「壽式三番叟」を同座から中繼、全國に放送したところ非常な好成績を挙げ、フアンの評判もよかつたのに鑑みて、去月十六日は二の替り開演中の「勸進帳」上場の舞臺から中繼放送をなした、大隅太夫の辨慶、三味線道八等五十餘人の賑やかな出演で、寫眞は「勸進帳」の舞臺。



投票場の白井社長と成駒家

二月二十日、民政が勝つか政友が勝つか。とまれ政黨、立候補者は勿論、全國民のエネルギーとゼストはこゝに集中されてある時、大阪第二選舉區内にある當時中座二月興行の「忠臣蔵」に出演中だった大成駒家は松竹白井社長と同道にて投票場に權利行使の一票を投じに趣いた。誰に投じたか？それは解らぬとしても寫眞は投票場の鴈治郎と松竹白井社長。



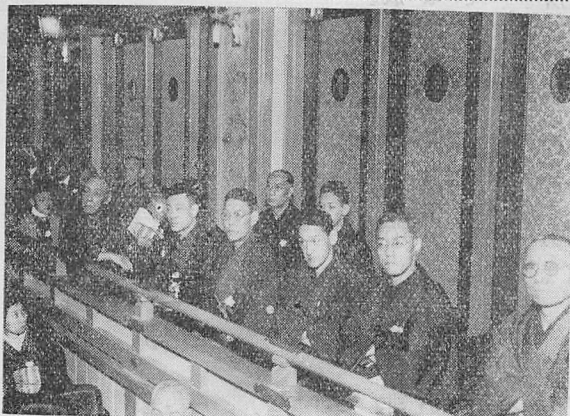
大森正男 歸る

日本の演劇界の一隅に漸くナンセンスカルなレヴューが頭をもち上げて來た、そこに目をつけた松竹ではさきに松竹樂劇部の大森正男君を遠く巴里に送つてその本格的な研究を積みしめたが、此程歐洲一圓の見學を終り米國を経て二十五日歸朝した。當の大森君すつかりバリヂヤンになつてワイルトラ、モボよろしく松竹座入りをなした。



文樂の俳優デー

四ツ橋文樂座廿六日は俳優デーにて廿五日中座を打上げた鷹治郎、福助、右團次、市藏、長三郎、成太郎、橋三郎等に東京側では幸四郎、勘彌、三升等浪花座出演中だった延若、我童、魁車、吉三郎等の、東西の大名題連を網羅する約八十名の總見があつた延若、魁車、我童等は浪花座で、國性爺を演つた關係上人形の動作、津太夫の語りに興味を持つた由。



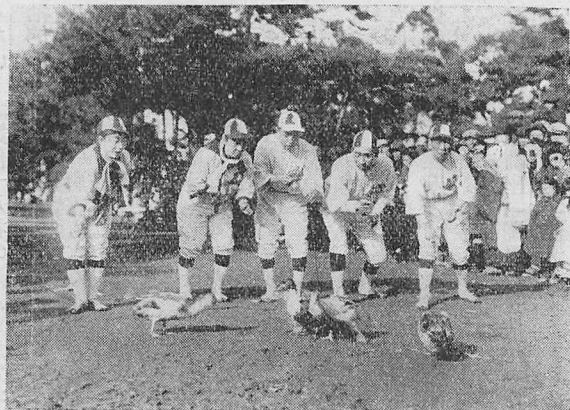
福井茂兵衛逝く

心臟病のため一月七日以来赤十字社大坂支部病院に入院加療中だった新派の元老福井茂兵衛は一時小康を傳へられてゐたが二十四日以来衰弱頓に加はり遂に二十六日午後十一時半永眠した。死期が近づくや「白井松次郎、大谷竹次郎兩氏に感謝する」意味の遺言を認めた、享年七十一。尙葬儀は三月一日阿部野新齋場にて賑やかに舉行された。



家庭劇の運動會

二十六日二の替りを打上げた角座の家庭劇は大入り祝ひの運動會を二十七日正午住吉公園にて男女優總出場にて華々しく開催した。番組の重なるものは、近來メキメキと腕を上げた家庭劇野球部の模擬戦、兎飛び競争、風船煽ぎ、七色競技、胴丸競争、借用新競争、紅白模擬戦争家鴨の競争等々殊に天外のランニングはいつもトップをきつて觀衆を喜ばした。



關羽寸考

高 谷 伸

成吉思汗は源義經なり、いや義經に非ずといふことが問題となり、史家の間に論争が交されたことがあつた。

それに、漢の壽亭侯關羽、字は雲長は惡七兵衛景清なりといふ、とんでもないことが否定もされず堂々と舞臺を闊歩してゐる所に歌舞伎の面白さがある。

淨瑠璃に現はされた義理人情の世界が世態の變遷につれて、興味の中心から遠ざかつて行つた時、歌舞伎は繪畫的な美しさと、ナンセンスの面白さを以てこれに代えた。歌舞伎十八番にはこの二つの特徴が多分に含まれてゐる。關羽もその代表的なものゝ一つである。

淨瑠璃のやうな定本のあるものさへ、しばしば改削を加へられた程であるから、義太夫輸入以前の脚本には完全な舞臺用の

臺本といふものはすくない。歌舞伎十八番の殆んどが定本のかつたのは勿論、概括的に十八の種類が列べられただけで、今のやうに、歌舞伎十八番の麗々しい肩書もなく、狂言名題も時によつて、それ／＼違ふのみならず、仕組もその度毎に變つてゐるのが普通であつた。

暗峠で、はからず娘人丸を救はうとした景清が、梶原の矢先にかゝらうとするが觀音の利益で廟内に隠れ、關羽の姿となつて再現するといふ左團次演ずる關羽は、古劇の味もよく取込んでゐるから、今後は十八番の關羽の定本となるかも知れないが、初演の關羽は、また別趣のものだつたと思はれる。

始めて舞臺に現れた關羽は、市川海老藏（二代目團十郎）所演のものである。歌舞伎年代記を繰ると、元文二丁巳の年の項から翌年へかけて關羽のことが載せられてゐる。

（元文二年）同霜月顔見世。河原崎座『閏月仁景清』みをのや四郎三甫右衛門。せんじゆのまへ嵐宇源太。まんじゆのまへ菊太郎。惡七兵衛かけ清市川團藏。畠山庄司治郎重忠市川ゑび藏。似せ景清ゑび藏。似せ重忠團藏。梶原平藏市川團四郎人丸ひめ中村吉藏。あこや袖崎菊太郎。本田次郎團十郎。はたけ山重保に七三郎也。秩父巡禮。西國巡禮。海老藏兩人出合大當りにて、此狂言春まで持こす。

○元文三 戊午年

春河原崎座去年の狂言をもちひ『初縁豊年調』去冬の二ば

ん目楯はらしけやす兩人にて、あこや人丸にかけ清がありかせんぎ。雪ぜめのところへ海老藏重忠羽折の形にて、なまえひにて妻あさり菊松に、かさをさし懸させて出て、某がせめようはと、人丸ひめに琴をしらべさせ。あこやに三味せんをひかせ音色に耳をそばだて。異國本朝のためしをいひて、本多半次にいひつけ、手水鉢のかけより、景清を見つけ出すを。梶原には新参の下人。七兵衛といふものもとて、此場を見のがす所大評判。一ばん目の大詰に海老藏關羽。團藏張飛是又去冬よりの大當り也。

右の記述を見ると、關羽よりは重忠の立役ぶりが好評だったやうではあるが、海老藏は關羽がよほど氣に入つたらしく、五年目の寛保二年に大阪でまた關羽を出してゐる。

寛保二年九月十六日初日道頓堀大西芝居（佐渡島座）切狂言に市川海老藏の暇乞として『東山殿旭扇』の名題で出したものである。

この大詰に關羽が青龍刀を持つて白馬に跨つてゐる畫像が懸けてある。この前で善人が難儀にあつてゐる所へ關羽の畫像がぬけだし實惡の山名久國を斬り、細川勝元を援助するので東山家は安泰といふ趣向のもので、これには不破名古屋の争ひも取り込んであつてその趣向はそっくり同年霜月京の南側の芝居の顔見世に『花婿名古屋』の名題で用ひられてゐる。

海老藏は大阪滞在中の出し物に、それ／＼自信のある役柄を

ならべたらしく、七代目團十郎が十八番を撰んだ中には、この上阪中の狂言が大部分入つてゐると見ても過言ではない。従つて團藏と共演の前者よりは、海老藏主演の後者の場合に於て十八番としての關羽の基礎が確立したと見るべきであらう。

九代目團十郎が河原崎權之助から俳名の三升となつた明治六年九月二十四日初日の村山座の『増補桃山譚』で關帝の靈像實は石川五右衛門に扮してゐる。これは團十郎の再演の地震加藤の清正が主ではあるが、關羽のだんまりで十八番をほのかに匂はせたと見ることもできる。この時三升の給料が八百五十圓で外に中村座へ掛持して五百五十圓を得たことが當時としての新記録だつたと傳へられてゐる。

以上の例を見ても關羽は、ある時は景清になり、ある時は五右衛門になり、また突如として足利家に現れたりするが、つまりは黒髭白馬青龍刀を携へた堂々たる威風を讃嘆する心の現れなのである。

享保の頃江戸八百八町に流行した漆繪に關羽の像がある。團十郎初演の時に、或はこの漆繪に暗示を得てゐたかといふ想像もせぬではない。

江戸時代に於て歌舞伎の浮世繪に與へた影響、浮世繪の歌舞伎に齎した効果、それは歌舞伎の繪畫美を考へると共に忘れることのできない問題である。

がある。あのびつこの福井老、やせた右の肩をあげてはとがらせ「ヤイ、小織！もうお前とは絶交だ、お前が死んでもおれは葬式にも行つてやらねエからさう思へ」と毒づいた。その福井老がお先に死んだ。小織帝劇の樂屋で福井の本葬が三月一日に営まれたと聞いて今更あの時の面影を思ひ浮べて微苦笑を洩らしたかどうか——。

×

劇界にも思想問題がやかましくなつた。一部の若手が名門に對する反感も深くなり、遂には左翼的な劇運動に参加して盛んに氣焰をあげてゐる。

但し、それは東京の話である。

×

小太夫と長十郎が引ッ張られた。事件はトバクの事だともいひ、思想問題からだともいふ——。

いづれにしても劇界の不祥事である。

といふので、協會では會長梅幸始め委員連が集まつて俳優の思想取締、風紀取締をやかましくするとか。

これも東京の話——。

×

こんどは大阪の話——。

「次の時代の會」といふ歌舞伎の若手を網羅した團體がある。

こゝで、朗讀會を始めたのがキツカケで、こんどは高砂家福助の御曹子政治郎君中心の朗讀會が生れた。そして毎月一回づゝやつてゐる。

會場は清水町の高砂家邸、稽古舞臺があるので、これへ俳優が並んで本をよむ。

子ぼんのうの福助、必らずその會に頭を出して聴衆に一場のあいさつをする。

「どうぞゆつくりとお芝居を聞いて下さい、そして御退屈になつたらお茶もお茶菓子もお手許へ配つてございますから御遠慮なく召上つて下さい」と。

×

「新興演劇」の第一號で豊岡佐一郎氏が「露露形態より客觀的形態へ」といふ一文でアジ。プロの左翼的演劇を否定すると、第二號で森田信義氏が「アジ結構、資本家はヘナチヨコでもかまわな」と豊岡氏の一文に反對を唱へてゐる。

二人共その雑誌の同人であるが、この喧嘩は八百長とだけは見逃さない。



夜叉王を中心に

山本修二

わが國の演劇始まつて以來、戯曲の數は多しといへども、藝術家の心境を取扱つた作品は、殆ど絶無といつていい、勿論、古くは吃の又平を扱つた『傾城反魂香』とか、左甚五郎を扱つた『京人形』とかその例外はあるにはあるが、これは彼等の變人とか奇人とかに近い方面、即ち偏執とか愚直とかを描いたもので、寧ろ觀衆の憫笑を買ふべきものである。少し變つた方面では、新七の『名人長次』があるが、これは人も知るモオパッサンの改作である。即ち我が國固有の作物には、藝術家の自信とかブライドとかを現はしたものは、全くその例に乏しいのである。

その理由は多々あるだらう。藝術は士君子の玩ぶべきものではないといふ封建的な考へから、造形藝術家を職人と呼び、文藝家を戯作者と呼んだ、徳川時代の社會思潮が、しからしめたものだとも云へる。しかし、もつと突込んだ言ひ方をすれば昔の座付作者といふものが、全く俳優の云ひなりになり、その

注文に従つて、戯曲を改竄してゐたといふ意久地なき状態が、高き『藝術家の誇り』といったやうなものを、味あはせなかつたにもよるのだらう。

しかるに岡本綺堂氏の『修善寺物語』は、恐らく藝術家の自信を描いた最初の作品なのである。夜叉王の

——神ならでは知しめされぬ人の運命、先づわが作にあらはれしは、自然の感應、自然の妙、技藝神に入るとはこの事よ伊豆の夜叉王、われながら天晴天下一ぢやなう。

といふ絶叫は、日本の舞臺を揺がした藝術家の最初の『自己陶醉』であつたのだ。

物の本にも書いてある通り、この『修善寺物語』は、素人である。『劇作家』と、立人である『俳優』の最初の握手を記念してゐる。從來の考へ方からすれば、文藝家などに『しばる』のことが判つては堪らなかつたのである。しかるに、この作は、門外漢といへども、劇場に、或物を、寄與し得べきことを證明した。しかして綺堂氏が、劇場に寄與した最大のものは、この『藝術家の誇り』であつた。

私は先きに『立人である俳優』といふやうな言葉を使つたが初演以來この役に扮してゐる市川左團次氏を表現するのに、餘り適當でないことは明白だ。この劇が初めて上演された明治四十二年頃の同氏は、色々な意味で、これ亦一個の素人であつた即ち素人の持つ單純さ、明快さ、素朴さ、さういつた物が同氏

の技藝の根柢となつてゐた筈である。彼も又『藝術家の誇り』を、劇場に移入した最初の一人ではなかつたか。いつも同氏の夜叉王で、最も感動させられる所は、權勢の脅迫に、心に染まぬ假面を、已むなく手渡したものの、無念さの沈黙から、突如立ち上つて、假面を叩き碎かんとするあの時の颯爽たる意氣込みであるこれは藝術家としての自信を持つ者のみが、始めて表現し得る境地である。

『修善寺物語』を見た人は、綺堂——左團次といふコンビネーションの劇界に與へた革命的意義を知るであらうが、コンビネーションには、全く別趣の向古の方面がある。それは『鳥邊山心中』に始まり『番町皿屋敷』で絶頂に對した『新世物語』の一面である。これは、綺堂氏の日本古劇——就中近松研究のもたらした副産物とも云ひ得るものだが、他方に於て獨立した絶對價值をも持つてゐる。いつか永井荷風氏は、左團次氏の有する『身體の色氣』と云つたやうなものを推賞したと記憶するがそれは第一場の終りで、播磨が『お、散る花にも風情があるなう』と言つて、空を見上げた瞬間に、最も鮮かに現はされるそれが暗轉の直前であるだけに、いよく深い感銘を残す。それからこの脚本の第二場の終りの、播磨がお菊を井戸へ切下けた夕暗に、十太夫が燈籠をさけて出て、——お、菊はお手討に相成りましたか。と、低く呟く瞬間の、ぞつとするやうな佗しさも、忘れ得ぬも

の、一つである。あの氣持を醸し出すに、左升氏の十太夫は、どうしても缺くべからざるものだ。同氏とか荒次郎氏とか、優れた脇役者を持つことは、この一座の強味である。最後に私は、當時朝日の勢ひの新進氣鋭の猿之助氏が、今度の南座で、どれ程までに活躍するか、最も期待するもの、一人であることを、特に言ひ添へて置きたいと思ふ。

上演脚本の發表と新進の紹介

二百餘頁のなれば
脚本専門雑誌



毎月一回發行
一部五十錢

舞臺戯曲社

毎月一般より脚本を募集す

る語と夫太のさ

る げ し 内 の 山

雨を見やりながら四世さの太夫はボツリくくと話し出す。さの太夫の名跡は私が今度襲名して四代目ですが、初代のさの太夫は生地の名に因んだと聞いてゐます泉州佐野の人で、その頃盛名を馳せてゐた氏太夫の秘蔵児でしたが、後に文字太

しとく春の小雨が山茶花の紅を増してゐる静かな庭——かつては一代の名匠を誇つた越路太夫が遺愛の庭樹は今日は一しほ生々としてゐるが如くに見られる。主のさの太夫は本年とつて二十一年の適齡、顔なら貌なら先考の面影そのまゝの美青年である。江戸堀北通四丁目を東へ入つた落付た家構へ。障子越しに春

夫と改め、晩年更に五代目春太夫を繼いだ純藝術家でした。

淨界の偉人攝津大椽もこの人に就いて大いに學んだそうです。生地佐野から出たゞけにさの太夫と命名したのですが「さの」と平假名でいつて態と漢字を避けたあたり和やかな風采が偲ばれます。私の父の越路太夫は名人攝津師匠の教へを受け尙、豐澤團七師匠について熱心な稽古をつけて貰つてゐました。まあ、そういういつた關係から二代目の太夫を襲名して、間もなく初代常子太夫と改名し、文字、越路と數次的に襲名披露をした次第です。

團七さんはそれから東京に住居を移され、息子さんには湊太夫と小さの太夫といふ俊才がお有りです。小さの太夫さんが最近では三代目のさの太夫の名跡を繼いでゐられました。それが今度皆様なり、師匠土佐太夫さんの御厚情で私が四代目の太夫をつがせて戴く運びになりましたので、言ひしれぬ歡喜の瞬間、ま

た新しい名前前に對しての小さいながらの責任感も湧き立つのです。この上は大方皆様のかぎりなき御援助を蒙つて名跡さの太夫を完うしたいと希つてゐる次第です。

今年やつと成年に達しましたから、もうですね、私の初舞臺は今から七年前十五歳の春でした、狂言は忠臣藏で七段目の力彌を振當てられ御靈文樂の床に袴の襟を正したといふわけですが、父は宿院で臥つてゐましたが其間でも熱心に稽古をつけてくれました。今憶ひ出しても其頃の父の面影がありくとして、私に勉強



師をしとふ

文字 太夫

しろ、そこはこう語るのだ、地合はこうだど叱るうちにも愛情の溢れた言葉が耳に應へて來ます。今度の藝名狂言は「妹脊山婦女庭訓」山の段であります、師匠土佐太夫さんに従つて、腰元で御披露申上ることに御座います。と語尾を結んだとき、庭樹を通して越路の銅像に降りかゝる小雨がその眼のあたりに熱く光つたやうに思はれた。

(文責記者)

恩師竹本越路太夫は藝道にはかけひななく實に熱心なものでした。稽古も深切でそれだけまたやかましく私も度々師に教をうけた事があります。その音調節まわし等實にあざやかで机の向ひに座して面白くき、入つて仕舞ひ、時に二三頭を見舞はれた事も思出されます。

次に師は一般門弟衆には實にやさしく直門弟には嚴格そのもの、やうに規律を重んじてやかましく、再三ならず大目玉を頂戴したものです。然し師は人を大勢よせて無禮講で遊ぶ事を好まれました。旅興行のさい、公園で運動會をやつた事は少なくありません。又日數の都合で一日休みがあればその土地で芝居見物に一座を行き連れて見物に行く事も過去の話です。

(中座 三月上演)

長右衛門 花 巴 一幕二場 市之丞

【梗概】 稼業一まくの働手と評判をとつた鏝師の長右衛門は偶とした機會で新町大和屋の遊女市之丞を知つた、三十近いけふまで傍眼もふらず我れながら堅固に樂き上げたといふ信じてゐた心の土臺は唯一夕の奇遇によつて譯もなく崩れはじめた、然し女の心は冷たかつた。それが糸問屋の息子孝助といふ想思の男がある爲めと知つても彼の心はどうするこ

とも出來ず、戀の上に意地までが加はつて遮二無二衝き進んだ末が、戀敵の孝助に争ひ勝つて潮女を我ものにした替はりには身代ばかりか、店も稼業も失つて明日はさて措き今夜の寝る所もない有様になつてゐた、兎も角も勝ち誇つた長右衛門は女の手を曳いて廊を出た。何處へ……地的もない路を高津の境内に來た時、彼の心に潜んでゐた最後の考へが頭を擡げて來た。無情い女を殺して自分も死ぬ。だがたま／＼跡を追ふて來た妹とお小夜の意見と、それを聞いて俄に一變した市之丞

の心とて覺悟は崩れた。長右衛門の面には生氣がよみがへつた。生きやう、生きて女と共に再生の喜びに浸らうと。然し運命といふいたづらものは二人を幸福な道には誘はなかつた、閃めく刃に一さいの終焉が來て、魔のやうに巷の灯影が紅くまたゝいだ。

【配役】 鏝師長右衛門(延若) 糸屋孝助(橋三郎) 伯父安兵衛(長太夫) 亭主島屋新兵衛(徳三郎) 同重兵衛(奥山) 僧了道(鷹若) 亭主大和屋惣右衛門(大吉) 幫間夢平(霞仙) 糸屋手代政七(鷹正) 島屋女房お才(長右衛門) 妹お小夜(扇雀) 遊女大和屋市之丞(魁車)



【浪花座三月興行上演】

あひる女

門脇陽一郎

人物

- 一、床屋のあるじ 小山彌七・藤村秀夫
- 一、姉 娘 お桂・筑波雪子
- 一、妹 娘 お袖・高尾光子
- 一、都會の青年 人見泰・高田亘
- 一、郵便配達夫 新太・吉田豊作
- 一、宿屋の客引 六郎・小笠原茂夫
- 外ニ 宿屋の女中

おかみさん風の女

見送人おなつ

驛員

見送人、乗客大勢

第一場 温泉村の床屋

舞臺・三角かざり、山間の温泉場の理髮店

の内部、下手に舊式な鏡二ツ、椅子二三脚、粗末な洗面臺、其他の理髮道具、上手二重一間ばかりのれんじ窓、窗外桃林、ずつと上手奥へ出入りの障子、正面に外へ出入りのガラス戸。

開幕 春の日の午さがり。

鏡の前の花瓶に桃の花がさしてあるねんねこにくるんだ赤ん坊が二重に寝かしてある。

小鳥の囀り。

郵便配達夫の新太が出て来る。

新太 郵便ツ——彌七さん、郵便ツ、

その聲に赤ん坊が泣き出す。

新太 おや、赤ん坊を置きツ放しにして、のんきな家もあればあるものだ。おけいさん

赤ン坊が目を覺ましたよ——困つたなア、

抱いてやりたいけど、おりやこれから廻りやらかすところだから——おツ、よし

泣くんだ、お桂さん、仕様のねえお母ちゃんだ、お桂さん、子供を置きツ放しにして何處へ行つてゐるんだ、おツよし、（と、抱いて）、小父ちゃんがお母

ちゃんのところへ連れて行つてやるから泣くぢやないよ、おツよし。

と云ひ乍ら迷惑さうに赤ン坊を抱いて入る。

活動寫眞の町廻り——宿屋の客引き六郎が出る。

六郎 今日、誰もゐませんか——驚いたなあ、開けツ放しにして何處へ行つたんだらう、——ではちよいとお借りしますよ。

と、鏡の前へ立ち自ら湯を汲んで顔をあたりだす。

あるじの彌七がぶらりと歸つて来る

彌七 おや。

六郎 今日は、誰もゐないから一寸御免蒙つて、

彌七 そいつはすまなかつた、さあ、どうぞ

（椅子を直す）

六郎 いよいよもう半分刺つちやつたから彌七 でも折角だから。

六郎 なアにこの方が勝手だ、小父さんにやつて貰つたらお金を置いて行かなきゃやらないだらう。

彌七 なるほど、考へたね、ハハ、ハハ、。

六郎 ハハ、ハハ、。

彌七 どうだい商賣の方は？

六郎 ぼつ／＼といふところさ、何しろ今年のは寒さが厳しい故か、人間がかちかんで了つてさつぱり出て来ないよ、まア月が代つて櫻でも咲く時分にならなきや駄目だね。

彌七 やつぱり不景氣の故もあるだらう。

六郎 ある段ぢやねえ、この温泉場位景氣のひびくところはねえよ。

彌七 俺のところだつて、二十錢三十錢の散髪代に迄ひびくんだからおそろしいよ。

六郎 なかには俺のやうな圖々しいのがあるからなあ。

彌七 ハハ、ハハ、、違えねえ、お前のやうな奴ばかりだと床屋も上つたりだ。

六郎 ハハ、ハハ、、今日は小父さん留守番か

ね。

彌七 さつき迄お桂の奴、子供をあやしてゐたツゲが、おれのゐない間に何處かへ行つたと見えるよ。

六郎 小父さんも苦勞が絶えねえなあ。

彌七 厄介なガキを持つたもんだよ、なまじつか器量が十人並に出来てはばかりに、男のなぶり者にされた揚句の果てにや、スボン／＼子供をひり出しやがつて平氣な顔をしてゐやがるんだ。あひるぢやあるめえし

産んだ卵の始末位出来さうなものだと思ふんだが、赤ン坊は妹のお袖に委せつきりで年中のらりくらりしてやがるんだから泣きたくもなるだらうぜ。

六郎 全くあんなお人好しも珍らしいよ。

彌七 お人好しならいゝんだが、あいつのは足りねえのさ。

六郎 それにしても父親の見當位つきさうなものだね。

彌七 そりやあいつにだつて心當りはあるだらうが、いくら脅しても云はねえんだよ、てつきり大三の奴と睨んぢやゐるんだが、こいつばかりはうつかりした事も云へねえ

彌七 お桂けいの奴やつ又何處どこかへおッ投なり出だして遊あそ

お桂　ちやんと寢かしつけて出て行つたんだ

桂 袖ちやんだつてもう少し見てくれても

よきそうなものだわ。

彌七 お袖の知つた事ぢやねえ、自分の子は自分で始末しろ。

お桂 (小聲で) 面倒くさいや。

彌七 な、何だと。

六郎 お桂ちゃんお前さん、そんな減らず口を叩くものぢやないよ。

彌七 おい、お前近頃又桔梗屋の客と逢つてるさうだが、めつたな眞似をするや背かねえぞ。

お桂 あら、嘘よ。

彌七 嘘ぢやねえ、俺やもう何から何までぢやんと知つてゐるんだ。

お桂 六さんがしやべつたんでせう。

六郎 おりやア知らねえよ。

お桂 さうだ、あたいが云ふ事を肯かないもんだから目の敵にしてゐるんだわ。

六郎 人聞きの悪い事を云はないでくれよ、俺がいつお前さんを口説いた。

お桂 餘計なお世話かをする暇があつたらせいゝおとらさんでも可愛がつておやりよ。

六郎 それこそ大きにお世話かいだ、おとら

は大三の嫁ときまつたんだ。

お桂 え、大三さんと？

六郎 二三日うちに祝言だよ。

お桂 ほ、本當。

六郎 本當だとも、いやだよそんな恐かない顔をして呪んぢや、おゝこわいゝゝ、と、

仰山さうに云ひ作らはいる)

お桂 六さん、(と窓に寄る)

彌七 お桂。

お桂 え？

彌七 そこへお坐り——お前大三の事といふとムキになるが、もしやあの子の父親は大三ぢやねえのかい。

お桂 ……………

彌七 どうせ初めからお前をなぐさみ物にするつもりでゐるんだから、それならそれと早く云つてくれ、ば俺にも見があるんだ、隠さねえで打聞けてくれよ。

お桂 ……………

お袖 お袖が歸つて来る。

お袖 赤ちやんぬないよ、あッ姉ちやん、赤ちやんは？

お桂 ……………(知らないで頭をふる)

彌七 目つからないかい。

お袖 え、何處へ行つたんでせう。

お桂 あたいは袖ちやんがお守してゐるとばかり思つてゐたの。

お袖 あたいは姉ちやんがお守してゐるとばかり思つてゐたの。

彌七 おかしいなあ、忘れえことになつたぞ現在こゝへ置いたものがなくなるつて譯がねえ。

お袖 姉ちやん赤ちやんをおいて何處かへ出掛けたんでせう、ひどいわ、そんなお母さんてないわ。

お桂 お前こそどこへ行つたのよ、何故ちよいゝ歸つて赤ちやんを見てやらないんだよ。

お袖 あたいの知つたことぢやないわよ、姉さんが餘り赤ちやんを粗末にするからいけないんだわ。

お桂 あたいが何時粗末にしたの。

お袖 粗末にしてゐるわよ、しよつちう草原へ投り出して知らん顔をしてゐるぢやないの

お桂 お前こそしよつちう處めて泣かしてばかりゐるぢやないか。

お袖 姉さんこそだわ、姉さん位わからず屋のお母さんはないわ。

お桂 何だいチビ。

お袖 チビで悪かつたね、あたいた無し子は産まないよ。

お桂 何ッ。

と、いきなりお袖につかみかゝる。

お袖泣く。

彌七 驚いてお桂を押しなだめる。

彌七 止さねえかい、自分の悪い事は棚に上げて、妹を虐める奴があるかい——

お桂 だつて口惜しいんだもの、畜生！（と泣く）

郵便配達夫の新太が赤ん坊を抱いて出る。

新太 みんな、何處へ行つてたんだな、おりやアそこらぢう探し歩いてゐたんだぜ。

彌七 おや、家の赤ん坊ぢやねえか。

新太 さうさ、一人でギャン／＼泣いてるから、投つておく譯にも行かねえし、お桂さん

に手渡さうと思つて今迄駆け廻り歩いてゐたんだよ。あゝひどい目に逢はせやがつた。

彌七 そいつはすまなかつたなあ。

新太、赤ん坊をお桂に渡す。

お桂 受取つてジャケンにボンと叩きつける。

赤ん坊泣く。

お桂 あたいもうこんな赤ん坊を育てるのはいやだよ。

彌七 馬鹿、何を云つてるんだよ、おゝよし泣くんぢやない、（と抱いてあやす）

新太この體を見て呆氣にとられ、こそくとはいる。

お桂 お父さん、たつた今赤ん坊を返しておくれ。

彌七 返すつて、ど、何處へさ？

お桂 父親のところへ。

彌七 父親？ そいつが分らねえから今日まで口を酸つばくして尋ねてゐるんぢやねえか。

お桂 云ふよく。今日こそみんな云つて了ふよ、そいつはね——そいつは大三の子なんだよ。

彌七 大三？

お桂 あたい、今日迄あいつの云ふ事を眞に

受けて、黙つてさへゐたらきつと嫁にしてやると云ふもんだから、じいッと辛抱してゐたの、だけどあたいた張り騙されてゐたんだわ、その子が憎くはないけど、あいつの子だと思ふと憎くつて／＼、早く行つて返しておくれよ、かまふ事はないから叩きつけておやりよ。

彌七 きつとそれに相違ねえか。

お桂 あいつの前へ突きつけてグウの音も出ないやうにしておくれよ、もう一時もこの子の顔を見るのはいやだから早く返しておくれよ、ようお父さん。

彌七 よし、これからすぐにあいつの處へ押しかけて云ひたいだけ云つてやるから待つてるよ。

と、彌七赤ん坊を抱えてはいる。

お袖、姉の顔色を伺つて親しく笑ひかけながら、

お袖 ほんとに大三さんの子なの。

お桂 ……………

お袖 ほんと？ あら姉さん、まだ怒つてゐるの。

お桂 ……（かぶりを振る）

お袖 さつきはごめんなさい、あたいが云ひ過ぎたんだからごめんなさい。

お桂 いゝえ、あたいこそだよ、今日は少しむしやくしやしてるもんだから。

お袖 どうして？

お桂 どうして？

お袖 姉ちゃんも赤ちゃんを大三さんにやつてもいゝの。

お桂 いゝの、あんなもの欲しくない。

お袖 あたい欲しいわ、だつて可愛いゝんだもの、姉ちゃんだつて可愛いゝくせにあんな真惜しみばかり云つてゐるわ。

お桂 可愛くない。

お桂 嘘、嘘々

お桂 (ムキになつて) 可愛いくないといふのに。

お袖 だつて姉ちゃんが生んだんぢやないの、お母ちゃんになつたらもつと赤ちゃんを可愛がらなきゃいけないわ、お父ちゃんはなかつたつてかまはないから、姉ちゃんも二人で大事に大事に育てませうよ、ねえ姉ちゃん——

お桂 ……(身につまされてホロリとする)

お袖 あら泣いてゐるの。

お桂 さうぢやないわべと、衝と立つて鏡に向ひ顔を直す)

お袖 怒つたの、ごめんなさい。

お桂 怒りやしないわ。

お袖 そんならいいけど。

窓の外を人見が通る。

お桂、鏡に映つた人見を見て、呼びとめる。

お桂 (鏡に向つて) あら。

人見 (窓の外で) やあ、先程は。

お桂 おはいりなさいな。

人見 いゝかい。

お桂 誰もゐないの。

人見 人見はいつて来る。

お袖 お袖お辞儀する。

人見 今日、袖ちゃんだつたね。

と云ひ乍ら椅子にかけて巻煙草に火をつける。

人見 お父様は。

お桂 一寸。

人見 (頭を撫でゝ) ついでにあたつて貰はうかな。

お桂 私がやつてあげますわ。

人見 大丈夫かね。

お桂 どうですか、ホ、。

とお桂手拭を襦袢代りに剃刀を磨ぎはじめる。

活動寫眞の樂隊。

お袖手持無沙汰にポカンとしてゐる

お桂 (お袖をはかきうとして) 袖ちゃん、活動の町廻りだから行つてごらん。

お袖 つまんないわ。

お桂 何故——行つておいでと云ふのに。

お袖 ……(かぶりをふる)

人見 今夜活動へ行かないかい。

お桂 行くわ、連れて行つて下さる。

お袖 あたいも。

お桂 あたいは若旦那と一緒に行くから袖ちゃん誰かに連れて行つてもらつたらいいぢやないの。

人見 そんな事云はないで、袖ちゃんも一緒に連れて行つてやらうよ、僕と一緒にだとお父さんが又やらないと云ふかも知れないから、日が暮たら袖ちゃんも二人でこつそり僕らの宿へお出でよ。

お桂 それがいゝわ、袖ちやんしやべつちや

いやよ。

お袖 あたい、いつしやべつて。

お桂 ぢや連れて行つてやるから、すぐに行

つて藝題を聞いてお出で、早くだよ。

お袖 いゝわ。

とお袖 バタ／＼駈出す。

人見 ハハ、そんなに邪魔にするものぢや

ないよ。

お桂 だつて——察しがないんですもの。

人見 早くやつとくれよ、お父さんが歸つて

来るといけないから。

お桂 かまやしないわ、お客さんですもの、

その代りあたいは下手よ、少し位痛くつて

も我慢して下さいね(とシヤポンをつける)

人見 だ……大丈夫かい。

お桂 大丈夫ですよ、でも癪に障ると少し位

切つちやふかも知れないわ、切つちやいけ

ない、ホ、ハ、ハ、若旦那の顔はきれいな

ほんとにきれいな。

人見 お桂さんこそきれいだよ、僕は時々お

桂さんの頬を針かなんで一寸づゝいて見

たくなる時があるんだよ、どんなにきれいな

血が出るだらうと思つてね。

お桂 (うれしそうに) あら、さうかしら。

人見 だつてお桂ちゃんやうな人がゐるか

ら僕はこの温泉を踊るに踊れないぢやな

いか。

お桂 (恥かしうに) そんな事はないわ。

人見 ハハ、だがお父さん僕等の事を感

付いてやしないかい。

お桂 いゝえ。

人見 でも僕と逢つちやいけないと云ふん

だらう。

お桂 えゝ。

人見 それぞらん、やつぱり知つてゐるんだよ

お桂 知れたつてかまやしないわ。

人見 いかんよ、こんな事ア、ぼろつとこ

祕密の中で手さぐりてやつてなきや、大ッ

びらにされちや面白くもなし、それに僕は

迷惑だよ。

お桂 だつて萬一皆に知れた時は覺悟がある

つて、いつかもおつしやつたぢやないの、

その時はきつとお嫁さんにしてやるよつて

嘘——?

人見 嘘ぢやないよ。

お桂 ぢやア——ぢやア知れたつていゝぢや

ありませんか、あたゐその時は若旦那のあ

れよ、そしたら丸鬚に結はうかしら——い

けない?

人見 フ、。

お桂 ホ、(ふと赤ん坊の事を思ひ浮べて)

でもあたゐ駄目かも知れないわ、あたゐに

は悪い事が一つあるのよ。

人見 何だね。

お桂 (云ひ憎うに) あの——あの、あたゐ

には赤ん坊があんの。

人見 ハハ、それならもうぢやんと知つて

るよ、お桂さんも随分浮氣者だね。

お桂 あら、さうぢやないんだけど、出來ち

やつたんだから仕方がないわ、今にあんな

もの何處かへやつちまひますわ。

人見 そんな事をしぢやいかんよ、赤ん坊は

やつぱり母親の手で育てなくちや。

お桂 でも邪覺ツけて／＼ちつとも可愛いく

ないんですもの、あたゐ赤ん坊がないと本

當にさつぱりするんだけど、だから時々癪

にさわつておッ投り出してやるの、面白い

わ。

人見 きらいだ〜と云つてるうちに、又す
ぐ新しいのが出来るよ。

お桂 (十分に嬌態を見せて) いゝわ〜、
今度産れたらあたいたい可愛がるわ。

人見 ハ、ハ、ハ、おい、早くやつてくれなき
や石鹸が乾いて了ふぢやないか。

お桂 あら〜ごめんなさい。
とお桂人見の顔に剃刀をあてる。

彌七が赤ン坊を抱いて悄然と歸つて
来る。

お桂人見を庇ふやうに彌七に脊中を
見せて剃刀を動かしてゐる。

彌七大きく溜息をつく。

お桂 みた？

彌七 みたよ。

お桂 どうして？

彌七 とんだ赤恥をかゝされたよ、おりやこ
の年になるまでこんな思ひをした事はねえ
よ、ろくでもねエ父なし子を産みやがつて
揚句の果に年寄のおれ迄引合に出しやがつ
て、

お桂 ……………(人見に氣をかねて云つてく
れるなと目て仕方)

彌七 かまやしないよ、人前でても云つてや
らなきや身に泌みて聞かねエから、今日は
うんと云つてやるんだ、一體誰の子だ。

お桂 ……………

彌七 父親は何人あるんだ。

お桂 一人だよ。

彌七 でも當人は知らないと突ツ張つてゐる
ものをどうするんだ。

お桂 (キツとなつて) 知らない？

彌七、知らねえどころか、血迷つちやいけね
エつてあべこべに逆振を食はせやがつたよ

お桂 ぢや、あたいが行つて来る、あたいが
行つて談判して来る(と剃刀を持ったまゝ
行きかける)

彌七 あいつだといふ慥な證據があるのか。

お桂 證據？

彌七 それ見ねエ、耻をかきに行くやうなも
んだ。

お桂 いゝえ、あいつの子だ、あいつに違ひ
ない、あたいが行つてこの子を押しつけて
来る、畜生(と子供を邪艷に抱き取らうと
する)

彌七 (遮つて) 莫迦、止さねエかい。

その拍子に赤ン坊が泣き出す。

彌七 おろ〜とあやす(この間に人
見幾度か歸らうとするが、流石に行
きかねる)

彌七 (泣く子をあやしなながら) お前一寸抱
いてやれよ。

お桂 いやだよ、そんなもの。

彌七 何ツ。

お桂 だつてお客様に悪いぢやないか。

彌七 お客様はおれがやるよ、それおれがあ
やしたつて云ふ事を背かねえんだから。

お桂 (代らせまいとして) いやだつたら、
もうすぐすむから、待つとくれよ。

彌七 ろくな仕事も出来ねエ癖に何を云つて
るんだ、そら、早くしろよ。

と無理に子供をお桂に抱かせ、代つ
て剃刀を取る。

お桂 いや〜抱いて邪慥にあやす、
子供泣きやむ。

人見 (彌七の顔を見上げながら) 今日は。
彌七 ……(呆氣に取られてじつと見下す)

人見 さつき来たんだけど、親方がゐないも
んだから。

彌七 フン、おねエ方がおあつらひさ。

人見 こ困るなあ親方。

彌七 おれの仕事はお桂と違つて少しぞんざいだから、さう思つておくれ（とゴシ／＼やり出す）

人見 痛いなあ。

彌七 ごめんよ、今日は少し氣が立つてゐるもんだからね、何しろ二十錢か三十錢の散髪代で娘にキツカケをつけやうてえ奴ばかりなんだから、それにこいつが少し薄ぼんやりと來てるから誰の云ふ事でもすぐ眞に受けるんで、油斷も隙もあつたもんぢやありませんよ、そんな奴は少し懲らして置かねエと癖になるからね、ごらんの通りあつしやこうして剃刀を持つてるんだ、ナスツとやる分にや雑作ばねエ、ハ、ハ、ハ。

人見 ぼ、僕は違ふよ、僕はそんな人間ぢやないよ。

彌七 お前さんがさうだとは言はないが、餘りからかはれるといくらお人好しの俺でも黙つちやゐられねえからね。

人見 ぼ、僕に限つて決してそんな——彌七 そちやないと云ひなさるのかね、フ

ン、口先ぢやごまかされねエよ（とグイと頬のあたりを握り上げる）

人見 痛いッ。

お桂 若旦那に限つてそんな方ぢやないわ、今にあたいを大ツびらで若旦那の何にしてやるつて、あたいもうちゃんと約束しちやつたのよ。

彌七 馬鹿野郎、お前一體何人父なし子を産むつもりだ。

お桂 此度こそ大丈夫、ねエ若旦那、さうてすわね。

人見（ビク／＼もので）そ、そうだと、お父さんさへ承知なら、僕あ——僕あ何時でもお桂さんを貰ひますよ、貰つて上げますよ。

お桂 それごらんさい。

人見 僕もいつか一度はお父さんに云はう／＼と思つてたんですけど、まだその時期ぢやないと思つたもんだから、しかし東京の宅ぢやもうお桂さんの事を承知して身分は違ふが、お前がそれ程熱心なら連れて歸るのに異存はないと云つて來てるんです、少く共僕はお桂さんだけにそんな浮つい

た氣持はみじんも持つちやゐませんよ。

彌七 それが本當だと好いんだが。

お桂 あら、嘘だと思つてるの。

人見 ぢややつぱり僕の事もそこいらの氣紛れ者と一緒に見てるんでね。

彌七 さうぢやねエけど、話が餘りだしぬけだもんだから——

お桂 あ——私達はどうとつくに約束してんのに、お父さんが知らなかつたんだね。

彌七 馬鹿——（人見に）お前さん、この剃刀がこわくつてその場逃れを云ふんぢやねエだらうな。

人見 そ、そんな事ありませんよ。

彌七 それが眞實ならお桂は差し上げませう東京へなり何處へなり連れて行つてやつて下さい。

お桂（有頂天になつて）まアいゝの、一緒に行つてもいいの。

彌七 うるせえ、お前はあつちへ行つてろ——親の口から云ふのもおかしなもんだが、こいつは御らの通りのお人好しで、すぐに男の口車に乗りやがつて、あつしやおかげで何處此の村から逃出さうと思つたか知

れやしねエ、此度だつてさうだ、父なし子
を孕みやがつて、さんざ笑はれた揚句、先
方ぢや涼しい顔をして、薄ノロに子供を産
ませる程もうろくしちやぬねえと吐かしや
がるんだ、俺あ胸が養えくり返つて、畜生
今に見ろ、大名華族の胤を宿してうぬらを
土足にふみつけてやるからつて、惜けねえ
氣がかなり置らしても、口惜しくて云
つた後から涙がポロ／＼出て止め度がねえ
んだ、そこへ持つて来てお前さんの今の話
だ、嘘でもかまはねエ、おらア、たつた一
遍娘に丸鬚を結はして、りつばな奥様にし
て、どんなもんだいと云つてやらなきや死
んでも死にきれねえんだ。
人見 む、むろんですとも。
彌七 おらア、もう一時も娘をこの村に置く
のはいやだ、早く連れて行つて下さい、お
らアその時は村中へふれを出して、ありつ
たけの金をみんなぶちまけて、あいつを日
本一の花嫁に仕立てゝ、アツと云はしてや
りてえんだ、おらアもうこうなりや何にも
入らねエ（と泣く）
お桂 ……（引き入れられて、シク／＼泣く）

彌七（泣き笑ひ）ハハ……何が悲しくて泣
きやがるんだ。
お桂 だつてお父さん（と泣く）
人見 分りました／＼、ぢや明後日、明後日
東京へ立ちませう、お桂さんと一緒に立ち
ませう。
彌七 ぢやこんなものでも女房にしてくれる
んですね。
人見 勿論です。
お桂（いそ／＼と）まア、明後日はあゝ私
どうしやう（人見の前へ跪づいて）若旦那
ありがたうございます。
彌七 ハ、ハ、お前もううれしいかい、ハハ、
、……。
と彌七喜ぶはづみに、夢中になつて
人見の髻を半分刺り落してしまふ。
人見「アツ」と叫ぶ彌七、驚いて手
を離す。
人見 あツ、髻を半分落して了つた。
彌七 あツ、しまつた。
お桂 人見の顔を見て笑ふ。
彌七 嬉しまぎれにつらつかりしちやつて
何とも申譯ありません。

人見 馬鹿、いくら詫びたつて元通りになる
かつ。
とムツとして入りかけ思ひ返して有
り合ふ剃刀で片方の髻を無難作に落
して、そのまゝ憤然と入つて了ふ。
二人あつけに取られる。
彌七 と、とんでもない事をしちやつたよ。
お桂 早く行つて詫びておくれよ、若旦那を
怒らしたらあたいが困るんだから早く行つ
て詫びておくれよ。
彌七 何と云つて詫びたらいいんだか、困つ
たなア——もし若旦那待つて下さいよ
お桂 若旦那。
と兩人人見の後を追つてはいる。
突然赤ん坊が火のついたやうに泣き
出す。
——廻る——
第二場 停車場
舞臺、温泉場らしき停車場の内側。
下手改札口、正面下手改札口、正面上手は
外よりの出入り。
上手に小荷物受付のガラス戸、中央にスト

一ツ、床几二三脚、夜、十時過ぎ。

電燈ともる。

おかみさん風の女が、一人ぼつねんとストープにあたつて居る。

温泉客を先きに宿の女中がトランクを提げてついで出る。

女中 今晩は、——どちらへ。

女 一寸、急用で。

客 御苦勞々々、もう歸つてもいゝよ。

女中 どうせ用なしですからかまひませんわ。此度はいついらつしやいます。

客 さア、温泉場気分はやつぱり秋としたものかね。

女中 此度は是非奥様も御一緒に。

客 奥様は鬼門だよハ、(時計を見て)もう終列車に間がないのに、いやにひつそりしてゐるんだなあ。

女中 此頃温泉場も、めつきり暇ですからね。それに田舎の事ですから、餘り乗る人がないんですよ。

客 寒いね。

女中 (ストープをのぞいて) おや、ストープが消へかゝつてゐるんだもの。

客 どれ、わしが燃やしてやらう。

と、客バケツの石炭を、投込む、ストープ燃えさかる。

宿屋の客引六郎が出て来る。

六郎 おや、まだかな。

女中 誰さ。

六郎 床屋の彌七さん。

女 彌七さん、何處かへ行くの。

六郎 あそこの娘が、東京へ嫁に行くんで、婿さんと一緒にこの列車でたつことになつてゐるんですよ。

女中 へえ？ あの娘さんが、赤ん坊はどうしたの。

六郎 赤ん坊のこと迄知らねえな。

女 どんなんそこへ貰はれて行く。

六郎 詳しい事は知りませんが、何でも神田の人見とか云ふ青物問屋ださうですよ。

客 人見なら、多町でも聞へた家ですよ、へえさうですかね。

六郎 そこで若旦那が、一と月程前から、桔梗屋に湯治に来てゐましてね、何時の間にか、娘と戀仲になつて、すつたもんだの揚句、人見さんの御両親も、案外もの判りの

いゝ方と見へて、それ程思ひ合つた同志なら貰つてやらふと、云ふ事になつたらしいんですよ。

女中 (客に) 一寸ふめる女でしてね、人間はとりとめのない程ぼうツとしてゐますけど、やつぱり女は器量第一ですよ。

客 そんなに美人かね。

女中 こゝらには、一寸珍らしい程の女ですよ。

女 ぢや、お桂さんにして見りや大變な出世だね、やれ父なし子を産んだとか、何んだとか、そんな噂は聞かなかつたが、彌七さんも、これでぽつと一息ついた譯だわ。

六郎 さうですとも、親父はこの二三日は、まるで有頂天になつて了つて、奥高々とふれ歩いてゐるんですよ、今夜も精一ツばい着飾らして、宵の中から暇乞ひに歩くやらいやもう大變な騒ぎで、

客 ぢや、その娘さん達と同じ列車で東京へ行ける譯だね、こいつは有難い、せいゝ甘つたるい處を、拜見に及ぶかハ、ハ、ハ、

女中 結構でございますね、ホ、ハ、ハ、

彌七を先きに美しく着飾つたお桂赤

ン坊を貰つたお袖、つゞいて見送り
人大勢出て来る彌七は信玄袋、その
他お桂の荷物を持つてゐる。

六郎
遅いね。

彌七 あちらで引とめられたもんだからつい
遅くなつてしまつて、人見さんは？

六郎 まだ見へねえやうだよ。

彌七（見送り人に）、どうも皆さん態々有難
う御座いました、もう夜も更けますから、

こゝいらで引取つて下さい。

見送人おなつ お桂さん、あちらへ行つたら
又ちよい／＼お便りを下さいな。

お桂 おなつさんも東京へ出たついでに、き
つと寄つて下さいな。

おなつ えゝ寄せてもらひますとも、其節は
うんと御馳走を頂きますよ。

女 彌七さん此度は大變なお目出度さうで
彌七 よ、これは／＼、何しろお前さんお桂

の奴が、人見さんと云ふ東京の、どえらい
金持から、たつての所望で、まさか斷るわ

けにも行かず、てんでこ舞をしましたよ。

女中 お目出度う。

彌七 よ、これはどうも恐れ入りました、何

しろ急場の事で、いづれ祝言がすんだら、
婿と二人で歸つて来る事になつてゐるから
その節はお前さんの、とこの廣間でも借り
て披露をしねえことにや、とても追つつき
ませんよ、ハ、ハ、ハ。

女 しかしお桂さんも大變な出世だね。

彌七 全くどうも夢見てゐな話で、今日迄は
こいつの事で、きんざ苦勞をしましたたが、

今日と云ふ今日はバツとかう、お天道様が
さし出たやうな氣持ちでしてね。

おなつ お袖ちゃんも當分淋しいね。

お袖 あたいも一緒にいきたいんだけど。

お桂 すぐ歸つて来るから、いゝぢやないの
お袖 だつて淋しいんだもの、（涙）

お桂 あたいだつて淋しいね、袖ちゃんも身
體に氣をつけてね。

お袖 姉ちゃんもね。

出札口が開く。

客、かみさん風の女、切符を買ふ。

六郎 人見さん、どうしたんだらふね。

彌七 まさか時間を間違へた譯ぢやねえだら
ふな、すまねえが、誰か一走り桔梗屋へ行

つてくれねえか。

見送人 よし、おれが行つて来る（と駈けて
入る）

乗客二人ばかり急ぎ足に出て切符を
買ふ。

六郎（時計を見て） もう五分しかねえよ。

おなつ のんきな婿さんだね。

一同笑ふ、お桂とお袖、改札口に立
つてゐる。

彌七（いら／＼しながら）、何をしてゐるん
だらう、お前一と走り行つてくんないか。

六郎 よし来た、（と駈けて入る）

改札口が開く。

驛夫一人／＼を改札し初める。

彌七しきりにいら／＼する。

列車の音次第に近づく。

驛夫 彌七さん、誰を待つてゐるんだね。

彌七 お婿さんだよ。

驛夫 人見さんの事ぢやないかい。

彌七 さうだよ。

驛夫 人見さんなら、さつきの列車で立つち
やつたよ。

彌七 え？

驛夫 お前さんに此の手紙を渡してくれつて

(と手紙を出す)

彌七 周章で受取る。

一同 固唾をのむ。

彌七 封を切る。中から更に一封。

彌七 (讀む)、さよなら、手切金のつもり十圓也、——あッ。

一同 えッ。

彌七 は一封を握りしめたまゝ仁王立になる、

お桂 顔を背向けて床几に突伏す。

彌七 おりや、桔梗屋へ行つて、おねえ迄も様子を探つて来るから、それ迄、此處で待つてろよ、と駈けて入る)

乗客二三人改札口を出て入口へ引込

む。見送り人顔見合せて吐息づく。

發車の汽笛。列車の進行。

お桂 ふと起つて改札口へ行きかける

お袖 姉ちゃん、(とすがる)

お桂 ……無言でグイとお袖を抱く)

お袖 姉ちゃん、どうしたの、姉ちゃん。

お桂、涙も見せず化石したやうにお袖を抱いてゐたが、やがて、グタリ

と床几に腰を落す。

お袖、痛ましきやうに姉の姿を見て一

人シク／＼と泣く。

彌七 が引返して来る。

彌七 (淋しきやうに) お桂、歸らふよ。

お桂 (おもむくに顔を上げて) お父さん。

彌七 今度はお前が悪いんぢやねえ、おれが頼んで騙されたんだ、おれ達のやうなお人

好しは騙され通しに騙されて、いつも夢を見てゐるのさ、ハ、ハ、ハ、さ、仕方がないから諦めて歸らう。

お桂 ……(頭をふる)

彌七 何、歸らん。

お桂 あたい、もう少し待つてゐるわ。

彌七 誰を。

お桂 人見さんを、あの今にきつとやつて来るわ、あの人に限つて騙しやしないわ。

彌七 人見さんはさつきの列車で行つて了つ

たんだよ。

お桂 でもあたゐ、あの人はそんな人ぢやないと思ふわ、一日でも二日でも、こゝにち

つと待つてゐたらきつと来るわ、あたゐそれ迄待つてゐるわ。

彌七 馬鹿だなあ、お前は、お前は本當に、子供見てえな奴だなあ。

お袖 姉ちゃん歸らふよ。

彌七 あゝ歸らう／＼、さあお桂、歸るんだ

(と手を執る)

お桂 いや／＼、私は歸らない(とベタリとそこへ崩れ折れる)

彌七 聞分けがねえなあ、おい。

お袖 姉ちゃん歸らふよ。

お桂 ……(頑なに動かない)

彌七 ひそかに泣く。

お袖 姉ちゃん。

彌七、ひそかにお袖の手を曳いて一旦入つたが、すぐ引返していたまじさうにお桂を見守る。

靜かに月光——お袖の唄ふ子守唄。お桂、われに返つてしまふと聞く

お桂 (母に返つて) みいちゃん。

彌七、衝ツと寄つてお桂を勞はる。

お桂、聲にそゝられてむせび泣く。

——幕——

劇壇往來

關西大歌舞伎

—— 座 ——

三月一日 初日
毎日二時開幕

【狂言】 通し狂言「佐倉義民傳」七幕、

江戸屋敷門跡より堀田邸怪異まで・淨瑠璃
「新荷雪問の市川」常磐津連中・新作大森
痴雪作長右衛門市之返「花巴」一幕

【配役】 植村隼人、渡シ守甚兵衛、宗吾
女房おさん、百姓十作、腰元綾衣實ハおさ

ん亡靈、山姥、遊女市之返(魁童)植村要人、
久世大和守、幫間夢平(霞仙)井上河内守、
島屋女房お才(成太郎)名主麥作、堀田上野
之介正信、島屋亭主新兵衛(徳三郎)四代將
軍徳川家綱、怪童丸後ニ坂田金時、長右衛
門妹お小夜(扇雀)幻長吉、糸屋孝吉(橘三
郎)庄屋米作、榊原式部少輔(八百藏)百姓歟
藏、村の女房お岸、伊丹肥前守(芦鷹)百姓民

藏、秋元但馬守、所化覺蓮(魁童)百姓豐作、

市橋下總守、見廻り役人伴藏、所化雲念、職

人喜平(美鷹)百姓市郎兵衛、稻葉丹後守、職

人勝造(延郎)百姓仁右衛門、南部遠江守、腰

元春枝、京屋お初、村右衛門(名主半十郎、松

平伊豆守、伯父安兵衛(長太夫)宗吾悻彦七

(小鷹)松平右京太夫、村の女房おひく、職

人重助(奥山)近侍中根親負、臣金井左衛門、

小姓金彌(みのる)百姓勘之助、青山伯耆守

(右文次)寛永寺住職、百姓かゝおきよ、友

達鯨屋與平(升藏)三橋五平次、三浦志摩守、

糸屋手代政七(鷹正)金澤勘解由、印旛沼喜

右衛門、大和屋亭主惣右衛門(大吉)上岩橋

村名主木内宗吾、佛光寺然、宗吾之亡靈、分

家堀田式部、想夫斧藏實ハ三田の仕、鰐屋

長右衛門(延若)

第一劇場

—— 浪花座 ——

三月一日 初日
毎日四時開幕

【演物】 第一、大阪毎日新聞社校閲、日露

戦役二十五年記念、田中總一郎作「日露戰

争」十一景・第二、山本有三作「坂崎出羽

守」三幕五場・第三、門脇陽一郎作「あひ

る女」二場・第四、佐藤紅綠作、田中總一

郎脚色「麗人」十二景

【配役】 乃木將軍、坂崎出羽守、石濱辯護

士(壽三郎)看護婦長、刑部卿局、虎子(三好)

娘の二、百合子(若宮)女の二、照子(六條)女

の二、主婦風の女、お玉(香取)杉山の女房、

千姫、頼子(石河)丸尾先生、金地院崇傳、彌

七、水原七郎(藤村)校長先生、徳川家康、六

郎、蕎麥小坂(小笠原)小村全權、本多正純、

黑津專三、裁判長(元安)森田少尉、松川源六

郎、六藏(吉田正)軍醫、南部左門、作兵衛、檢

事(前田)茶道二(眼童)杉山、人見(高田)中

村少將、ロオゼン男爵、本多正信、松原(進

藤)兵事係、茶道一、客、大町男爵(豐之助)屑

屋、侍ノ二、八兵衛(山中)川上事務官、三宅

惣兵衛、新太、月海和尚(吉田豐)津野田大尉

本多平八郎忠刻、淺野正樹(山口)お桂(筑

波)お袖(高尾)

松竹家庭劇

—— 角座 ——

三月一日 初日
毎日晝夜二回開演

三 月 の 劇 壇

【狂言】 第一川竹五十郎作「撥物利用」

三場・第二八方園福松作、村瀬仁三郎脚色
「モボ爺とモガ婆」一場・第三茂林寺文福作
「日露戦争」三場・第四門脇陽一郎作「おも
ちや車」二場・第五川竹五十郎作「花か霞
か」一場

【配役】 母親加代子、山田隆平、久保田六
平(十吾)谷口秀夫、先夫六太郎、三浦勇(天
外)舞臺監督、西常吉(天照)兄良助、家主
山岡浪、原佐吉(一郎)豊川新左衛門、隣りの
男、佐々木、川村政敏三樂、隠居平助、谷口良
兵衛、孫一(致雄)市松、小野登、川村敏雄(三
郎)砂井博、川浪秀雄、師團長(富士鳥)後家
お龜、女房お庄(紫鳥)砲台長(十九郎)郵便
夫林、豊川正、大隊長、若者甲次(銀彌)大砲
煎餅屋、小隊長、仲人小村(八四呂)男衆神尾
春野むら(時彌)婿一太、學生A(名村)木崎
兵造、柴田少尉、俳優市田、齊藤元吉(賀川)
若き寡婦ふさ子、娘萬里子、東妹るり子、お
針子よしの(春日)妻およし、楠山榮子、女房
お仙(桃谷)友里子、妾政江、とみ江、娘静子
(如月)後家お勝、妻おぶん(米津)

近 代 座

樂 天 地

二月二十八日初日
十二時・五時二回開幕

【狂言】 第一福原勝也作軍事劇「二〇三
高地」三景・第二瀬川春郎新作連鎖劇「高
橋お傳」全通し

【配役】 高橋お傳(五月信子)村上中尉、
お傳の情夫浪之助(原健作)小島上等兵、市
着切市奴、僧源空(大倉文雄)友安少將、勝沼
の源次(玉川秀作)自井大佐、旅僧空善中村
武夫、山田軍曹、お傳の許嫁濱二郎(山田一
郎)小澤伊兵衛、主婦おつる(満喜國春)田中
副官、後藤吉藏(朝香春彦)傳令兵、僧空圓
(井田昌太郎)乃木少尉、子分三三三郎、有本太
平(戸田茂作)軍司令官從卒、巡邏(香山晃)
遠藤伍長、子分龜吉、番頭久八(麻布伸)傳令
兵、刑事(有馬光)尼僧妙眞、女中お杉(村田
靜子)尼僧妙香、半玉ばたん(月浦かすみ)尼
僧尼全、藝妓妻吉(鴨川富士子)茶屋の娘、森
千枝子(近所の人)大月小夜子、尼僧妙倫、女
中おりよ(月路笑子)院主妙俊、夜鷹のお君
(秋田信子)女中おきよ(平田たま子)近所の

人(丘雪子)大山詣り(月澄子)尼僧妙香、藝
妓小染(月橋喜久子)主婦お常、夜鷹お蝶(富
士川満恵)お傳の妹おつき(小松孝子)お傳
の父勘左衛門(高橋義信)

幸四郎・勘彌一座

松竹劇場

三月一日初日

【狂言】 第一義經千本櫻「碇知盛」一幕
第二歌舞伎十八番の内「矢の根」一幕・第
三所作事「連獅子」一幕・第四小山内薫作
「與三郎」一幕・第五「積戀雪關扉」一幕

【配役】 相模五郎、狂言師左近後ニ子獅
子の精、切られ與三郎、良峯宗貞、傾城黒染
實は小町櫻の精(勘彌)銀平女房實は典侍局
曾我十郎祐成、法華僧、小野小町(芝鶴)龜井
六郎、宿役人六兵衛(守藏)下女おつる實ハ
官女、手代伊之助(右衛門)伊勢三郎(品作)
下女お梅實ハ官女(美鶴)伊豆喜兵衛(彌三
郎)下女お花實ハ官女(鶴太郎)式藏坊辨慶、
馬士畑右衛門(錦四郎)入江丹藏、大薩摩文
太夫、淨土僧(しうか)家來運平(高麗五郎)
駿河次郎(尉斗藏)常陸坊海尊(傳鶴)片岡八
郎、宿役人七助(嘉妓)夜蕎麥賣(彌五郎)九

郎判官源義經、曾我五郎時政、會津屋下男半助(三升)渡海屋銀平實ハ新中納言知盛、狂言師右近後ニ親獅子の精、伊豆屋下男忠助、關守關兵衛實ハ大伴黒主(幸四郎)

左團次一座

京都・南座

三月一日 初日
午後三時 開幕

【狂言】 一番目「箱根露臉壁仇討」二場歌舞伎十八番の内「關羽」中幕岡本綺堂作「修禪寺物語」一幕・所作事「高野物狂」二番目岡本綺堂作「番町皿屋敷」一幕・大喜利喜劇「離れもの合せ鏡」一幕

【配役】 瀧口上野、惡七兵衛景清後ニ關羽、面作師伊豆夜叉王、青山播磨(左團次)下田五郎景安、青山の腰元お仙、林喬作(建升)非人なまここの八、修禪寺の僧、用人柴田十太夫、近藤源之進 左升)刻川久馬、景清の家來周作、奴権六、源之進妻おかね(米左衛門)景清の家來倉平、山田三九郎(建十郎)後見、茶店の娘お春、茂妻升子(建若)花嫁可知子(左近)助雄妻倉子(壽美若)橋場の仁助、林助雄(團子)母早蕨、瀧川の後室眞弓、喜藏妻おや

す(紅若)勝五郎妻初花、夜叉王の姉娘桂、青山の腰元お菊(松島)娘人丸實ハ宗盛の息女明石の前、同妹娘楓(訥升改メ松建)非人あんなの次郎、梶原平次景高、金窪兵衛行親奴権次、林萬助(荒次郎)足利の家來、聖天の萬藏、媒酌人田中喜藏(段猿)駕籠昇六藏實ハ棒澤六郎、足利の家來、町田の彌作、下女お竹(團次郎)非人頭、萬助妻百江(建五郎)川島茂(壽美五郎)紳士三輪(松三郎)駕籠昇次郎八、楓の婿春彦、足利の家來、並木の長吉、友人深見清(長十郎)稚兒花若丸實ハ平松春滿(兒太郎)非人月の輪の熊、畠山重忠、物狂ひ實ハ高師四郎、放駒四郎兵衛

地方 中村鴈治郎一座

御園座三月一日・七日・静岡歌舞伎座九日・十一日・濱松歌舞伎座十二日・十四日・岐阜松竹座十六日・十八日・金澤尾山俱樂部二十日・二十三日

【狂言】 一番目食滿南北作「櫻のもと」三幕・中幕「石切梶原」一幕・次狂言「釣女」常盤津連中・二番目玩辭樓十二曲の内「梶久末松山」二幕・大喜利「乗合船」常盤津連中

【配役】 梶原平三景時、梶屋久兵衛(鴈治郎)溝口よし、松山太夫、萬歲福太夫(福助)松村七郎高直、大庭三郎景親、番所嘉右衛門才藏龜藏(右團次)結城三郎忠重、奴蝶平、醜女、分銅屋金三郎、白酒屋長作(長三郎)堀部久太郎、大工徳松(政治郎)梶原の臣東馬、藝者松代(成笑)、觀山庄司、藝者作榮、女中おはか(成三郎)堀勘四郎、濱名八郎、幫間叶札(扇)立衆、梶原の臣新吾、藝者金彌(鴈之助)種田兵門、藝者竹千代、我久三郎(藝者種松女中お昌(我久之助)織田の家臣八馬、藝者菊榮(右若)眞乳次郎、幫間夢八(市昇)金戸太郎、幫間花丸(右左次)錦部九郎、幫間才助(齋五郎)溝口七太夫、囚人喬助、爺親奉徳齊(九團次)牢役人石垣堅藏、柴田定之進(箱登羅)乳母初女、花木屋お清、母親およし(建女)青貝師六郎太夫、天満屋喜の助、但馬主膳(市藏)上臈、藝者松榮(ひとし)室綾の方、大名、船頭萬吉(駒之助)能師左近、俣野五郎景久、寮番佐兵衛、角兵衛獅子(吉三郎)織田信方、娘梢、太郎冠者、許婚おさん、通人芦仙(我童)

編輯後記

松本泰三

三月の關西劇壇は、春の絢爛に相應しい陣營をしいて、左團次一座が猿之助をも加へて來京、扇港は短日ではあるが幸四郎に勘彌。成駒家の聲が聞へないのは一寸寂しい感もするが、とまれ大阪では延若と魁車が奮闘してくれる。それに日露戦争二十五週年記念をあてこんだ浪花座の第一劇場、角座の家庭劇、樂天地の近代座に至るまで、櫓を並べた「日露戦争」劇の上場等に、バツときらびやかに咲いた京阪神の梨園は花をあざむく爛漫さに、見ぬさきから満腹、満腹。

×
左團次一座の久々來演に就て、京都方面のかたにその執筆をお願いした。例によつて高谷伸、森ほのほの二氏に山本修二氏よりも原稿を戴いた。江戸歌舞伎の研究家である大阪の倉田啓明氏からも「關羽その他」を得たほか、廿七日京都四條の菊水で催された「左團次歡迎座談會」の報告記事は面白く讀んでいたといけるものと信ずる。

×
正直にいふと本號は「左團次號」になつて仕舞つたかたちがある。別にさう意識して編輯にとりかゝつた所爲ではないが、あらはれた結果がこれだからどうしやうもない。中座の大歌舞伎開演の記事が多少手薄ではあるが、國枝史郎氏並に在阪中だつた今東光氏に依頼して「佐倉義民傳に因む考證」を得たのは何より結構だ。また高原慶三氏の「光然殺しに就て」や山上貞一氏の「延若論」もある。まアこの位のところまで御勘辯が願はしい。

×
六月初日を出す文樂座人形淨瑠璃の三の替りは、越路、絃阿彌七回忌の追善興行として開演する。なほあはせて常子太夫改めさの太夫の襲名披露もある。本誌はその「追善座談會」を計畫して、文樂座の文字太夫始めその關係者に種々交渉中であつたがつひにまとまらずして終つた事は残念である。

×
本號は寫眞編輯の關係から發行日が遅れて、申譯けがない。是も致しかたのない事だから御了承を願つておく。近く編輯部が主催して「スタデオ見學」を催すプランが出てゐる。發表の上は是非諸彦の御参加を願ふ。

昭和五年三月一日發行

月刊『道頓堀』第五十二輯

◇ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇ 郵券代用は一割増にて御注文を願ひます。

◇ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵錢五厘)

昭和五年二月廿八日印刷
昭和五年三月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

編輯者 鳥江鎮也

印刷者 松本米藏

大阪市東區橋南之町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

發行所 道頓堀編輯部

電話(一四〇〇番)
六六八五番

一南 温泉料理

御宴會には

百疊敷大廣間

御芝居の

お歸りには

皆様お揃ひにて情趣
深いおつな温泉料理

文樂座

南一食堂

洋食部
和食部

大宴會場

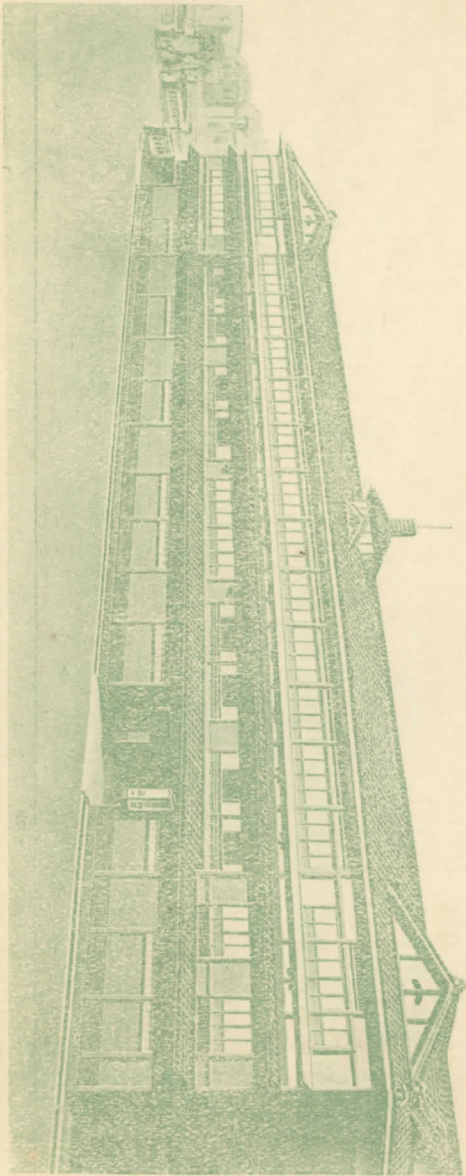
御婚禮

御披露宴

四ツ橋

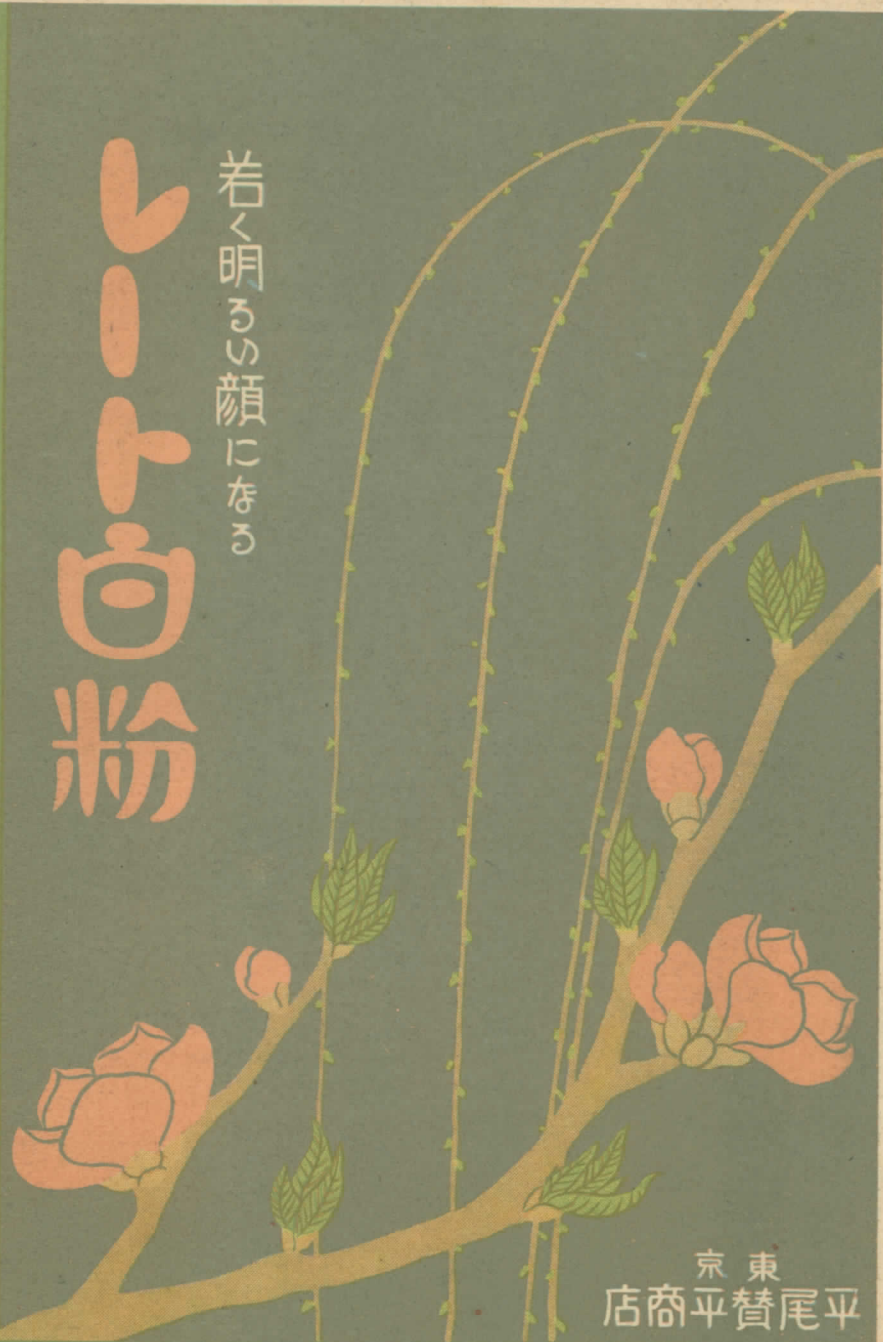
也南一温泉料理

電話南(五七七) 二一〇 番



若く明るい顔になる

レイト白粉



東京
平尾賛平商店

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年二月廿八日印刷
昭和五年三月一日發行

道頓堀第五年三月號 第四十二輯

金參拾錢 (郵一錢五厘稅)